
これは第二の人生という名のゲームだ

てんびん座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これは第二の人生という名のゲームだ

【Nコード】

N2426V

【作者名】

てんびん座

【あらすじ】

コンビニで立ち読みをしていた俺は、気が付くと真っ白な場所にいた。そして現れる美青年。こ、これは、まさか二次小説とかでよくある転生物では！？ヤッファー！！これから異世界で暴れまくってやるZE！！

神「え？転生？誰が？」

え？

初作品です。勢いで始めたので不定期更新です。

え？転生？誰が？（前書き）

初投稿ですが頑張っていきたいと思います。
では、どうぞ。

え？転生？誰が？

俺は今、見渡す限り白色が続く謎の場所にいる。

「ここはドコだ？」

確かさっきまでコンビニで立ち読みをしていたはずなんだが。

「そ、それでそこにトラックが突っ込んでね。君は死んじやったんだよ」

と、突然どこからか声が聞こえたと思ったら目の前が光った。

「驚かせてしまつてすまないね」

光が収まると、そこには見たことのないほどの美青年がいた。

なんか、このパターンは知っている気がする。

……ッ！も、もしかコレが二次小説とかでお馴染みの、

転生つてやつか……！

うおー……！やべっ、テンション上がってきたー！

こんなことあったら良いなーとは思っていたが、まさか自分で体験

できる日がくるとは思っていなかった！

「な、なんだか凄く嬉しそうだね。死ぬのってそんなに良いことなの？」

いや、嬉しいだろ普通。これから転生して俺TUEEEEEEEEE
！！とかし放題なんだぜ！！

「え？転生？誰が？」

……………え？

だって、そちらの都合で死んでしまいました！的な展開でお詫びに異世界に転生させてくれるんじゃないか？

「あはは、面白いね、君。そんなわけないじゃないか。死んだ人はみんなここに来るんだよ。」

ここで天国に行くか地獄に行くかを裁定するんだ」

テンプレな神じゃなくて閻魔大王様でしたか……………、マジ？

「マジマジ。っていうか、今日は君で最後なんだ。早く終わらせて僕も休みたいんだよ。だから潔く諦めてよ」

……………じゃ、じゃあ俺って本当にこのまま、天国か地獄に？

「だからさっきからそう言ってるじゃないか。」

そんな、嘘だろ？どうして俺が。い、嫌だ。死にたくない、まだ生きたい。

お願いですから助けてください！お願いです！助けて！！

「やっと普通の反応になった。でも、残念だけどそれは無理な相談だよ。死人を生き返らせるなんて面倒なこと、神様がするはずないだろ？大体、君を生き返らせて一体誰がどれだけ得をするんだい？

身の程を知れよ、人間」

ぞつとするほどの冷たい声で閻魔大王は言った。表情こそ笑顔だがその言葉は無情だった。

「さあ、これ以上は時間の無駄だしさつさと終わらせようか」

そう言つて閻魔大王はこちらにゆっくりと歩み寄ってきた。

「あ、あ、あ、ああああ」

恐怖で声も出ない。死が一步步近づいてくる。後ずさるうとするが、腰が抜けて動けない。そしてついに目の前にやつが来た。

「さて、君の行き先は…、」

ああ、もう駄目だ。

浮かんでくるのは学校の友達、次に我が家、最後に両親だった。母さん、親父。今まで親孝行できなくてごめんな。

「魔法少女リリカルなのはの世界に行ってもらおうか」

え
？

え？転生？誰が？（後書き）

はい、というわけで魔法少女リリカルなのはの二次小説です。
夏休みに突入してテンションが上がったために書いてしまいました。
不定期更新になるでしょうが必ず完結させるつもりなので、それまで温かい目で見守ってください。

そんな理由で…（前書き）

二話投稿です。

そんな理由で…

え？

「ほら、どうしたの？君が大好きな転生だよ？テンプレだよ？もつと喜びなよ」

い、いや、だって…、ええええええ…。

「閻魔大王とか全部嘘さ。見たとおり、僕が神だよ。本当は転生クジに君が当選したから迎えに来たんだ」

……。

「あつはつはつは！！驚いたかい？驚いただろう！
最近は転生させてあげるって言っても驚いてくれない人が多くてね。
だから僕なりに趣向を凝らしてみただけ。大成功だ！」

……つまり、俺はからかわれたと？

「そうだとも！いや、実に面白かった！」

こ、この野郎…！今までこれ以上の怒りを人に覚えたことがあった
だろうか。いや、ない…！

「まあまあ、そう怒らないで。お詫びとして、普通は三つの転生者
特典を四つにしてあげるからさ」

くっ、まあそういうことなら。

しかし特典か。それって例の能力を貰ったりするアレか？

「そうそう、何でも言ってよ。」

あ、ただし、いくつか駄目なのとかもあるよ」

駄目なのって、例えば？

「そうだね…、世界観を壊すような武器や能力の禁止。あとは特典を増やすとか、物語に出てくるキャラクターを消したりとかだね」

なら、まず一つ目は無限のk「却下」なんでだよ！？

転生といたらお約束だろ！？

「理由は二つある。」

一つ、これは僕の言い方が悪かったせいだね。世界観を壊すっていうのは、世界観からほぼはみ出てはいけないという意味なんだ」

どういうことだ？

「つまり、君はあの世界に無限の剣製なんて能力が似合うと思うかい？」

確かに少し違うな。

「だろう？つまりはそういうことさ。ただ、抜け道としては宝具レアスキルの力のみを稀少技能として一つだけ持たせるとかはOKだよ」

なるほど…。

って、よく考えれば滅茶苦茶制限厳しいじゃねえか！？

「そして二つ目、実はこれが最も最大の理由だ」

そう言っただけで神の顔が真剣なものになる。
な、何なんだ、一体…。

「それは……………」

普通過ぎて僕がつまらないからさ」

って、そんな理由かよ！

思わずツツコミを入れた俺を誰が責められよう。

「一番重要なことだよ、これ。僕は楽しむために転生クジを造ったんだ。そうじゃなきゃこんな面倒なことしないよ、例えばこっちのミスだったとしても。」

ついでに言っておくと、あまりにつまらない案ばかりだったら「冗談抜きでこのままあの世に強制送還するから」

ヤベエヤベエヤベエ!!

どうしよう、さっきは調子乗って俺TUEEEEEEEとかほざいていたけどあんな危険な世界で戦って生き残るとか無理だろ、特典あっても!

だから技術チートにして後ろで黒幕とかが良かったけど。これじゃつまらんって切り捨てられそうだ!

ど、どうする!!!

そんな理由で…（後書き）

次の更新はいつかなあ。

条件きつ！！（前書き）

主人公はまだ転生しません。

条件きつ！！

「まあ、時間はあげるからゆっくり考えると良いよ」

そう言って神は去っていった。

しかし、本当にどうするか。状況を整理しよう。

- 1・せつかくだから原作にはなんらかの形で関わりたい。
- 2・ただし凄すぎるチートは却下。
- 3・俺は戦闘はしたくない。
- 4・神の野郎が楽しいと思うようなこと、つまり意外性を狙わなければならぬ。
- 5・これらを四つの特典で何とかしなければならない。

条件、厳しッスね！！特に5！！

どうしようどうしようどうしよう…。

明らかに一人じゃ無理だろ…。はあ、せめて他に協力してくれるやつがいればなあ。

待てよ。

「なあ、神様ちよつと良いか？」

すると再び神が現れた。

「なんだい？決めたのかな？」

いや、聞きたいことがあつてさ。

この世界って、俺の他にも転生者っているのか？

「いや、普通は転生っていうのは同じ物語でも違う世界に送られるからね。存分に力を発揮できるように」

チツ、他の転生者に頑張ってもらう作戦は無理か。

…ん？普通は？なら例外もあるのか？

「稀に間違えて二人が同じ世界についてパターンはあるよ」

つまり不可能ではないということか…。

よし、神様、決めたぞ。

「へえ、わかっていると思うけど、つまらない案は却下するからね」

ああ、わかっているさ。

まず一つ目、俺にスカリエッティなみ、いや、それ以上の頭脳をくれ。

「技術チートというやつかな？」

そのとおりだ。

次に二つ目、俺にそれなりの、中の上から上の下くらいで良いから魔力をくれ。

「…ふーん、それくらいならお安い御用さ」

神の顔がどんどんつまらなさそうになっていく。
だがまだだ！

三つ目、俺を古代ベルカに送ってほしい。

「それは却下だね。おおかた聖王とかに関わることで原作に関わったことにしたいんだろうけど、それは僕がつまらないから駄目さ」

おいおい神様、それは早計つてもんだぜ。

俺はキチンと無印以降の物語に関わるつもりさ。

「…どういうことだい？」

神の顔が怪訝なものになる。

釣れてきたな。

神様、アンタは守護騎士がどういうものか知っているか？

「なるほど、それで技術チートを…。良いよ、続けて」

最後に四つ目、これが一番重要で面白い願いだ。

アンタも俺も楽しめるな。

「ほう、今のところは100点満点中60点つてところだからギリギリ合格だけど。これ以上面白くできると？」

ああ、今までこんなのを望んだやつはいないと思うぜ。

転生のシステムを逆手に取った願いだからな。それは…、

俺以外の、それも主人公側に付きそうなやつを数人、特典二つ付きで送りこんでくれ。能力制限は俺と同じでな。

「っ！？」

「正気かい？確かに望んで転生者を増やすことはできるし、特典も君につくわけじゃないから問題ないさ。でも君は本当にそれで良いのかい？」

ああ、もちろんだ。

別に俺はヒロイン達に興味はねえ。せいぜい面白く生きたいっていうだけだ。だがそれには力がある。だがたいした力では使えねえし、そもそも戦闘自体したくねえ。だったら簡単、俺以外が戦えば良い。

「つまり、それは君が原作に関わらないということになるんじゃないかい？」

いや、俺はあくまで黒幕、戦うのは俺の部下さ。

「部下？それに技術チート…。まさか君は」

そのとおり、そして古代ベル力は肉体改造とかが最も盛んな時代だ。ここまで言えばわかるよな？

「フフフ、なるほどね。どうやら面白いことになりそうだ。わかつたよ、合格だ！君を転生させよう！君の他の転生者は何人が良い？」

そこは任せるが、あまり多くない方が話が混乱しなくて良いな。四

「五人つてトコだろ。」

「わかったよ。転生させたら君にも教えるよ」

いや、それは良い。

「何故だい？その方が君が有利になるよ？」

それじゃあ、俺が面白くないだろ？

「…なるほど。それもそうだね、わかったよ」

頼む。

あつ、そうだ。転生者は全員、無印から三期までに送り込んでくれ。それから、俺の存在を誰にも知らせないでくれ。ほのめかすようなこともなしだ。その方が面白いからな。

「フッフ、わかったよ。その方が僕も面白そうだ」

だろ？

コンセプトは、この物語の主人公は自分だと思っているやつらを俺の技術チートでねじ伏せるってやつだ。

さあ、他の転生者諸君。せいぜいあがいて俺と神を楽しませてくれよ？

この、真の主人公たる俺をな。

条件きつ！！（後書き）

というわけで、次回から物語に入ります。

しかし、いい加減に原作に関わらせたいので、ベルカ時代は略します。

転・生！！（前書き）

やっぱりベルカも少しはやります。

む、無印がどんどん遠のいていくーっ！！

転・生！！

あつ、どうも。

古代ベルカに無事に転生したレン＝ベルツです。

……俺は誰に話しているんだろう。

あの後、転生した俺は無印に向けて、当時は王家や上級貴族しか使
うことのなかった肉体改造や遺伝子操作の技術を修めていた。

しかし、それが聖王家の目に留まり、気がつけば聖王家お抱えの研
究者になっていた。

馬車馬のように働かされたが、代わりに当時の聖王の遺伝子を手に
入れることができたけどさ。

まあ、いつか使うこともあるだろう。

しかし、俺の本当の研究はそれではない。

無印に関わるためにも一刻も早くプログラム体の研究をしなければ。
自身のプログラム化、それが俺が技術チートを貰った理由の一つで
ある。

だってこれなら歳取らないし、怪我をしても魔力があれば簡単に回
復できる！

だがしかし、ここで問題が起きた。

その時代にはプログラム体なんてものは存在していなかったのだあ
る。

……ええええええ。

意味がわからない。それどころか夜天の書すらないという。
おかしい、アレは間違いなく古代ベルカのロストロギアだったはず。
だということにない。

まさか、俺って相当昔の時代に飛ばされてしまったのでは？

おい
い
い
い
い
い
い
い
！
！

いきなり詰んだぞ、俺！これでどうやって原作に関わるんだよ！？

いや、諦めるのはまだ早い！

こうなったら、俺がプログラム生命体を作りだしてやる！

どれくらいかかるかわからないが、必ず成し遂げてやるぜえええ！！

そう思っていたこともありました。

いや、意外とあっさりできちゃったんだよね、プログラム生命体。魔力で構成されていることは、ぶっちゃけ魔力スフィアと同じだ。ミニカーとロケットくらい複雑さが違うけど。

しかし、そこは俺の技術チート。スカリエツティ以上の頭脳がある俺にとってはギリギリではあるが何とかなる範囲内だ。

これで肉体《ハード》は完成。

問題は精神《ソフト》だったのだが、それはデバイスの技術を応用した。

この時代でも、すでに会話ができるデバイスというものはある。だからそれを魔法で再現し、肉体を構成する魔法と合成させた。

魔力は俺の使い魔、いやベルカ風に言うなら守護獣？みたいな関係にして供給すれば良い。

俺、魔力量だけならAAAランクはあるからそれくらいは造作もない。

はい、完成！！

完成した日は「俺ってマジ天才！！」とか徹夜明けのテンションで舞い上がっていた。

しかし、問題はそれからだった。

俺が作り上げた技術を危険と判断した連中が、俺に刺客を送るようになってきたのだ。

幸いにも俺にはそこそこの魔力があつたからなんとか撃退できていたが、こここのところかなりしつこい。

だから、初めて作ったプログラム体を戦闘用に改良し、専用の剣型デバイスも造り護衛をもらうことにした。

いや、おかげで生活が凄く楽になったよ。

……ところで、初めて作ったプログラム体はピンク色でポニーテールの女性なんだ。

皆もわかったと思うが、シグナムをイメージして設定したんだけど、これ、ひょっとして俺が夜天の書を造るフラグだったりして。

転・生！！（後書き）

まだ続きます。

出る杭は打たれる（前書き）

これでベルカ編は終了です。

出る杭は打たれる

はい、皆さんこんにちは。

現在、国外逃亡しているレン＝ベルツです。

あれから刺客に対抗するために戦力を増強したら国家反逆の容疑で捕まりそうになったため、今はあちこちを逃げ回っている。

戦力の増強というのは、言わずもがな夜天の書とヴォルケンリツタ―である。

いや、ちよつと調子にのつて研究に熱中したらこのざまだ。これからは気をつけなければ。

「おい、なに一人でブツブツ言つてんだよ。そろそろ飯ができるから来いってシャマルが呼んでるぞ」

おつ、そうか。すぐに行く。

さて、逃げ回るといつても一人ではない。

今の会話でわかるとおり、旅には守護騎士の四人も一緒だ。

残念ながら管制人格は眠っているが。

アイツがずつと起きていると凄く魔力を食うのだ。だからたまにしか起こさないし話もありしない。

守護騎士の四人を起動し続けていられるのは、こまめに魔力を持つ生物から蒐集をしているからだ。

最悪の場合は人からもやってている。もちろん殺しはしない。無駄に命は奪わない主義だからだ。

さて、そんなことより飯だ。

今日の食事当番はシャマルだったな。アイツの飯って微妙なんだよ

なあ。

side ヴィータ

アタシらの主は変人だ。

その気になれば一人で戦争の勝敗を決められるような技術力を持っているというのに、それを使おうとしない。

以前その理由を聞いてみると、『メンドくさい』の一言で片付けられた。

じゃあ何でアタシらを創ったんだよ。そう聞くと、『デカイ野望のためさ』と言われた。

意味わかんねえ。わざわざ逃げ回る方がよほど面倒だ。

でも、

「ククククク、クツクツク、はーっはっはっはっはー!!」

あの変な主と一緒にいられるのなら、まあ、それでも良つか。

side out

ククククク、クツクツク、はーっはっはっはっはー!!

ついに、ついに完成したぞ。

今まで研究し続けてきた俺の長年の目標！！

つまり、自身のプログラム化！！

逃亡しながらの試行錯誤は正直かなり辛かったが、それもこれで報われるというもの！

「さあ、実験を始めよう！！」

そしてこの研究が成功した三日後、各国から集中攻撃を受けた俺は、圧倒的な戦力差の前に命を散らすことになった。

公式の記録では。

あつぶねえええ！

追い詰められる寸前に、自分のデータのバックアップを別の記憶媒体に保存しておいて良かったー。

あと三日早く攻め込まれていたら流石に死んでいた。

しかし、代償として夜天の書を失ってしまった。

おそらくどこかの国がすでに回収しているだろう。俺の技術の結晶だからな。

どうするか。アレには守護騎士プログラムと俺の研究データが詰め込まれている。

研究データはかなり頑丈にブロックしてあるから大丈夫だと思うが、守護騎士プログラムは使われるだろうなあ。

そういえば、アレは歴代主のせいで変な風に改造されるんだっけ。アニメ観ていた時はなんとも思わなかったけど、守護騎士たちは我が子同然。

できれば何とかしたいが…。

しかしそうするとA・Sに影響が出るところか、最悪なくなるし。

だが、しかし…。

…………仕方ない、ここは諦めよう。

大体、取り返すのに一苦労だし、主が変わる時に前の主についての記憶は消えるようにしてある。

俺には何も損はないし、あいつらだって全部忘れるんだ。

…これで良かったんだよな。

出る杭は打たれる（後書き）

そろそろ原作に入りたい。

準備OK!!…たぶん。(前書き)

もうすぐ無印です!!

準備OK!! たぶん。

「教授。教授、起きてください。」

もう起床時間ですよ、そろそろ起きてもらわないと困ります。」

透き通るような声で眠りから浮上する。

「わかったわかった、すぐ起きる」

なんか、懐かしい夢を見たな。

もう数百年も前のことなのにまだ引きずってんのか、俺は。
…未練たらしい。

どうも、今起きました。レン＝ベルツです。

さあ、そんな昔の話は忘れて現状の説明をしよう。

現在はミッドチルダでいうところの新暦63年、つまり原作の二年前だ。

すでに海鳴には一人、部下を送っている。

転生者の存在も二人、確認できている。神は五人くらいって言うてたからな。まだ半分も出てきていない。

そして俺がいるのは昔に造った次元航行艦『方舟』だ。

これがまた優れたもので、火力だけなら聖王のゆりかごともやり合える!!! たぶん。

まあ、その他の機能もふんだんに詰め込んだ、最高の作品なのだ!!

ゴホン、失礼。

とにかく、無印に向けての準備は万端というわけだ。

「ほら、ボサツとしてないで早く食堂に来てください。いい加減、怒りますよ？」

他の二人はもうとつくに起きて、早朝訓練も終えて疲れているんですから。」

「わりいわりい、すぐ行く」

俺を起こしにきたこいつは、原作に介入させるために俺が造りだした人造魔導師の一人、『ルナ』だ。

見た目は完全無欠な美少女。透けるような白い肌に深い青色の瞳、腰まで伸びた銀髪。

俺が理想とした美少女の容姿を完全に再現した結果、こうなった。しかし、こいつには最大の欠陥がある。

苦労して造ったのは良いが、こいつの性別は男なのである。

何度も造り直そうと思ったが、また一から造るのはかなり大変だし、何より魔導師としても最高のできだったのだ。

その結果、『ま、いっか！男の娘でも！』という結論になった。

なんか文句あるか？

今は俺の秘書兼助手兼方舟の最終兵器をやってもらっている。

食堂に移動すると、他の二人はすでに飯を食っていた。

「おいおい、主人が来るまで待っているよ」

すると二人はこちらに気がついたようで、

「ああ？つくつたルナが食ってて良いって言ったんだし、起きてこねえお前がわりいんだろ？が、バゝカ！なんか文句あつか？」

「ライアの言うとおり。起きてこないあなたが悪い。むしろ一生寝てて良い」

とのたまいやがった。このクソガキども…！

「デメエら…」

「はいはい、ストップストップ。喧嘩するなら朝食抜きにしますよ。朝から非効率的です」

チツ、ルナのおかげで命拾いしたな！

しかし、ルナ！お前は本当に良い子だな！クソガキどもと違って俺をちゃんと尊敬してくれるし、家事もできる。

いつ嫁に出ても問題ないだろう！！男だが。

俺に生意気な口を利く二人のクソガキも人造魔導師だ。

俺を馬鹿呼ばわりしたほうが『ライア』。

黒髪に金色のツリ目で、俺にいつも突っかかってくる少年だ。

ルナが言うにはキチンと俺のことを尊敬しているらしいが…。

ルナ、お前は絶対に勘違いをしているぞ。

そして、ライアに便乗しやがったのは『アリス』。

肩まで伸ばした黒髪と紅い瞳が特徴の少女だ。いつも眠そうにしている。

実際、暇な時は寝て過ごしているし。

本当はもう一人だけ戦力がいるのだが、今は海鳴で転生者たちの様子を探っている。

…はぁ、先が思いやられるな。

ルナの飯を食べながら、俺は頭を抱えるのだった。

ちなみに、普通に飯は美味かった。

準備OK!!…たぶん。(後書き)

次回は人物設定です。

人物設定 * 随時更新 (前書き)

人物設定です。

話が進むごとに更新します。

なお、これは無印の設定です。

人物設定 * 随時更新

教授サイド

レン＝ベルツ

性別 男

年齢 プログラム体のため歳をとらない。

一応、二十代中盤くらいに設定している。
その気になれば変更可。

特典 技術チート

魔力をそこそこ

古代ベルカに転生

他の転生者を呼ぶ

魔力 A A A

魔導師ランク 総合A A A +

デバイス 魔導書型デバイス『黒天の書』

稀少技能 なし

容姿 伸ばした金髪を後ろで結んで下ろしていて眼鏡をかけている。

常に白衣を着ている（科学者っぽいから）

擬人化クルル？

紹介 古代ベルカに転生した元高校生の日本人。

第二の人生を楽しむために、あえて主人公たちと敵対すること選ぶ。

インドア派のモヤシに思われがちだが、激動の戦乱時代を生きぬいてきたため

意外と強い。

デバイスに自分の全データがあるため、リンカーコアを破壊されるか『黒天の

書』を破壊されないかぎり死なない。
普段は『教授』と呼ばれている。

ルナ＝ベルツ

性別 男

年齢 9歳

魔力 SSランク

魔導師ランク 空戦SS 陸戦S+

デバイス 剣型デバイス『アルテミス』

稀少技能 魔力変換資質『氷結』

容姿 透けるような白い肌に深い青色の瞳、腰まで伸びた銀髪。

白い服を好む。

紹介 主人公の秘書兼助手兼方舟の最終兵器。

主人公が対転生者に生み出した人造魔導師の一号機。

本来は二号機以降を製作する時の助手にしようと、実験目的で造られた。

しかし、想像以上の強さと容姿になったため仕事を兼任することに…。

主人公を敬愛している。

アリス＝ベルツ

性別 女

年齢 9歳

魔力 SSランク

魔導師ランク 総合SS

デバイス 魔導書型デバイス『レメゲトン』

稀少技能 ???

容姿 肩まで伸ばした黒髪と紅い瞳。いつも眠そう。

ゴスロリが基本的な服装。

紹介 対転生者用の人造魔導師の二号機。

三号機の『ライア』と同時進行で造られたうえ同じ遺伝子から造られたため、『ラ

イア』とは双子。

普段は寝てすごしている。

わかりにくいですが、主人公のことはそこそこ尊敬している。

ライア＝ベルツ

性別 男

年齢 9歳

魔力 S -

魔導師ランク 空戦SS 陸戦S -

デバイス 銃型デバイス『ベロボーグ』

稀少技能 ???

容姿 黒髪に金色のツリ目。

瞳の色以外は『アリア』と同じ。

実は主人公の服装をリスペクトしている。

紹介 対転生者用の人造魔導師の三号機。

『アリス』とは双子。

言葉にはしないが、『ルナ』と同じくらい主人公をしたっている。

ツンツンツンツンデレくらいツンの要素が強い。

イデア＝ベルツ

性別 女

年齢 9歳

魔力 ???

魔導師ランク ???

デバイス ???

稀少技能 ???

容姿 腰まで伸ばした黒髪をポニーテールにしている。

瞳は紫色。

これは潜入用の変装で、地毛はプラチナブロンド。

紹介 対転生者用の人造魔導師の四号機。

現在は海鳴に潜入中。

転生者『佐藤 友美』として転生者たちを見張る。

転生者サイド

河内 亮

性別 男

年齢 9歳

魔力 A A A +

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 剣型デバイス『カリバーン』

稀少技能 零落白夜

要は剣の形の A M F。

しかし密度と濃度が段違いなため、普通の魔法では勝てない。

燃費が超悪い。

容姿 某ライトノベルの『織○ 一夏』

紹介 転生者その一。

原作ブレイク反対派の一人。

別に余計なことをしなくても物語が良好な状態になるとわかっていて、極度に悪いこと意外は余計なことをしようと思っていない。

木島 大和

性別 男

年齢 9歳

魔力 A A A -

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 剣型デバイス『グラム』

稀少技能 S E E D

空間把握と反応速度が凄まじくなる。

容姿 某アニメの『キ○〃ヤマト』

紹介 転生者その二。

原作ブレイク賛成派。

別に疚しい理由ではなく、なのはたちをもっと幸せにした
という正義感から。

ユーナ〃テストロッサ

性別 男

年齢 9歳

魔力 A A A

魔導師ランク 空戦AAA

デバイス 斧槍型デバイス『グラディウス』

稀少技能 加速

音の三倍近くまで速く加速できる。

しかし、その速度は自分で反応できないうえに、細かい調節ができない。

おまけに急停止と急加速は反動が強すぎて、バリアジャケットがないと自分

にダメージがくるというポンコツ具合。

一回一回の移動でバリアジャケットにダメージが行くため、再生されるまでは加速できない。

容姿 髪を肩までしか伸ばしていないフェイト

紹介 転生者その三。

原作ブレイク反対派。

無印が終われば、とりあえずフェイトは楽になるため、今は無印を最速で終わら

せようとしている。それには原作が最も安全で、なおかつ後腐れがないため。

人物設定 * 随時更新（後書き）

A・Sの人物設定に続く。

介入だあああ！！（前書き）

ようやく無印に突入です。

介入だあああ！！

さて、皆さんこんにちは。

レン＝ベルツだ。

ただいま無印の真っ最中で、ちょうど全員で温泉に来ている。

えっ？介入はどうしたのだった？

心配ない、ちゃんと考えている。ただ観光に来たわけじゃない。

そして報告！

実はまだ原作に介入していません！！

いや、仕方ないんだよ。

本当は巨大樹の事件の時にライアが介入する予定だったのだが、残念ながらそれは起こらなかったんだ。

たぶん転生者の二人のうちのどっちかが止めにはいったな。

そしてもう一つ理由がある。

ついでにライアに調べてもらったところ、フェイト側にも転生者がいる可能性が出てきた。

そしてフェイト初登場の回を待ってみれば、やっぱり出てきたよ。しかもフェイトと瓜二つ。ありや双子設定を特典に選んだな。

ここまででは原作どおりだから良いものの、あのフェイト側の転生者はなにが目的なのかわからない。今日はそれを確かめるために来た。

もし極度の原作ブレイクが目的のやつならば…、残念だがここで死んでもらう。

原作ブレイクは俺の楽しみだ。そうじゃなきゃ転生した意味がない。

だから離脱したフェイトたちをライアに追わせているんだが…。

正直かなり不安だったため、ルナとアリスにも行ってもらっている。だつてさ、ライアのやつ、

『俺ならば一人で全員を皆殺しにできる!!』

って報告してきたんだよ。

アイツ絶対他の転生者を殺す気だろ。

最悪、原作キャラも殺しかねない。俺の目的は教えてあるが…。

ライアだしなあ…。

だからストッパー役として二人には行ってもらっている。何もなければ良いんだけど。

sideライア

チツ、気に入らねえ。

俺は今、例の金髪魔導師二人組みとその使い魔を追っている。追いつくのは問題ねえ。このペースならすぐに追いつく。

気に入らないのは、教授がルナとアリスと一緒に行くように行った

ことだ。

不測の事態のためにできる限り万全の手を打つのはわかる。
確かに合理的だ。

何事にも慎重になるその考えは流石だと思う。

だが、ここ数日やつらを監視していた俺にはわかる！

あんなやつら、全員取るに足らないゴミだ！

俺一人いれば皆殺しにできる！

そう報告したにもかかわらず教授はフルメンバーで来た。

何故だっ！俺の実力は教授が一番わかっているはずなのに！

とある稀少技能がある俺には少し遅れてルナとアリスがついてきて
いるのがわかる。

たぶんどこかで教授も見ているんだろう。

見ている！

俺一人で充分にやれることを証明してやる！！

「行くぞ、ベロボーグ」

「Yes, boss」

side out

sideフェイト側の転生者

俺の名前はユーナ＝テストロッサ。転生者だ。

ある日、神によって転生させられた俺はこれで俺も主人公だと喜んでいて。

転生時の特典としてフェイトの双子の兄に転生したのも、すべて自分が楽しむためだった。

しかし、その考えは今はない。

転生した当初は馬鹿みたいに喜んでいただけだったが、次第にこの世界が、妹がとても大切なものに思えてきたからだ。

プレシアの事情は知っている。

確かに悲しい過去だとは思うが、そのためにフェイトを使うなんて許せねえ！

そう思えるようになった。

今はもうフェイトの幸せを願うだけだ。

そのために早く無印を終わらせて、プレシアから開放してやらねえと！！

なのは側についている転生者は三人いて、戦闘中に軽く話したただけだが、たぶんきちんと話せばスムーズに無印を終わらせるのに協力してくれると思う。

よし、これならフェイトを幸せにしてやれる！

そう思った瞬間、空から大量の魔力弾が降り注いだ。

介入だあああ！！（後書き）

次回、ライアvsユーナです。
今日中に更新します。

完敗（前書き）

初の戦闘シーンです。

それと話が短いという指摘を受けたので、少し長くしてみました。
今後もしつします。

完敗

sideユーナ

「くッ、フェイト、アルフ！無事か！？」

あの程度で二人がやられるとは思わないが、心配なものは心配だ。

「兄さん、こっちは大丈夫！」

「そういうアンタこそ大丈夫かい！？」

ほっ、大丈夫だったか。とりあえずは一安心だ。

「ああ大丈夫だ。」

よし、ならば敵を…

【他人の心配たあ、余裕だなあオイ】

「っ！？」

瞬間、再び大量の魔力弾による攻撃を受ける。

（クソッ、敵は一体どこから！？）

この辺りには見当たらない。どうやら相当遠くから攻撃されているらしい。

それに、

（コイツ、遊んでやる！）

さつきから豆鉄砲みたいな攻撃を、当たるか当たらないかってことにばかり撃ってくる。

その気になればたぶん簡単に撃ち落とされていただろう。おそらく最初の攻撃で俺たちは全滅していたに違いない。

しかし、どうやら攻撃は俺一人に絞られているようだ。
ならばっ…！

【フェイト、アルフ！お前たちは逃げろ！】

【そんなっ！？できないよ！私たちも残る！】

【そうさ！三人がかりなら…！】

【わからないのかっ！相手はさっきのやつらより強い！

ジュエルシードを持って帰るんだろ！俺が足止めをするから早く！】

そう、コイツは俺たちより強い。

あくまでも今のままでは、だが。

【…わかった。けど気をつけてね？】

【さっさと帰ってきなよ…！】

そう言つて二人は離脱した。念話ごしだったが、かなり心配していたようだ。

【…わざわざ待つてくれるとは思わなかったよ
…そろそろ姿を現したらどうだ？】

【別にお前のためじゃねえ。俺が用があるのはてめえだからってだけだ】

俺に用？ということは…。

【転生者か！？】

「そんなところだ」

「っ！？」

（後ろをとられた！？）

声が聞こえたと思うと、ゼロ距離でさっきの弾雨を撃たれた。

フェイトの兄というところからもわかるとおり、俺はバリアジャケットが薄い。

速さを追及していった結果だ。

そんな俺が豆鉄砲とはいえ、これだけの攻撃を受けるとどうなるか。

答えは簡単。撃墜だ。

咄嗟に特典で貰ったチートを使って回避しなければ、確実にやられていた。

わかつてはいたがコイツ、相当強い…！
そして、おれの弱点を熟知していやがる！

反撃として何発か誘導弾を放つが、やつの銃型デバイスで撃ち落とされた。

「クソッ！」

どうする。俺のチートは多用できない。使いすぎると反動で自滅だ。

「ああ？なんだお前？今ので確実にやったと思ったんだがよあ。
どうやって避けた？」

「さあな。お前の射撃が下手なだけじゃないか？」

「デメエ…」

（今だ…！）

やつが挑発に乗った瞬間、特典のチートを使い、やつの背後に回り込んだ。

そしてグラディウスを一閃！勝った！

「甘え！」

だがやつは反応し、咄嗟にかがんでかわした。

（まずい、隙だらけだ！）

グラディウスを振り切ってしまった俺は完全に無防備な状態だ。
こんな不安定な状態じゃ特典も使えない。

（…詰んだな）

銃口がこちらに向けられたと思った瞬間、俺の意識は途絶えた。

「ライア！駄目じゃないですか！追い払っただけだって言ってたのに
！」

「良いだろお別に。結果的にコイツの特典もわかったんだしよ。結
果オーライだろ？
だいたいちゃんと手加減もしてやったし」

「でも…！」

「…二人とも、話は後。コイツが目を覚ます」

うつ、ここは…。

そうだ、確か俺は襲撃されて…。

そこまで思い出し、ようやく意識が覚醒した。

（やつは！？俺はどれだけ寝ていた！？）

「おお？ようやく目え覚ましたかよ？」

すると、近くからやつの声がした。

咄嗟に飛び起きようとして、ようやくバインドが掛けられているのに気づく。

「あんまり手間あ掛けさせんじゃねえよ」

そう言ってやつはデバイスをこちらに向ける。

「安心しな、聞きたいことがあるだけだからよ」

「…何の用だ？さっきの三人の仲間か？」

正直、それはマズイ。そうになると、協力してもらう計画が駄目になる。

「…三人だあ？（どういうことだ？転生者は二人だって聞いていたが…。ああ、アイツか）いや、そいつらとは別件だな」

「そうか…。で、何のようだ？」

内心ほっとすると同時に、警戒を緩めない。

「まずお前の特典だが、あの金髪の双子に転生するってやつともう一つあるだろ？
それは何だ？」

「…そうやすやすと教えると思うか？」

特典は俺たち転生者の切り札だ。簡単に教えるわけにはいかない。

「そーかよ。だがまあ大体の予想はつく。
俺の攻撃をかわしたこと、そしてさっきの背後に回り込んだことから見て…、

瞬間移動つてどこか？」

…良い線突いてはいるがはずれだ。

まあ、実際そう見えるだろうし、初見で見破るのなんてまず無理だが、わざわざ訂正してやる必要はない。

「…そのとおりだ。それが俺の「はいダウトォー」があっ！」

俺が返答すると同時に腹部を蹴られた。

「しらばっくれてんじゃねえよ。

おまえの特典がそんななわけねえだろ。
お前の特典は加速チートだろ？次はねえ」

なあっ！？

「何故わかったのかって顔だな。そんなの決まってるだろ。」

視えていたからだ。

おまけに、それは一瞬しか使用ができねえ。何故ならお前の体はその速度に耐えられねえからだ。

途中で俺を挑発してまで時間稼ぎしていたのは、バリアジャケットの再生を待っていたからだ。

「アタリだろ？」

…完全に正解だ。

「…どうやって俺の速度を捕らえた？人間には感じ取ることはもちろん、反応すらできない速度だったはずだ」

「ばーか。教えるわけねえだろ。」

だがあえて言うなら、お前より速いやつとやり合ったことがあっただけだ。

だから反応できたんだよ」

その言葉に俺は打ちのめされた。

俺の唯一の切り札以上のものを持っているやつがいるというのだ。もう笑うしかない。

「まあ、それは置いといてだ。もう一つ聞きたいことがある。

次に騙そうとしたら、もう一人の金髪……フェイト「テストアロツサを殺す」

「っ！？わかった！何でも言う！だからそれだけは！」

こいつ、よりもよって…！

「最初からそうしていれば良いんだよ。
で、質問だ。」

お前、何が目的だ？」

「…質問の意味がわからない。何のことだ？」

…何が言いたい、コイツ。

「だからよお、何が目的で転生してきたのかって聞いてんだよ。
正直、原作？を壊されると迷惑だって言いてえんだよ」

なるほど、そういうことか。

「俺は原作ブレイクをするつもりはない。安心してくれ。
むしろ早く終わってほしいくらいなんだ」

そう言うと、やつはあからさまにがっかりした顔になった。

「そうかよ。ならテメエに用はねえ（チツ、せっかく教授の役に立
てそうだったのに）」

そういうと、バインドを解いてやつはさっさと帰ろうとする。

だが、まだこっちには用がある。

「待ってくれ！頼みがあるんだ！」

「…なんだ？俺は今、機嫌がワリイんだよ」

いきなり不機嫌になった理由はわからないが、コイツの力は是非ほしい。

協力してくればかなり助かる。コイツの望むとおり、原作プレイクの危険だってかなり下げられる！

そう言っと、

「知るか。勝手にやってろ。どうでも良い」

そう言っただけで今度こそ去ってしまった。

一体アイツは何がしたかったんだ？

完敗（後書き）

つ、疲れた。

やっぱりまだ慣れないですが段々と慣れていききたいです。

反省会（前書き）

今日は一話だけ投稿です。

反省会

「つてわけで、あの金髪ボコしてきたぜ」

「いや、なに誇らしげに言ってるんだよ」

コイツ、実は俺の話聞いてなかったのか？

あ、どうも。レン＝ベルツです。

あれから、先に方舟に帰ってきていた俺は潜入活動をしているアイツから報告を受け取り、それを一人で整理していた。

一番に帰ってきたのはルナで、アリスは帰ってくるなり自室に引込んでしまった。

そして、ちょうど今ライアが帰ってきて報告をさせたところだったんだが…。

「ルナ、俺がコイツになんて命令したか復唱してくれないか？」

ひょっとすると俺の記憶がおかしいのかもしれん。

「…は、はい。」

えっと、ライアには転生者に何の目的で転生してきたのかを聞き出すようにと…。」

どうやら俺が記憶障害に陥ったわけではないようだ。

「そのとおりだ。で？お前は何をしてきた？」

「あの金髪をボコしたうえで特典を見破ってやったぜ」

「やったぜ、じゃねーよ！！」

コイツ、マジで話聞いてなかったんじゃないのか！？

「……………はあ。」

いいかライア、俺はこの人生を面白く生きたいと思っている。

そのためにあの転生者どもを呼んだんだ。

それがこんなところでアツサリ死なれると困るんだよ

わかるな？」

ライアはジッとこっちを見て話を聞いている。

返事と聞く姿勢だけは良いんだよなあ、コイツ…。

「お前が強いのは知っている。

確かにお前なら『今の』転生者と原作キャラをまとめて相手にしても本当に皆殺しにできるんだろうさ。

だが、それじゃあつまらない。全く面白くないんだ。

俺はやつらが頑張って頑張って強くなり、正義の味方を気取り、俺たちを悪だと言い、まとめてかかってきたところを完膚なきまでに叩き潰したいんだ。

その瞬間を見るために今まで生きてきたと言っても良い。

わかるか？今はまだ機じゃないんだ」

「…………アンタは、俺の力を認めているのか？」

変なことを聞くな？

「そんなこと、当たり前前に決まっているだろ？」

お前は俺の最高傑作の内の一人だ。むしろ、負けは許さん」

「……………そうか。なら良い。

さつきは命令違反をして悪かったな。これからは気をつける」

な、なんだコイツ！？急に大人しくなったぞ…。

「わ、わかれば良いんだ。もう行って良いぞ」

大人しいライアなんて初めて見た。

明日は雪でも降るんだろうか？

それとルナ、そんな微笑ましいものを見るような表情はやめろ。

はあ、まあ良い。そんなことより、

「ルナ。今度はお前にも主人公側についている転生者のところに行
つてきてほしい」

今は次のことを考えないと。

s i d e ルナ

「え、私もですか？」

正直、その言葉には驚いた。

私はてっきりこのままライアは一人だという設定を使い続けると思っていたからだ。

「ああ、俺も最初はそのつもりだったんだがな。またライアが暴走するかもしれないし、相手は二人だ。

いや、高町なのはとユーノ＝スクライアを入れれば四人か。

それに潜入しているアイデアからの報告によれば、転生者どもはなかなか特典を晒さないらしい。

現時点でわかっている特典は、おそらく二人とも神からデバイスを手に入れる、もしくは貰うというものだ。

じやなきや、純粹に管理外世界出身のあいつらにデバイスを手に入る術はない。

だがこれではやつらの能力まではわからない」

そう、アイデアからの報告によると、高町なのはと共にいる転生者たちは物語が始まる前からデバイスを所持していたらしい。

「教授は彼らの切り札が原因で敗れるのを恐れているんですね？」

「そのとおりだ。

いざという時に相手のチートのせいで負けました、じゃ笑い話にもならん。

だからこの辺で打って出ようと思ってな…。

それに、どうせ闇の書事件の時に全員出す気だったしな。それが少し早くなるだけだ」

なるほど、確かに。

向こうにはイデアもいるし、ライアがそう簡単にやられるとは思わないが、相手は神から力を貰った転生者だ。

油断して良い相手じゃない。

「わかりました。必ず転生者さんたちの残りの特典を暴いて見せます！」

反省会（後書き）

次回もバトル回だ…。
気合入れるぞお！！

疑惑（前書き）

昨日は投稿できなくてすみません。
なにぶん、忙しかったもので。

疑惑

side 亮

俺は『河内 亮』。言わずもがな転生者だ。

今、俺となのはにユーノ、そして俺以外の転生者である『木島 大和』、『佐藤 友美』と一緒に市街地でジュエルシードの探索に来ている。

確かここでのジュエルシードは、アルフが起こした魔力流によって暴走するはず。

つまり、なのはたちには悪いが、知っている俺たちはそれまでどこかで時間を潰していれば良い。

その間に、この前現れたフェイトによく似た転生者について話し合っている。

【この前の転生者だけど、やっぱりアリシアの蘇生とかが目的かな？】

と、大和が切り出した。

【どうだろうな。

だけど、もしそうだとしたらジュエルシードを使うのは間違いないな。なんにしても、アイツらにジュエルシードを渡すわけにはいかないぜ】

【そうね。力になれない私が言うのもなんだけど、絶対に頑張らな

いと】

そう返してくるのは友美だ。

友美は俺たち三人の中で唯一デバイスを特典に選ばなかった。そのため、実質アイツは戦力に入れていない。それはアイツも了承している。

【安心しろ。お前の分まで俺がキッチリ働いてやるからよ！】

そう言った瞬間、魔力流を感じた。

来たか！！

【なのは、ユーノ！聞こえるか！なんか来るぞ！】

【皆！これは魔力流だ！あの三人、こんな街中で暴走させる気だ！友美は危ないから逃げて！なのはと亮と大和はジュエルシードの封印を！】

【【【わかった！！】】】

【力になれなくて悪いわね。皆、気をつけて…】

そう言うとき友美は脱出していった。

「よし、三人とも！行くぞ！」

side out

S i d e ルナ

結界がはられた。どうやら始まったようだ。

「始まったみてえだな。俺たちはいつ介入するんだ？」

と、ライアが聞いてくる。自分も戦いたくてウズウズしているようだ。

「あの二人、『高町なのは』と『フェイト』『テストロッサ』が次に封印しようとした時です。

まあ、あそこには転生者が三人もいますから、なにかイレギュラーがあるかもしれません」

「チツ、ケースバイケースでなんとかしろってことかよ」

まあ、ものごとに絶対はない。

なにが起きても大丈夫なようにしないと。

すると、

【二人とも、聞こえる？報告しておきたいことがあるんだけど】

アイデアから念話きた。

【あっ、アイデア。潜入ご苦労様です。】

イデアは転生者『佐藤 友美』として、転生者の報告や状況の調整役をしている。

つまりスパイだ。

戦闘には参加せず、相談や手伝いをするポジションに着くようにという教授の命令で、今はただの小学生を演じている。

【それで、報告とは？】

【なのは側の転生者の『木島 大和』なんだけど。

…原作ブレイクをしようとしている可能性があるわ】

【ッ！？】

【おいおい、そりゃマジかあ】

【まだ確証はないけど、たぶん】

ライアが露骨に嬉しそうだ。

【理由はなんですか？】

【どうやら彼は、彼女たちの運命をもっと良い方向に持っていくたいようなのよ。

私に手伝えと言ってきたわ】

なるほど。可能性としては充分だ。

教授からは多少のことは無視しても良いと言っていたが、極度なもの是最悪、殺してでも止めると言われている。

…どうするか。

【悩む必要はねえ。余計なことをする前に今すぐ殺せば良いだろ】

【…いえ、今回は予定どおり、ジュエルシードの奪取だけを目的とします】

【ああ？殺したほうが良いだろ、どお考えても】

ライアは不服そうだ。だが、

【転生者を減らしすぎないようにと教授は仰られていました。確証もないのに殺すのは早すぎます。

イデアはこのまま『木島 大和』を探ってください。できれば無印のうちに決着をつけます。
ライアも良いですね？】

【チツ、了解した】

【了解したわ。

じゃ、私は帰るから】

【はい、ご苦労様でした】

さて、面倒なことになった。

『木島 大和』がイデアの言ったとおりならば、おそらくこの辺りで動く。

「ライア、二人の戦闘が止まり次第、速攻で乱入します。準備を」

「もう出来てる。後は行くだけだ」

そして、『高町なのは』と『フェイトII テスタロッサ』の戦闘が止まり、会話が始まる。

「作戦開始です。『アルテミス』！」

「Yes , master .
Ice avatar」

「っしゃあ、行くぜえ！『ベロボーグ』！」

「Yes , boss」

そして、介入が始まった。

疑惑（後書き）

できれば、今日のうちにもう一話だけ投稿しようと思います。

格の違い（前書き）

やっぱり戦闘シーンは難しいです！

これからもこんなレベルでしかできませんが、今後ともよろしくお
願いします。

ちなみに、今回のテーマは『爆発』です。

格の違い

side 亮

それは突然だった。

俺と大和はもう一人の転生者『ユーナ』テストロッサ』の目的を聞いた。

その考えは俺の考えと一緒にだった。大和は不満そうだったが…。それに、俺たちの他にも転生者が絡んでいることも聞いた。どうやら突然襲いかかってくる危険なやつらしい。

お互いの情報を交換し、協力を結んだまさにそのときだった。

「あゝ、転生者の方々ですよね？」

突然声をかけられた。

「ッ！？誰だ！」

咄嗟に身構える。すると銀髪の美少女と呼んでも良いような少女が氷の剣を持ってそこにいた。

「あ、はじめまして。ルナと申します。

えっと、金髪の転生者さんを襲った人の仲間と言えはわかりますか？」

「ッ！まさかお前も転生者か！？」

「え！？」

「なにっ！？」

コイツも転生者か！

「え？いえいえ、違います！私はただの、彼の協力者です。
まあ、物語の内容くらいは聞いていますが」

転生者じゃないだと。

「その君が、僕たちになんのようにだい」

そう言いながらも大和は剣型デバイス『グラム』を構え、油断なくいつでも攻撃できるようにしている。

「はい、今回は私たちもジュエルシールドを頂こうと思うので、あなたたちを足止めにしました。

他の方たちは今頃、彼が相手をしていると思います」

その言葉を聞いた瞬間、ユーナは俺でも知覚できない速度で移動し、なのはたちの方向へ飛んでいった。

「ありやりや、本当に速いですね。移動したのが全く見えませんでした」

しかしこの少女は慌てることもなく、むしろわざと見逃したようにも見える。

「良いのかい？彼を行かせて」

「はい、問題ありません。彼はライアとは絶望的に相性が悪いです。魔法で速くなっている限り、彼はライアに勝てません。心配する必要がありませんから。」

それに、最悪ジュエルシードはいりません。

今回の本当の目的はあなたたち二人ですから」

「…………それはどういうことだよ」

コイツの目的が俺らだと…。

「はい、性格に言うならばあなたたちの戦力分析です。さてと、おしゃべりはこの辺にしましょう。手加減してあげますから死ぬ気で頑張ってくださいね」

そういうと、彼女は剣を構えた。

「舐めんな。俺たち二人に勝つ気かよ」

そう言つて、俺は剣型デバイス『カリバーン』を構える。

「亮の言うとおりだね。知ってると思うけど、僕たち転生者には神から与えられた特典がある。」

見ればわかるとおり、二人とも一つはデバイスに使っているけど、まだもう一つ残っているんだ。

これがどういう意味かわかるよね？」

「はい、知っています。」

その上で手加減すると言っているんです。
あなたたちでは相手になりません」

「コイツっ!!」

そう大和が言うと同時に俺たちは襲いかかる。

「アイスダガー」

すると、やつは氷のダガーを六つ空中に作り出し、こちらに放ってきた。

「そんなの効くかよ!」

「舐めるな!」

俺たちはデバイスでそれを弾くが、

「爆ぜろ」

そう聞こえた瞬間、全てのダガーが爆発した。

「くっ、大和!無事か!?」

俺はバリアジャケットのおかげでなんとか耐えられたが…。

「なんとかね。それにしても、今の技…」

「ああ、ありゃチンクのISそっくりだ」

そう、今の攻撃はナンバーズの5番『チンク』のISそのものだ。

「それがお前の戦い方ってわけか」

「さあ、どうでしょう。教える必要性を感じません」

「言ってる！」

そう言っただけで俺たちは襲いかかる。

今の攻撃で、あの技の弱点は見えた。あの爆発は、おそらく氷のダガーの中の魔力を使って爆発させたのだろう。

ならば、俺との相性は最高だ！

やつが再びダガーを放ってくるが、今度は同じようにはいかない！

「大和、俺の後ろに！」

行くぜ、カリバーン！零落白夜！」

そう、これが俺の特典『零落白夜』だ。

もともとは『インフィニット・ストラトス』の兵器だが、特典として能力だけを神に貰った。

これはあらゆる魔力を霧散させる。つまり、刃の形をしたAMFだ。しかし、あれとは効果は同じだが密度が違う。

試したことはないが、おそらくなのはの砲撃だって斬ることが出来るだろう。

これでやつのダガーを全て切り裂いた。

よし、今度は爆発しなかった。

「今だ、大和！」

「OK！」

返事と同時に大和が切りかかる。

すると、やつは氷剣で応戦する。

一見、大和が押しているように見えるが、大和が全力なのに対してやつはかなり余裕そうだ。

「この程度ですか？期待はずれですね。

それに、そこで見ていないで、あなたもかかってくれば良いじゃないですか」

こいつ！！

「うおおおおお！！！！」

そして俺も攻撃に加わったが…。

一分で格の違いを思い知った。
俺も大和も気づいていた。

自分たちとは、剣の腕が違いすぎる。

俺たちは転生者とはいえ、転生する前は戦いを全く知らなかった。転生してから多少は訓練をしていたが、実戦はこのところが初めてだ。

だがコイツは違う。

剣を合わせてみてわかった。

格が違う。経験が違う。年月が違う。何もかもが違う！

（くそっ、舐めていたのは俺たちだったってことかよー！！）

だが、

「それでも、負けるわけにはいかねえ！」

なのはたちのためにも！

「くだらないですね。意思だけでなんとかなるならベルカは滅びませんでしたよ」

「言ってる！」

口ではそういうが実際はかなり不利だ。

コイツが本気を出せば、たぶん二秒ともたない。

（このままじゃ…！！）

すると、

【二人とも、今すぐ離れろ！】

突然、ユーナの念話が聞こえた。

咄嗟にやつから離れると、バインドが嚴重にも八重にかけられる。

「バインド！？どうして!？」

あなたはライアが相手をしているはずです!」

そう、アイツは確かになのはたちの方に行っただ。なのにどうして。

「なにを言っている？アイツならばジュエルシードを持って撤退していったぞ。」

まさかお前、おいていかれたのか？」

「……………ライアああああああ!!」

どうやら本当においていかれたらしい。

「まあなんにしても、これで一件落着くことかな」

「なんか釈然としねえかな」

すると、そこになのはとユーノ、フェイトとアルフもやってくる。

全員無事だったか…。

「亮君、大和君！二人とも大丈夫!？」

「ああ、大丈夫だ」

「僕もだよ、なのは。心配をかけたね」

するとなのはは安心した顔になる。

ユーナのほうも似たようなものだ。

「それにしても、彼女もジュエルシードを狙ってきたのかい？
一体どうして？」

そして話題がコイツに移った。

「あの、あなたも、フェイトちゃんたちもどうしてジュエルシードを狙うの？」

と、なのはが聞くも、フェイトは答えない。
ユーナも、このまま原作に沿わせるつもりらしいから、答えることはないだろう。

そして、三人は何も言わずに去っていった。

さて、問題はコイツだが…。

「答えても良いですよ？」

意外とアツサリと話してくれそうだ。

「研究が目的です。ジュエルシードはかなり応用が利きますから」

コイツは本当はジュエルシードなんかどうでも良いんだろう。

本当の目的は俺たちだからな。
だからこんなにアッサリと理由が話せる。

「研究…」

「あれは危険なものなんです！
ジュエルシードはあなたが考えるほど、便利なものじゃない。
最悪、次元震を起こして大災害になってしまう。お願いです。手を
引いてください」

そうユーノが言うが、コイツは全く相手にしていない。

「もう良いユーノ。それより、コイツをこれからどうするかだ」

「…そうだね。」

できればこのまま管理局に引き渡したいけど、ずっとこのままにも
しておけないし…」

「なら、僕が預かるよ。幸い、両親は仕事であまり帰ってこないし
ね。」

ユーノが部屋に結界をはって、その中に閉じ込めておけば良いんじ
ゃないかな？」

「それが妥当なところだろ」

すると、今まで何も言わなかったコイツが急に話した。

「ありやりや、それは困りますね。」

そんな獄中生活をおくりたくはありません。断固拒否します！」

「うるせえ、じゃあどうしろってんだよ」

「別に何もしなくていいですよ。
そろそろタイムアップですから」

「…それはどういう意味？」

大和が疑問を投げかけるが、俺は急に嫌な予感がし始めた。

（なんだ、なんでコイツはこんなに余裕なんだ！？）

「さっき戦ったあなたたちならわかっていると思いますけど、私の戦い方には魔力変換資質『氷結』で作った氷を爆発させる、といったものがあります。

そして私には、

氷の分身を作る魔法があります。意味、わかります？」

それを聞いた瞬間、俺と大和はまだ理解ができていないのはとユ
ーノの前に出て、

全力で防御魔法を使った。

「良い判断です」

その瞬間、結界中に光と衝撃が満ちた。

格の違い（後書き）

ライアは自爆するのがわかっていたので、ジュエルシードを奪ってさっさと逃げたというのが今回の真相だったり…。

それと、明日から一週間くらい学校で夏期講習があるので、更新が遅れるかも知れません。

脱落（前書き）

まさかの連続投稿！？

自分でも今日中に仕上がると思っていたんですけど。

脱落

どうも、こんにちはレン＝ベルツです。
なんか、久々にやった気がする。コレ。まあ、良いか。

昨日の戦闘でついにジュエルシードを手に入れた。

正直、別にあってもなくても良いんだが、一応データをとらせてもらっている。

話は変わるがライアには今、フェイトたちの隠れ家を見張ってもらっている。

実はアイツ、探知系の稀少技能をもっているため、見張りや追撃などが非常に得意だ。

普段のアイツからは想像できないけど。

さて、何故そんなことをさせているかというと、確か今日、フェイトが『時の庭園』に報告に戻るということを昨日思い出したからだ。

今のうちに座標を特定しておいて、得はあっても損はない。

だから見張らせている。だが、ただそれだけでは面白くない。

だから、前々から準備させておいた『アレ』を使おうと思う。いつか役に立つかと思って作っておいたが、まさか日の目を見る日が来るとは思わなかった。

さあ、これから面白くなりそうだ。

「教授、失礼します」

すると、ルナがやってきた。

「ん？どうしたルナ」

「はい。先ほど第97管理外世界付近に、管理局の次元航行艦『アースラ』を探知しました」

「そうか、とうとう来たか」

「ということは、今日の戦闘で『クロノ』ハラオウン』が介入してくるということか。」

「いかなさいますか？」

ふむ、そうだな…。

「今日の戦闘は放っておいて良い。
まずないと思うが、方舟をやつらに探知されても面倒だ。それに、ジュエルシードはもう手に入れた。無理に戦う必要はない」

そう、無印における俺の目的はほとんど達成されている。
残りは、

一つ、『木島 大和』の特典の特定。

一つ、これは今ライアがやってる。

最後に、必要とあれば『木島 大和』の殺害。

しかし、最後のやつは本当に最悪の場合だ。無理にやる必要はない。

……………あれ？

ひょっとして、最終決戦まで何もしなくてよくね？

というわけで、やってきました最終決戦！！

えっ、飛ばしすぎだつて？

だって仕方ねえじゃん。何もやることなかったんだし。

途中？ああ、基本的に原作と同じだったけど？

あつ、そういえば一つ驚きのことが…。あんの黒坊主、こともあるうにウチのアイデアに惚れてやがるらしい。

はあ？お前にはエイミイがいるだろ！お前なんかアイデアはやらんはボケが！！

ってまあそれぐらいだ。

アイデアは満更でもないらしいが…。

…ま、まあそんなことは良い！！

そんなことより最終決戦だ！！

今、『時の庭園』にはルナの人形が潜入している。

これからやる面白いことのためだ。

今回は珍しくアリスにも手伝ってもらっている。

ライアは今回、出番なしだ。念のために待機してもらってはいるが。

「さあ、『木島 大和』！悪いが、特典の披露もなく君には死んでもらおうか！」

そう言う俺の前には、プレシアを無事に救出し、肩に担いだ木島の

姿を写すモニターがあった。

side 大和

訳がわからなかった。

僕は木島 大和、転生者だ。

僕は最終決戦において、ある一つのことを決めていた。
それはプレシアを助け出し、アリシアの遺体も回収するというもの
だった。

亮には言っていない。アイツは余計なこととはしなくても良いと言っ
たろう。

だから友美にしかこれは話していない。

友美は心配はしたが、止めることはしなかった。
むしろ応援までしてくれた。

フェイトのためにも、僕がやらなくちゃ。

そう思っていたのに……。全て上手くいっていたのに……。

最後に全員で転送をしてアースラに帰還する時に、そいつは現れた。
転送が完了する寸前、あの銀髪の少女が、気絶したプレシアと、ア
リシアの遺体と、

僕を転送魔法から引きずり出した。

「「「「大和!?!」「「「君!?!」「母さん!アリシア!?!」」」」

その声とともに、みんなは転送されていった。

「な、なにが、どうなって」

「余計なことをした結果ですよ」

と、銀髪の少女は言った。

「あまり原作ブレイクをされるのは困るんですよ。

あの金髪の転生者さんから聞いていませんか? 私たちの目的。それにはあなたは邪魔とこちらは判断しました。だから、

死んでください」

一瞬、その言葉が理解できなかった。

死？

その言葉を理解すると同時に血の気が引いた。

「ふ、ふざけるな！！僕がなにをしたって言うんだ。
皆の幸せを願っただけじゃないか！その僕が、どうして！！」

「だから、あなたは邪魔なんですって」

「うるさい！今すぐに僕をアースラへ戻せ！
そ、そうだ！このままじゃ君も死ぬぞ！」

僕は必死だった。

僕にはまだ次元間を移動するような高度な転送魔法は使えない。それに、今更アースラが僕を救助している時間はないだろう。

つまり、自分にはこの少女に頼る以外に生き残る方法はない。だからこそ僕は必死だった。

「まあまあ、ほら冷静になってください。はい、深呼吸〜」

「ふざけるな！なにが深呼吸だ！このままじゃ君も死ぬって言ってるだろ！」

「はあ、本当にパニックってますね。

私が死ぬはずないでしょう。私は氷の^{……}人形なんですから」

その言葉で、僕はようやくこの前の戦いを思い出す。

そして、ようやく僕はここでプレシアと死ぬしかないと悟った。

特典も神に選ばれたのも関係ない。

ここにきて僕は、

「た、頼むよ、助けて。

死にたくない、死にたくないよ！何でも言うことを聞く！だから！命だけは……！」

もう命乞い以外にできることはなかった。

「そ、そこまで無様に命乞いをしなくても。

正直、引きますよ？」

引かれたぐらいで助かるなら安いもんだ。
お願いだから助けて！

「…はあ、仕方ないですね。

そんなに苦しみたくないなら、私にだって慈悲くらいあります」

「た、助けてくれるの？」

よ、良かった。助かった…。

そして少女はニコリと笑い、

「だが断る！」

そう言って自爆した。

脱落（後書き）

結局、木島君は一度も特典を出さずに終わっちゃったなあ。

ゲーム開始（前書き）

今回はアリスが独占！

ゲーム開始

side 亮

俺は今、アースラにいる。

最終決戦は全て上手くいった。

プレシアを助け出し、アリシアの遺体も確保した。

友美が言うには、随分と前から計画していたことらしい。

そう、そこまでは上手くいっていたのに！

転送の直前、大和はプレシアたちと一緒に、転送魔法から引きずり出されていった。

あの銀髪の少女に。

もちろん、すぐに戻ろうとした。

引き止めるリンディさんにもわがまを言い、一人でも助けに行こうとした。

しかし、それすらやつらは許さなかった。

「アースラの人たち、聞こえる？」

それは突然の通信から始まった。

「誰だお前は！」

「そんなこと、どうでも良い」

クロノが声を上げるも、軽く流される。

まさかコイツも…！

「おい、お前！お前もこの前の銀髪の仲間か！」

「…銀髪？ああ、ルナ。そう、仲間」

ルナというのはあの銀髪のことだろう。

「お前！今すぐに大和を返せ！！」

「それは無理。でも最後の言葉くらいは届けてあげる」

「どういう意味だ？」

「少し待って。…これで良し。じゃあ、繋げる」

そう言うと、モニターに大和が写る。

「大和君！？」「大和！！」「大和！聞こえないのか！！」

皆が叫ぶが、

「無駄。これは一方通行。でもリアルタイム。存分に楽しんで」

楽しむ？楽しむだと！！

「ぶざけやがって、ぶつ殺してやる！！」

「落ち着け！今は大和の救助が先だ！」

クロノの言葉に我に返る。

そうだ、今は大和を助けないと！

「艦長！僕は今から大和の救助に向かいます！」

「俺も行く！このまま見ているなんてできねえ！」

「私も行きます！」

「僕もです！」

なのはとユーノも名乗り出る。

「…許可します。」

しかし、時は一刻を争います。ですから時間制限をつけます。良いですね？」

「かまわねえ！行ってくる！！！」

待ってるよ、大和！

「…なに勝手に助けに行こうとしているの？」

と、今まで無言だった少女がそれを遮った。

「今はお前にかまっている暇はねえんだよ！黙って「助けに行ったらアースラを沈める」…！？」

そうやつは言った。

「なん、だと…！？」

「聞こえなかった？助けに行ったらアースラを沈めるって言っ

それは、明白な脅しだった。

「ハツタリだ、亮！どうやって次元航行艦を沈めるって」「こつやつて」「…つな！？」

クロノが声を上げるも、アースラのすぐ脇を巨大な次元跳躍魔法が突き抜けた。
皆、声も出ない。

「ハツタリじゃないってわかった？」

その声に反応できる者はいなかった。

「クスツ、わかったらそいつが死ぬのをそこで大人しく見ていて」

こ、コイツ…！！遊んでやがる！

腸が煮えくり返るとはこのことを言うのだろう。
皆も同じ表情だ。

「…あなたたちは、一体なにがしたいの！？」

なのはが叫ぶも、それはアッサリとした言葉で返ってきた。

「ん、娛樂？かな？」

その言葉に、今度こそ全員が沈黙する。
誰も二の句をつけない。

「ご、娛樂だと…」

「そう、娛樂」

クロノの言葉にもアツサリ返す。

「てめえらは、人の！命を！何だと思ってやがる！！」

「そんなのどうでもいい。

それより、あなたたちの仲間。面白いことになってる」

「「「「ツ！！」「」「」」

モニターを見ると、大和が銀髪のアイツ、ルナに命乞いをしている。

そして、

「だが断る！」

その言葉とともに映像は途絶え、

「…うふふふふふふふ、アハハハハハハハハハ！」

やつの高笑いがブリッジに響きわたった。

「……ろ……やる」

「アハハハハ！な、なに？き、聞こえな、プツ、アハハハハハ！」

「ぶっ殺してやる！！」

俺は思わず叫んでいた。

この世界にきて力を手に入れ、絶対に人を殺したり、傷つけたりしないと誓っていた。

でもコイツは駄目だ。許せねえ。

「……へえ。殺す。私を？」

「お前ら全員だ！お前も、銀髪も、もう一人のやつもだ！」

「…ふうん」

しかし、やつは心底楽しそうだ。

初めは眠そうだったやつの目は、今、完全に見開かれている。

「じゃあ、ゲームをする。

私たちはこれから動き続ける。あなたは強くなれば良い。

決着は十年後。

それまでにあなたが私たちを捕まえるか、殺せればそっちの勝ち。

出来なければ、あなたたちを殺す」

…十年後、stsか…！？

「それまで、せいぜい頑張つて。それじゃ、また半年後」

それを最後に通信は途絶えた。

「アレックス、発信元は？」

「…は、はい！すみません、特定できませんでした。妨害されていたようです」

「…そう、わかったわ」

リンディさんのその言葉を最後に、ブリッジには言葉がもれることはなかった。

ゲーム開始（後書き）

はい、これで今日はこれで正真正銘の最後です。

明日に備えて今日は寝ます。では、おやすみ。

やじつちゅおおお（前巻を）

今回は短いです。

どうしよおおお

ヤッホー！ーウ！

大成功！アリスさんマジパネエツス！！

あ、どうも！レン＝ベルツです！

何故こんなにテンションが高いのかというと、この前の録画映像を観ているから。

アリスは連中相手に大立ち回りをしていた。

いや、最初は軽く挑発して、それで映像を見せれば良いという話だったんだが…。

アリス、お前は悪役の天才だ！女優になれるぞ！！

まあ、後で聞いたらほとんど素だったらしい。

…訂正、お前は本物の悪だ！！親玉の俺が言えることじゃないけど。

さ、なにはともあれ、作戦は無事に完了した。

邪魔な木島は始末したし、原作の極端な乖離も防いだ。

あえて言うなら、フェイトが極端に俺たちを恨むようになったことぐらいか。

まあ、どうでも良いけど。

どうせ最後にはもっとエグいことをする気なんだし。

そうそう、これからの予定なんだが、A・Sではとりあえず冗談抜きでやらなきゃならないことがある。

それは夜天の書、つまり闇の書からの研究データの回収だ。

え？今のうちに力ずくで回収すれば良いって？

いやいや、あれは今、俺の手元にあった時よりもかなり凶悪になっているんスよ？

持ち主以外がアクセスすると、持ち主ごと転生してしまうあの機能。

この機能が、正直とても邪魔だ。誰だよ、勝手にいじったの！？

あのデータは防御プログラムの認証がないと閲覧できない。

そして、防御プログラムは完全に俺しか認証しないため、あのデータは確実に見れないんだが…。
壊れているんだよなあ、アレ。

取り出そうとして反応しなかったら、A・Sはそのまま終了だ。
はやてごと闇の書は消えてしまふ。それは面白くない。

最も安全なのは、A・Sの終了時で防御プログラムごと管制人格が破壊された時に掠め取ることなんだが、逃げられたら俺の今までの研究のほとんどが管理局に渡る。

しかし、これ以上安全な方法はない。
どうするか…。

んん？破壊？

あつ、そうか！あの手があつた！

そんな博打みたいなことをしなくても良い作戦があるじゃん！

そうと決まればあとは簡単だ。ルナたちを呼ばなくては。

「失礼します、御用でしょうか？」

「どうせ、まったくだらねえこと考えついたんだろ」

「もしそんなことのために寝る邪魔をしたなら許さない」

いきなり第一声がこれである。

ホント、ルナは良い子だと思い知る。

だが、

「これから話すのは、半年後に控えた面白いことについてだ」

三人の顔つきが変わった。

ルナは真剣な顔に、ライアは獰猛な笑いに、アリスは瞼が上がった。

「A・Sの内容は頭に入っているな？」

だが、あのままでは俺のデータを管理局に奪われる。
ではどうするか？簡単だ。

防御プログラムを残したまま、A・Sを終了させる」

そう、これが俺の最善の手だ。

どうしようおおお（後書き）

というわけで、今日はできればもう一話だけ…。

幼女です（前書き）

次回からA・Sです。
…たぶん。

幼女です

side 亮

俺は、何もできなかった。

あの後、大和の両親にはリンディさんが直接会い説明をした。
あの時の大和の両親とリンディさんの顔が今でも忘れられない。

それ以来、俺はひたすら訓練に明け暮れた。
あの戦いで、俺は自分の弱さを思い知った。
半年後にはA・Sが始まる。それまでに、

「もつと強くならねえと!!」

アイツは言った。『また半年後』と。

それは、A・Sにおけるやつらの介入を意味する。
しかし、この意味がわかるのは俺と友美とユーナだけだ。
そして、友美には戦う力がなく、ユーナは裁判中。

つまり、俺が頑張るしかない。

ユーナが言うには、やつらは原作ブレイクに非常に敏感だという。
逆に言えば、原作ブレイクをしようとすれば、やつらは必ず現れる。

次は絶対に負けねえ!

あの女も、銀髪も、ユーナを襲ったやつも、A・Sで絶対に仇を討つ!

もう今までのように妥協はしない。

大和は、原作をもっと良い方向に変えられると証明してくれた。ならばA・sの悲しい運命だって変えてやる。

そして、現れたアイツらを一網打尽にする!!

s i d e o u t

はい、皆さん、こんにちは。レン＝ベルツです。ただいま非常に困っています。何故かというと、

「ねえねえ教授!!遊んでよ!!」

幼女に抱きつかれているからです。

どうしてこうなった!!

いや、原因はわかっている。俺のせいだな。俺が昨日ついに、

『アリシア＝テストロッサ』を蘇生させてしまったからだな…。

えっ?アリシアは爆発に巻き込まれたって? いやいや、実は巻き込まれていないんですよ。

何故なら、アースラが来た時にはもう方舟に死体は運び込まれていたからな。

プレシアが大事そうにしていたのは、ただの人形だ。

まあ、見た目は変わらないように作ったから見破れなくて当然だけど。

フエイトが時の庭園に報告に戻った時にライアに入れ替えきてもらった。

そして問題の蘇生なんだが、そこは俺の技術チートの出番だ。

脳の中身から記憶をデータとして引き出すことなど、俺には造作もない。

幸いにも死体はきれいに保存されていて助かった。

実際、昔プログラム体になるために自分の記憶を転写しているし。

記憶にブレがあるといけないから、プログラム体になる前から記憶転写の技術はマスターしている。

そして体はさらに簡単。クローン技術で造った。

なんせ、元の体がそこにあるんだから、造るのはたやすい。

はい、蘇生完了！なんだが…。

…おいお前ら、その目はなんだ？

「いえ、教授は守備範囲が広いなあ、と思っただけです」

「おいおいルナ、そんなオブラートな言い方をする必要はねえって。こんな性犯罪者なんかロリコンで充分だろ？」

「やだ、こっちに來ないで。妊娠する」

「お、おい、そこまで言わなくても良いだろ、お前ら」

そう言っで近づくと、こいつらは後ずさる。よく見ると、絶対に半径2メートル以内に入っでこようとしなひ。さすがに傷つく。

「だっで、明らかに必要がないこの子を蘇生させる意味がわかりません。

戦力は足りていますし。

そうなると、その…、夜のお相手くらいしか役目は残っでいないのではと…」

「うわ、マジで最低だな、お前。

光源氏とか、同じ男として引くわあゝ。キメエゝ」

「……………最低、クズ、変態、蛆虫、ゴミ、顔も見たくない」

「あはは、最低最低ゝ！」

「デメエらな……………！！

はあ、落ち着け。これも作戦のうちだっでいうか、アリシアはちよつと黙っでいてくれ！頼むから！」

そう言っでもこいつらは近寄っでこない。

「しかし…」

「そんなに言っなら納得できる証拠を見せろよ」

「同意見。できないならロリコンに決定」

こいつら、どうしても俺をロリコンにしたいらしいな…！
なら、これでどうだ！？

「アリシア、お前はお前の妹たちをどう思う？」

「「「？」「」」

三人とも、なに言ってるの？という顔になる。
しかし、

「……………」

「えっ！？」「なるほどな」「…へえ」

アリシアの言葉に三人は納得した表情になる。

「これで証拠は充分だろ？」

「…そうですね。疑ってすみませんでした」

「クククツ、アンタ、最高に最低だな」

「外道の極み。私より悪趣味」

そう、A・sに向けての準備はもうすでに始まっているんだよ。

ああ、楽しいことになりそうだ。

A・sはこの子が楽しませてくれるだろう。

この対転生者用人造魔導師五号機『アリシア』テストロッサ』がな
！！

幼女です（後書き）

アリシア蘇生！！

しかし、ただのアリシアと思うなかれ！！
なんせ教授の仲間ですから。

人物設定 A・S（前書き）

A・Sの人物設定です。

人物設定 A・S

教授サイド

レン＝ベルツ

性別 男

年齢 プログラム体のため歳をとらない。

一応、二十代中盤くらいに設定している。
その気になれば変更可。

特典 技術チート

魔力をそこそこ

古代ベルカに転生

他の転生者を呼ぶ

魔力 A A A

魔力光 黒

魔導師ランク 総合 A A A +

デバイス 魔導書型デバイス『黒天の書』

稀少技能 なし

容姿 伸ばした金髪を後ろで結んで下ろしていて眼鏡をかけている。
常に白衣を着ている（科学者っぽいから）

擬人化クルル？

紹介 古代ベルカに転生した元高校生の日本人。

第二の人生を楽しむために、あえて主人公たちと敵対することを選ぶ。

インドア派のモヤシに思われがちだが、激動の戦乱時代を生きぬいてきたため

意外と強い。

デバイスに自分の全データがあるため、リンカーコアを破

壊されるか『黒天の

書』を破壊されないかぎり死なない。
普段は『教授』と呼ばれている。

ルナ＝ベルツ

性別 男

年齢 9歳

魔力 SSランク

魔力光 白

魔導師ランク 空戦SS 陸戦S+

デバイス 剣型デバイス『アルテミス』

稀少技能 魔力変換資質『氷結』

容姿 透けるような白い肌に深い青色の瞳、腰まで伸びた銀髪。

白い服を好む。

紹介 主人公の秘書兼助手兼方舟の最終兵器。

主人公が対転生者に生み出した人造魔導師の一号機。

本来は二号機以降を製作する時の助手にしようと、実験目的で造られた。

しかし、想像以上の強さと容姿になったため仕事を兼任することになった。
主人公を敬愛している。

アリス＝ベルツ

性別 女

年齢 9歳

魔力 SSランク

魔力光 黒

魔導師ランク 総合SS

デバイス 魔導書型デバイス『レメゲトン』

稀少技能 ???

容姿 肩まで伸ばした黒髪と紅い瞳。いつも眠そう。

ゴスロリが基本的な服装。

紹介 対転生者用の人造魔導師の二号機。

三号機の『ライア』と同時進行で造られたうえ同じ遺伝子から造られたため、『ラ

イア』とは双子。

普段は寝てすごしている。

わかりにくいが、主人公のことはそこそこ尊敬している。

ライアⅡベルツ

性別 男

年齢 9歳

魔力 S-

魔力光 赤

魔導師ランク 空戦SS 陸戦S-

デバイス 銃型デバイス『ペロボーグ』

稀少技能 ???

容姿 黒髪に金色のツリ目。

瞳の色以外は『アリア』と同じ。

実は主人公の服装をリスペクトしている。

紹介 対転生者用の人造魔導師の三号機。

『アリス』とは双子。

言葉にはしないが、『ルナ』と同じくらい主人公をしたっている。

イデア
||
ベルツ

年齡 9 歲

魔力
S
+

魔力光銀

魔導師ランク 空戦SS

デバイス 斧型デバイス ユピテル

稀少技能
???

腰まで伸ばした黒髪をポニーテールにしている。

瞳は紫色。

これは潜入用の変装で、地毛はプラチナブロンド。

紹介 対転生者用の人造魔導師の四号機。

現在は海鳴に潜入中。

転生者『佐藤友美』として転生者たちを見張る。

闇の書の暴走を機に転生者たちを裏切る。

アリシアII テスタロッサ

性別
女

年齡 5 歲

魔力
S

魔力光金

魔導師ランク
???

デバイス 鎌型デバイス ロキ

稀少技能
???

容姿 昔のまま

紹介 対転生者用の人造魔導師の五号機。

教授の技術によって蘇生した。

戦闘技術はすでに脳にインストールされている。

教授によって何か細工が？

転生者サイド

河内 亮

性別 男

年齢 9歳

魔力 A A A +

魔力光 白

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 剣型デバイス『カリバーン』

稀少技能 零落白夜

要は剣の形の A M F。

しかし密度と濃度が段違いなため、普通の魔法では勝てない。

燃費が超悪い。

容姿 某ライトノベルの『織○一夏』

紹介 転生者その一。

大和の仇を討とうと、自分から原作ブレイクをして教授たちを誘い出そうと考え

ていた。しかしユーナに諭され思いとどまる。

木島 大和

性別 男

年齢 9 歳

魔力 A A A -

魔力光 緑

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 剣型デバイス『グラム』

稀少技能 S E E D

結局、一度も使われずに終わったレアスキル。

空間把握と反応速度が凄まじくなる。

容姿 某アニメの『キ〇〇ヤマト』

紹介 転生者その二。

原作ブレイク賛成派だった。

別に疚しい理由ではなく、なのはたちをもっと幸せにした
いという正義感から。

ルナの自爆に巻き込まれ死亡。

ユーナⅡテストロッサ

性別 男

年齢 9 歳

魔力 A A A

魔力光 黄

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 斧槍型デバイス『グラディウス』

稀少技能 加速

音の三倍近くまで速く加速できる。

しかし、その速度は自分で反応できないうえに、細かい調節ができない。

おまけに急停止と急加速は反動が強すぎて、バリアジャケットがないと自分

にダメージがくるといふポンコツ具合。

一回一回の移動でバリアジャケットにダメージが行くため、再生されるまで

は加速できない。

容姿 髪を肩までしか伸ばしていないフェイト
紹介 転生者その三。

現在、フェイトとともに保護観察中。

私立聖翔大付属小学校に転入。

人物設定 A・S（後書き）

随時更新します。

こっそり行きます（前書き）

主人公、暗躍！！

こっさり行きます

sideユーナ

戦局はとても有利だ。

原作でフェイトたちが不利だったのは、カートリッジシステムのこと、人数が同じだったということ、何より戦闘向きではないユーノがヴィータの相手をしていたというのもあったのだろう。

しかし今は違う。ヴィータの相手は俺がいるし、ザフィーラとは亮が闘っている。

これでアルフとユーノが結界を破ってくれる。その予定だったが…。

【アルフ、ユーノ！まだなのか！】

【転送の準備はもうできてるけど、結界が…！】

【この結界、ムチャクチャ固いんだよ…！】

唯一の誤算は、この結界の固さが俺たちの想像を超えていたことだろう。

二人が結界を破るのに専念しているのに、一向に破れる気配がない。

（クッ、このままじゃ…）

【亮君、フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん、ユーナ君。

私が結界を壊すから、タイミングを合わせて転送を…！】

タイムアップか…！

【駄目だ、なのは！そんな身体で無茶すんじゃねえ！！
結界なら、俺がなんとかする！こんなの、零落白夜で…！】

亮が念話で叫ぶ。他の皆も心配そうだ。

【大丈夫…！スターライトブレイカーで撃ち抜くから！
それに、亮君のは凄く身体に負担が掛かるんでしょ？私がやらなき
ゃ】

そして、魔力の収束が始まった。
ヴォルケンリッターたちもそれに気づくが、皆が足止めをする。

【ユーナ、ザフィーラを頼む！】

そう言つて亮がなのはの方に向かっていった。
シャマルの『旅の鏡』からなのはを助けるためだろう。

【貸し一つだ。気をつけるよ】

【恩に着るぜ】

そして、

「なのは、危ねえっ！！」

なのはに飛び込み、間一髪で『旅の鏡』をかわした…、ように見え
た。

（よし、これで！）

しかし、『旅の鏡』は寸分違わずになのはを貫いた。

side outo

おーおー、やってるなあ。

ミッドチルダ式vs古代ベルカ式はとても白熱してやはり良い。

あ、どうも。レン＝ベルツです。

今、俺が一体なにをやっているのかというと、

主人公たちvsヴォルケンリッターの闘いを眺めています。
しかも生で。

何故そんなことをしているかというと、さっき河内がやったことを
利用するためだ。

アイデアからの報告によれば、河内のやつ。

今度は原作ブレイクを積極的にするつもりらしい。
それで俺たちを誘っているんだと。

なるほど、良い作戦だ。

俺たちの目的からすれば、確かに動かざるを得ない。畏だとかわかっていてもだ。

だがしかし！甘い！甘すぎる！！

何故なら、お前たちは俺たちが動いていることに気づくことすらでき
ないからだ！

現に、今の『旅の鏡』、俺がクリアルヴィントにこっそりアクセスし、座標を修正したのに気づくことができなかっただろう。

え？なんでそんなことが出来るのだった？

やだなあ、アイツらが誰の守護騎士だったのか忘れたのか？

つまり、アイツらのデバイスだって俺が作ったんだぜ。勝手にアクセスするのなんて簡単だ。

俺にしかできないけどー。

今日は俺一人なのはそのせいだ。

ちなみに、ユーノたちが結界を破れないのもそうだ。

俺がこっそり結界を補強している。

俺だってベルカ時代の出身だ。古代ベルカ式くらい使える。

そして、

「スターライト、ブレイカー！！」

結界が破られる。

「さてと、今回はこれで終わりか」

さっさと戻らないと管理局に見つかってしまう。

しかし…、

「アイツら…、全然変わってなかったな…。ま、当然か…」

そう呟き、俺は転送魔法で姿を消した。

こっそり行きます（後書き）

A・Sでは主人公たちはあまり目立とうとしません。
…途中までは、ですが。

転生者の苦悩（前書き）

ふと思い浮かんだのでそのまま執筆。

転生者の苦悩

side 亮

くそッ、何もかもが上手くない。

この前の戦闘だってそうだ。なのはを助ける、それだけのことすらできなかった。

俺はこの前の戦闘からずっと苛々している。なのはやユーノたちも心配してくれたが、こればかりはどうにもならない。

俺には、なのはをシャルの攻撃から守るという小さな原作プレイクさえできなかった。

このままじゃ駄目だ。そう思って半年間、訓練してきたのに…。全部、無駄だったのか？どうすれば、どうすれば良い！！

目を閉じれば大和の最期と、あの女の笑い声を今でも思い出せる。あんなことは、もう二度と…！！

「…ちょ…と！…と聞いてるの、亮！！」

不意に聞こえたアリサの声で意識が浮上する。

「あ、ああ、わりい。聞いてなかった…」

「…アンタ、大丈夫？このところずっと上の空だけど」

「そうだったか？いやー、最近新しいゲームを買ってよ。それで寝

不足なんだよ」

「…なら良いけど。困ったことがあるなら相談しなさいよね」

そう言っただけでアリサはフェイトたちの方へ立ち去っていった。

もうフェイトとユーナが転校してきてもう数日経っている。二人とも、アリサたちの助けもあり、順調に学校に馴染んでいた。

そっか、もうそんなに経ってんのか。

それはつまり、次の戦闘が近いことを示している。

チツ、アイツらはいつ介入してくる？

ヴォルケンリッターよりも、むしろそっちの方が気になる。

どうすればアイツらを…

「おい、少し顔を貸せ」

すると、ユーナが声をかけてきた。

「…別に良いけどよ、どこで話すんだ？」

「どこでも良い。人がいなければな」

そして俺たちは屋上に来た。

すると同時に、ユーナに顔を殴られる。

「つてえな！何しやがる！！」

「自分の胸に聞け。わかるまで殴り続けるがな」

そしてもう一発。この野郎ッ！！

「言いてえことがあんなら言えよ！何がしてえんだ、テメエは！」

反撃として一発、俺も殴り返す。
しかし避けられた。

「…まだわからないのか」

「ああっ？何がだよ！！」

コイツは本当に何がしたいんだ。

「はあ、全くわかっていないな。
今のままだと、死ぬぞお前。それも木島と同じようにアイツらに殺
されてな」

「なんだとッ！！」

大和の名前を聞いたとたん、反射的にユーナに掴みかかる。

「大和を馬鹿にするならテメエでも許さねえぞ！！」

「別に馬鹿になんてしていいない。だがな、お前がしているのはアイ
ツの死を無駄にすることだというのはわかる。

…少しは冷静になれッ！！そんなんじゃ、やれることだってできな
くなるぞ！！

それがアイツらの策だと何故わからない！」

その言葉に頭が冷える。

「…策って、どういうことだよ？」

「ようやく話を聞ける状態になったか」

ユーナは一瞬だけ安心した表情を見せると、すぐに元の表情に戻る。

「簡単だ。あの女どもはプレッシャーをかけてるんだよ、俺たち転生者に。」

それだけで俺たちへの抑止力になる。わざわざ闘わなくてもな。事実、お前はやつらに怯え、このところはずっと上の空だっただろう」

…確かに、A・Sが始まってからはろくに休めていない。いつアイツらの襲撃があるかとずっと警戒していた。

「そしてお前が何か原作ブレイクをすれば、アイツらはこれ幸いと弱ったお前を殺すだろう。片手間だな」

「……………」

何も言い返せなかった。

おそらく、コイツが言ったことは全て正解だろう。

怯えていたのも事実だ。だが、だがよ…ッ！

「じゃあ、俺はどうすれば良いんだ！アイツら、次はお前や友美を殺すかもしれねえんだぞ！それに、アイツらは大和の仇だ！ジツとなんかしてられるかよ！」

「なら、お前はアイツらに勝てるのか？

ライアとかいうやつは俺より遥かに強い。ルナとかいう女は木島と二人がかりでも歯が立たなかったんだろう。そしてモニターの女、アイツは個人で次元航行艦を沈められるんだ。勝てるわけがない」

「それはそうだけだよッ！」

「冷静になれ。アイツらは俺たちが何もしなければ襲ってこない。無印でのことは、おそらく戦力分析だ。

実際、佐藤以外の全員が特典を調べられたんだ。もう俺たちに用はないだろう」

「…確かにそうけどよ。

じゃあ俺は、アイツらがこれから何をしてただ指をくわえて見てるってのか」

そんなこと、俺にはできない。

「誰がそんなことを言った」

ユーナはそう言って不敵な笑みを浮かべる。

「確かに今は勝てない。今はな。

だがな、決戦はstsだ。それまでに勝てば良い。焦る必要はない。それにやつらは絶対にstsで必要な原作キャラを殺したりはしない。

木島が死んだ時にプレシアしか巻き込まなかったのが証拠だ。

もしかすると、いや確実にやつらは卑劣な挑発をしてくるだろう。

だが、それでも耐えろ。

俺はs t sまでにあのライアとかいうやつに勝つ。
それまでは死ぬわけにはいかないからな」

思わず呆然とする。

普段は無口なコイツがここまで饒舌に話したのもそうだが、何より、
アイツらを倒すための明確な道筋が見えた気がしたからだ。

「わりい、俺がどうかしてたわ。

こりゃ、殴られて当然だ。勝手に悩んで勝手に潰れるところだった」

「フェイトたちにも謝っておけ。心配していたぞ」

「ああ、そうする。

本当に悪かったな、これからも俺がこうなったら遠慮なく殴ってくれ」

「了解した。その時は覚悟しておけ、容赦しない」

「それは味方に言う言葉じゃねえ！」

もう軽口を言えるくらいにはなっていた。

もう大丈夫だ。俺はもうこんなことで躓いたりしない。

そう、俺は…。

このとき、俺は考えもしていなかった。
まさか、人を弄ぶために死人すら利用するやつがいるなんて。
想像すらできなかった。

転生者の苦悩（後書き）

次回、外道アリシア登場！！…たぶんですが。

チャンス（前書き）

アリシアは次回です。

はあ、今回はあまり閃かなかったなあ。

チャンス

皆さん、どうも。レン＝ベルツです。

明日、ついに第二戦が始まります。

今はその作戦会議をしている。まあ、基本的に俺が指示をするだけなんだが。

「さて、明日にはまた戦闘がある。

A・Sの情報はアリシアを含め全員が知っていると思う」

なんせ、造った時に刷り込んだからな。全員に。

「明日のあいづらは今までとは一味違う。

ベルカ式カートリッジシステムをデバイスに搭載したからだ。

「ご丁寧に転生者どものデバイスにも搭載されたいらしい」

こいつらは最初から搭載しているけどな。アリス以外。

だってこいつ魔導書型デバイスだし。

「だが負けは許されない。

今回の戦闘、正直あまり意味はない。だが、だからこそ意味がある」

俺たちが動く。

それだけで意味がある。

あいつらは俺たちの目的を推測するだろう。

しかし、現状でそれはわかりっこない。なんせ、今回の戦闘にたいした目的なんかないんだからな。

あえて言うなら、守護騎士たちを無事に逃がすことか。

イデアの報告によると、河内が調子を取り戻したらしい。
せっかく追い込んでいたのにテストロッサ（兄）の激励で、もう完全復活だ。

おのれ、許すまじ！

まあ今回のターゲットはフェイトであると同時にあいつだからな。

「ま、軽く捻り潰してこい」

side 亮

状況はかなり有利だ。

原作でもそうだったが、カートリッジシステムを手に入れたのはとフェイトは今、守護騎士たちと互角の戦いを繰り広げている。

二人とも一対一の戦いを望んだため、俺たちは今、もう一人の騎士のシャマルを探している。

俺とユーノは結界の中を、クロノとユーナは外を探している。

まあシャマルが外にいることはもう知っているため、俺はなのはたちの戦闘に巻き込まれないようにするくらいしかすることはないんだが…。

おそらく、そろそろクロノがシャマルを見つける。

リーゼたちに邪魔されるんだろうがな。

そして結界の破壊を行うはずだ。

ここにきて、俺はもうあいつらと無理に戦おうという考えはない。

ユーナの言ったとおり、俺はまだあいつらに勝てない。

だから、無理に原作ブレイクをしてあいつらと戦う必要はない。

…そう思っていたのに、

「皆、大変！結界に侵入者！魔力反応、複数！！」

結界を純白の魔力が突き破った。そして、

「侵入成功です。皆さん、お久しぶりですね」

初めてあった時、そして大和を殺した時と全く変わらない笑みでそいつは現れた。

「お前は…！」

「…ッ、フェイト！よせ！」

直前まで戦っていたシグナムを無視し、憎悪に満ちた表情でフェイトがルナに斬りかかった。

「つと！いきなり何ですか！？危ないじゃないですか！」

「お前が母さんを！アリシアを！」

しかし、ルナは前と同じように氷の剣でバルディッシュを受け止める。

「（氷の剣！？）フェイト、離れろ！そいつは本体じゃねえ！人形

だ！」

それでもフェイトは止まらない。

「バルディッシュ、カートリッジロード！」

「Load Cartridge」

カートリッジを炸裂させ、力ずくで剣ごとルナを魔力刃で真つ二つにした。

やばい！！

俺は全力でフェイトに近づき、そのまま捕まえてその場を離れた。すると、やはり人形は爆発した。

「フェイト、大丈夫か？」

「…ごめん、亮。助かった」

フェイトも幾分か落ち着いたようで、ちゃんと俺の言葉に受け答えをしてくれる。

「ありやりや、いきなり真つ二つにされるとは思いませんでした。囑託とはいえ本当に局員ですか、あなたは」

そう言って呆れたように再びルナが現れた。今度は剣型のデバイスをもっている。

「ようやく本人のお出ましってことかよ。」

てつきりビビッて出てこれないんだと思ってたぜ」

強がりを言ってみるが震えが止まらない。
本人を前にして改めて感じた。実力が違う。

「横槍とは無粋だな。何者だ？」

そうシグナムがルナに問いかける。

「これは失礼しました。

私はルナ。あなたたちの味方、と考えてくださって結構です。
今は、ですが」

「それで、私たちに何の用だ？」

「今から結界を破ります。守護騎士の皆さんは退いてください。
時間も私たちが稼ぎますので。」

「…何の目的があつて我々を助ける」

「知る必要はありません。時期が来ればわかります」

その言葉とともに、外側から結界が破られる。

「さ、どうぞ。早く行ってください」

「…礼は言わんぞ」

そう言つてシグナムたちは撤退していく。

「シグナム！くっ！」

フェイトが追おうとするも、間に黒いフードを被った謎の人物が割り込んできた。

その手には巨大な刃の鎌のアームドデバイスが握られている。

見れば、なのはのところにはあのライアとかいうやつが割り込んでいる。

アルフはザフィーラを追っていった。

【エイミィさん！守護騎士たちは！……エイミィさん？エイミィさん！！】

「無駄ですよ。この辺一帯にジャミングを施しました。通信は使えません」

くそッ！やられた！

ならばせめて、

「お前ら、今度は何しに来た！」

少しでも時間を稼ぐ！

結界の破壊に気づいて、クロノとユーナ、他にも武装隊の人たちがすぐに来てくれるはずだ。

それまで少しでも。

「時間稼ぎのつもりですか？」

ッ……！？

完全にはれてる。

「それも無駄です。何故なら」

そう言つてルナは封鎖結界を張つた。

「これで出ることも入ることもできません。

ああ、安心してください。今日はあなたたちと戦いにきたわけでは
ありませんから」

結界に気づき、なのはとユーノがこちらに合流してくる。

3対4か。数ではこちらが有利だ。数だけならばな。

「そつちはそのつもりでも、私たちには関係ない。
あなたたちを、殺人の容疑で逮捕します」

フエイトのその言葉に、ライアが嘲笑を浮かべる。

「はあ？逮捕？笑わせてくれんなあ。返り討ちにしてやるよ！

…と言いてえが、残念ながらテメエの相手は俺じゃねえ。こいつが
相手だ」

そう言つてフードの魔導師を指し示す。

こつちもさつきからバンバン殺気を放つてきていて、殺る気満々の
ようだ。

「こら、二人とも！今日は戦いにきたんじゃないって今言つたでし
よう」

しかしルナが間に入つて二人を宥める。

「おいルナ。ここまで来てそりゃねえだろ。一暴れしようぜ」

「……………（コクコクコク）！！」

それでも二人は止まらない。

「二人とも、今日の目的を思い出してください。今日の目的はそんなことじゃないでしょう。」

「すみませんね。この子たちがこんなで」

そしてこちらに謝ってきた。正直困る。

「今日は、あなたたちにチャンスをあげようと思って来たんですよ」

「チャンスだと？」

「そう、チャンスです」

…どういってもりだ。

「そちらの…、フェイトさん、でしたっけ？」

「あなたがこの子に勝てれば、私たちは三人ともこのまま自首します」

「「「「！？」」「」「」

なんだと！！

「嘘ではありませんよ？神に誓います」

「…本当だね？」

そう言い、フェイトが前に出る。

「ええ、あなたが降参するか、戦闘不能になればあなたの負け。この子がそうなれば、あなたの勝ちです。」

途中、私たちは乱入しませんし、そちらの三人とも戦いません」

「…わかった。約束は守ってよ？」

「フェイト、やめろ！絶対に罠だ！」

俺が叫ぶがフェイトはかまわずにフードの前に出てしまう。

そして俺は見た。フードに隠されたやつが口元が、

ゆっくりと笑みに変わっていくのを。

チャンス（後書き）

次回は外道で行きます。

本物（前書き）

外道アリシア、推参！！

本物

sideフェイト

亮が私にやめるように言うけど、私だって感情のまま動いてるわけじゃない。

確かに母さんの仇だからっていうのもあるけど、ここで私がこの子を倒せばそれだけで相手の戦力が減るし、兄さんたちが結界を破る時間稼ぎもできる。

それに、私がやられてもこの子だけでもなのはたちが捕まえてくれると思う。

「負けるつもりはないけどね。行くよ、バルディッシュ」

「Yes , sir」

そして、戦いが始まった。

sideout

sideluna

アリシアとフェイトさんの戦闘が始まりました。
全力のフェイトさん相手に、アリシアは結構押されています。

あの子、初経験ですからねえ。

いくら教授が改造して魔力量がSでも、さすがにこの差は埋めがたい。

戦闘知識はあっても戦闘経験はない。

それにフェイトさんは速い。実際に相手にしてみれば、おそらくもっと速く感じるのだろう。

初戦闘の相手としては最悪の部類だ。

つまり正直なところ、正攻法ではアリシアに勝ち目はない。

「おい、約束は守るんだろうな？」

フェイトさんが優勢なのを見てか、転生者の人が確認してくる。

「嘘だバーカ！……って言ったらどうする？」

その言葉を聞き、三人の顔が強張る。

「デメエら！！」

「はいはい、落ち着いてください。ライアも挑発しない」

そう言っても二人は睨み合ったままだ。

「真面目な話、私たちはあの約束を反故にもできるんですよ？
する気はありませんが」

それを聞き、なのはさんがホッと息をついた。

正直な子ですねえ。将来が心配です。

「ですが、たぶん、いえ。

絶対にフェイトさんはあの子には勝てませんよ。

なんせあの子はフェイトさんに対しての切り札でもありますからね。まあ、その意味はすぐにわかります」

おそらく、そろそろ状況が傾く。

その瞬間こそがフェイト〃テストロッサの最後だ。

そして、

「これで！」

「Plasma Smasher」

「終わりだあ！」

砲撃魔法がアリシアに直撃した。

「フェイトちゃん！」

「やった！」

「よし！さあ、約束どおり自首してもらっぜ！なにが切り札だ！圧勝じゃねえか！」

三人が喜びの声を上げるが、

「ライア？」

「ああ、まだだな。むしろ、逆の意味で終わりじゃね?」

私もそう思う。

これでフェイトさんは終わりですね。

「それはどういう意味だ!」

「だから、見てりゃわかるっつーの」

「ええ。見るだけで、ね」

そして、アリシアの素顔が晒された。

「本当は、見るからこそが駄目なんですけどね」

s i d e o u t

s i d e フェイト

その顔を見て、心臓が止まるかと思った。

「…私?」

そう、その顔は私だった。

毎日鏡で見る見慣れた顔だ。いつも一緒にいてくれる兄の顔だ。

「違うよ」

初めてその子が発した声も、いつも聞き慣れたものだ。

「あなたが私なんだよ、フェイト」

「…まさか、あなたもプロジェクトFの」

咄嗟にその考えが浮かぶ。
しかし、

「半分は正解だよ。」

でも、私はあなたみたいな出来損ないじゃない。
あなたは記憶、肉体、魔力資質、すべてが失敗。
私は違う。

魔力資質以外は全て同じ。

私は本物のアリシアなんだよ、あなたと違ってね」

言葉が出ない。出来損ない、失敗、本物。
全ての言葉が胸に突き刺さる。

「それにしても、ひどいなフェイトは。
私をこんなにボコボコにして。そんなに私が憎かった？」

「ち、違うよ。」

これは、アリシアだって知らなかったから。それで」

「きっと知っててもそうしたよ、フェイトは。
本当にひどいなあ。」

あ、そつか。だからお母さんに捨てられちゃったんだ。そうだよ。こんなひどい子なんて娘じゃないもんね？お母さんは優しかった。

いつも仕事で忙しかったけど、私のことを愛してくれた。人形のあなたなんかと違ってね」

「や、やめて。もう」

思わず蹲り、耳を塞いだ。

それでも構わず、彼女は、アリシアは私を責める。

「人形は人形らしく、私の真似をしていれば良かったんだよ。

そんなことも満足にできないからあなたは捨てられた。

そして満足にお母さんの役にも立つことすらできなかった。

捨てられて当然だね。

お母さんが死んだのも、あなたが弱かったせいだよ。

むしろ、あなたなんか…、

生まれてこなければ良かったんだよ」

その言葉を最後に、私の意識は暗転した。

side out

side 亮

「フェイトちゃん、フェイトちゃん!」

「フェイト!しっかりして!」

崩れ落ちたフェイトを抱きかかえ、とユーノが必死に声をかけているが、フェイトは目を覚まさない。

当然だ。心の一番深い所にあるトラウマを一気に、それも本人に抉られたのだから。

本当はアリシアが出てきた時点で、俺たちはすぐに戦闘に介入しようとした。

しかし、こうなることを初めから予想していたのだろう。
ルナとライアに邪魔されて、俺もなのはもユーノも動けなかった。

そして、恐れていた最悪の事態になってしまった。

「あらら、残念〜。

フェイトさんは戦闘不能のようなので、この勝負はアリシアの勝利です〜。

チャンスを生かしきれず、残念でした〜」

「ククク、約束はちゃんと守ってやったぜ?

むしろ、ルール違反を止めたんだ。これは褒められることだろ?

「いやー、俺たち良いことしたなあ」

「デメエら……！！」

白々しく二人が話している。

初めからこいつらに勝負する気なんてなかった。

ただフェイトを傷つけ、それを見ていることしかできない俺たちをあざ笑い來たんだ。

「なにが戦うつもりはねえだ。

どうしてこんなことできるんだ！この人でなしが！」

俺の言葉にも、あいつらは全く気にしない。

むしろ、

「ツハ！人でなしってなあ俺たちにとっては褒め言葉だぜ。

むしろ、そう言われるために來たようなもんだからな」

「戦いにきたわけじゃないって最初から言っているじゃないですか。

私たちは、あなたたちをただ嬲りにきただけですよ」

開き直りやがった！

「デメエら、許さねえ！」

そう言つてカリバーンを構えるが、こいつらは、アリシアすら俺に興味を示さない。

「……で？剣を構えてどうすんだ、お前？」

「お兄ちゃんじゃ、私にも勝てないと思うよ?」

「はっきり言いますと、弱すぎるんですよあなた。

零落白夜、確かに当てられれば一撃必殺の威力の恐ろしい能力です。刃の形をした高密度のAMF。魔法を無効化するその能力は充分に脅威です。

その気になれば、バリアジャケットすら分解しての攻撃ができるんですからね。

しかし、それを扱うあなたの剣の腕は三流以下。チャンバラです。

そんなの全く脅威に値しません」

「お前さ、ひょっとして味方の中で一番ザコいのに気づいてねえのか?

だとしたら、マジでアホだな。自覚しろよ、役立たず」

「燃費も最悪らしいしね」

そう言い、俺を完全に雑魚扱いしている。

ライアなど、俺に背中すら向けていた。

悔しいが、実際こいつらの言うとおりだ。

俺ではこいつらに一矢報いることすら不可能だろう。

俺はまた、何もできない。

「さ、楽しみましたし、そろそろ帰りましょうか。
もう夕食の時間ですし」

「そうだな。帰るか。」

買い出しはアリスだろ？あいつにそんなのできんのか？」

「レメゲトンがいるんですから大丈夫ですよ、きっと。
ちゃんと勝てたアリシアには、初勝利の記念としてハンバーグをつ
くってあげます」

「え、ホント！わーい！！やったー！！」

そう言つて、あいつらは来た時と同じように瞬く間に転送魔法で去
つていった。

くそッ、今回も役に立てなかった。
ライアの言つとおり、俺は役立たずだ！

ユーナはこれに耐えろつて言うのかよ。
はつきり言つて、これは辛すぎる。
そして、握った手に爪が食い込み血が滴った。

「ちくしょおおおおおおおおおおお……！！」

本物（後書き）

ルナたちが考える強さ表

ルナ イデア ライア＝アリス クロノ なのは＝フェイト＝ユー
ナ アリシア＝教授＞＞＞アルフ＞＞＞亮＞＞ユーノ

くらいでしょうか。

亮の評価がwww

祝勝会（前書き）

A・Sは純粋なバトルが多くて大変です。
S t Sは作戦重視で行こう。

祝勝会

ほう、今日の晩飯はハンバーグか……。久々だな。

あ、皆さんこんばんは。現在、食事中のレン＝ベルツです。

あの後、なんとかアリスが買い出しを終えてきたので今日はアリスアの祝勝会をやっています。

いやー、インテリジェントデバイスって本当に頼りになるなあ。

きちんと主人を使って買い出しを終えてきた。口には出さないが。

ちなみに、ハンバーグと言っても使っているのは松坂牛だ。

普通に美味い。さすがはルナ、料理に妥協がない。

「いやー、それにしても今日は頑張りましたね、アリスア。

もう清々しいくらいに凶悪な台詞でした」

「まったくだぜ。あいつ、もう戻ってこねえんじゃねえの？現場に」

「それは心配。楽しみが減る」

「うーん、やりすぎたかなあ」

そう四人が心配しているが、

「たぶん問題ない。なんせ、フェイト＝テストロッサには頼もしい仲間と兄がいる。

そいつらが引き戻してくれるさ」

そう。それが俺があんな嫌がらせじみたことをする理由の一つでも

ある。

誰かが傷ついても他の仲間が助ける。

そして絆が深まる。

そうすれば、また誰かが傷ついても仲間が助けて絆が深まる。
以降はループ。

こうすれば俺たちはあいつらが死ぬまで遊んでいられる。

これを四人に話すと、

「教授、流石です!!」

「その発想はなかったわ」

「天才。流石は長生き。外道が神がかつてる」

「教授すごい!!」

と、たいそう喜んでいた。

歪んでんなー、こいつら。俺がそう育てただけだな。

後日、アイデアからの報告によると、フェイトは俺の予想どおり復活したそうだ。

その際、テストロッサ（兄）が俺たちになんご立腹だったらしく、愚痴に付き合わされたらしい。

アイデアには悪いが、ようやくあいつへの恨みも晴れて気分爽快だ。

そして時間は経ち、そろそろ第三戦が始まると思われる時期だ。

突然だがここで問題。

この戦いで最も捕まる可能性が高いのは誰でしょうか？

正解はヴィータだ。

実際、リーゼ（たぶん）アリアが助けに入らなければ、デバイスバスターでやられていただろう。

距離をとられた騎士なんて、魔導師にしてみればただの的だ。

そして、これを転生者が利用しないという保証はない。

よって護衛をつけることにした。

ギル・グレアムには話をつけてある。最初は渋っていたが。

あいつらは俺たちを利用して闇の書を完成させる。

俺たちはあいつらにシステムをハッキングしてもらい、介入しやすくする。

そして、お互いに情報は漏らさない。

ギブ&テイクだ。いつまで続くかわからんがな。

sideライア

「…来たか」

俺は今、とある無人世界にいる。

あのチビの騎士の後を尾行してきたからだ。

かなり距離をとって追っているから気づかれる心配はない。

目視はもちろん、魔力だって感じないはずだ。

実際、一緒にいるルナでさえあいつを確認できていない。

視えるのは俺くらいだろう。

そして今、管理局の魔導師があいつと接触した。

「何人ですか？」

「二人だ。片方は原作の白いの、もう一人はあのザコ剣士だ」

「では、二手に分かれましょう。

私は転生者さんの方を。あなたは高町さんをお願いします。
殺しちゃ駄目ですよ？」

「わかってらあ」

そう言つてルナは剣士の方へ飛んでいった。

「んじゃ、俺たちもやるかベロボーグ」

「Yes, boss」

そして俺たちもだ。

「まずは一発、長距離砲撃をぶち込む」

「Rapid cannon」

さあ、やるか。どうせすぐに終わるだろうがよ。

「ファイア！」

s i d e o u t

s i d e なのは

こんにちは、高町なのはです。

私は今、闇の書の守護騎士のヴィータちゃんと対峙しています。
一緒に亮君もいます。

この前のフェイトちゃんのことと心配したリンディさんに、これからは戦闘に出る時は二人一組で行動するようにと言われたからです。前に戦った時には、武器を持っている人とは話さないと言っていたので、戦うつもりがないことを証明するために今回は私も亮君もデバイスを待機状態にしたまま来ました。

「ヴィータちゃん、やっぱりお話聞かせてもらうわけにはいかない？
もしかしたらだけど、手伝えることとか、あるかもしれないよ？」

そう話しかけてみますが、

「うるせえ！管理局の人間の言うことなんか、信用できるか！」

お話を聞かせてくれる様子ではありません。

「俺たちは管理局の人間じゃねえ。民間協力者だ」

「そうだよ。だから、お話を聞かせて？」

それでもヴィータちゃんはこっちを睨みつけてくるだけ。

そして、持っているデバイスを握り締めました。

「ヴィータちゃん……」

「やるしかねえか……！」

一触即発の雰囲気になった時でした。

「そのとおりです、鉄槌の騎士さん。彼らと話をする必要はありません」

突然の声。この声は、

「テメエ、ルナ！」

「はい、最近よく会いますね、二人とも」

そう、フェイトちゃんにひどいことをしたルナちゃんでした。

「テメエは、あの時の……」

「あなたは早く行ってください。闇の書、完成させるんでしょう？」

ヴィータちゃんはそう言われてハッとすると、一気に距離を離れていってしまいます。

「行かせねえ！」

それを見た亮君が、デバイスを起動させてヴィータちゃんを追おうとします。

でも、それはルナちゃんに止められてしまいました。

「行かせません。今日は純粹に足止めに徹しさせてもらいます」

「くっ、なのは！頼む！」

「う、うん！」

今回もお話を聞かせてはもらえませんでした。

けど、これ以上の被害を増やすわけにはいきません！

「レイジングハート！」

「Yes, my master.

Buster mode. Drive ignition」

レイジングハートをバスターモードに変え、砲撃の準備を。

「Load cartridge」

そしてカートリッジを二発炸裂させて準備完了！行きます！

「Divine buster. Extension」

「デイベイン・バスター！」

デイベインバスターがヴィータちゃんに伸びていき、直撃するはずでした。

それを赤色の砲撃が逸らすまでは。

「なに!？」

「そんな…」

距離を離れたヴィータちゃんはそのまま転送魔法を発動し、逃げてしまします。

「流石はライア。相変わらず上手いですねえ」

「…ッ、あいつも来てるのか!？」

ルナちゃんの感心した声に、亮君が声を上げます。

「ええ、そして今回は相手役を分担しました。少し遊びましょう？」

そう言ってルナちゃんは転送魔法を発動させ、亮君を連れて行ってしまうました。

【つーわけで、お前の相手は俺だ】

そう念話が聞こえたのと、さっきの砲撃がこちらに撃たれたのは同時でした。

side out

side ライア

直撃。そう、直撃だ。

今のは間違いなく白いのに命中した。

「はあ、やっぱりたいしたことなかったな」

いくら物語の主人公とはいえ、所詮はただの人間。
戦闘目的で造られた俺には届かなかったらしい。

「待つのも退屈だ。ベロボーグ、帰るぞ」

そう言つて転送魔法を発動しようとした瞬間、

桜色の閃光が俺たちに迫つた。

「ッ、ベロボーグ！！防御だ！！」

「Rejection」

しかし、咄嗟に張つた防御魔法は一瞬で破られ、俺はそのまま直撃を食らつた。

「ぐっは！マジ痛え…！」

戦闘は終わったと思い、稀少技能を切っていたせいで、砲撃に気づけなかった。

【いきなり撃ってくるなんて、危ないでしょ！】

いや、お前も撃ち返してるし。

そう言いたいのが、痛みで喋れる状態じゃない。
この馬鹿力が…！

そうしている間に、結構近くまで接近されてしまった。

「あなたがライア君？」

「…そうだ。ついがお前、こんな距離でよく当てられたな」

素直に感心する。

俺のように稀少技能があるわけでもないのに当てるとはな。

だが、

「まあ良いかあ。すぐに終わりだし」

どうでもいい。どうせ、こいつもただのザコだ。

「あなたも、なんでヴィータちゃんたちを助けるの？
ちゃんとした理由があるなら、私たちが力になるから！」

「言うか、バーカ。」

俺に勝てたら教えてやるよ。できればだがよお」

「…約束だよ。私が勝ったら、お話を聞かせてもらっから！」

「っは！上等だ、白いの！」

そして、戦いが始まる。

祝勝会（後書き）

次回、なのはV S ライア！

管理局の白い悪魔 V S 教授の最高傑作（前書き）

バトルです！

苦手なりに頑張ります。

管理局の白い悪魔vs教授の最高傑作

Sideライア

「アクセルシューター！」

「Accel Shooter」

白いのがシューターを出した。その数、16。

「ラピッドシューター！」

「Rapid Shooter」

こっちもシューターを出す。数は10。
六つ足りないが問題ねえ。

「シュート！」「ファイア！」

同時にシューターが放たれる。
だが、

「弾だ！」

「Rapid Bullet」

シューターは全て、直射弾で撃ち落とす！

「ファイア！」

銃口から魔力弾を撃ち出す。
シューターを全て撃ち落とすのと同時に、こっちのシューターが全
発白いのに殺到する。

「Protection」

しかし、それはデバイスのオートガードに防がれる。
そういえば、あれもインテリジェントだったな。
だがよ、隙ありってやつだ。

「Rapid Cannon」

その隙に砲撃の準備をしていた俺は、そのまま魔法を叩き込む。

「Protection Powered」

しかし、またしても防がれた。

「…硬え〜。さっきの長距離砲撃もそれで防いだのかよ。
おまけにあの馬鹿力にでかい魔力。生粋の砲撃型ってわけか」

『強敵ですね。アリス様ほどではありませんが、凄まじい防御力で
す』

ベロボーグの言うとおりだ。

いつかの金髪の時みたいな豆鉄砲じゃ、バリアジャケットに傷すら
付かねえだろう。
ならば、

「大威力でぶっ潰す！異論は？」

『ありません』

そうと決まれば後は行くだけだ。

「Rapid shooter」

今度はさつきと違い、28発と多めだ。

ちなみに、最高で40発までなら同時に操れる。

そうすると砲撃にリソースを割けなくなるが。

これで攪乱しつつ、砲撃をチャージして防御を抜く！

お互いに砲撃型だからか、向こうも同じようにシューターを出す。

考えることは同じってわけか。

白いのも、俺にシューターでの攪乱は通じないと理解したのだろう。これは砲撃戦になる。俺もそうだが、白いのもこんなのは初めてだろう。

なんせ魔力量が多い魔導師にしか砲撃型はなれない。

こんな戦い自体が稀なことだからだ。

「面白え！ファイア！」「シュート！」

戦場に誘導弾が飛び交う。

ただの馬鹿力かと思えば、こいつ、誘導弾の操作も一流だ。次々とお互いの誘導弾が減っていく。

間を縫って白いのに当てようとしても、デバイスが防ぐ。

そうこうしている間に、互いのチャージが完了する。

「Load Cartridge」

そして、

「デイベイン!」「ラピッド!」

カートリッジが炸裂すると同時に、

「バスター!」「カノン!」

砲撃が放たれた。

一撃必殺の攻撃同士がぶつかる。
威力は完全に拮抗していた。

「おいおい、マジか!俺の砲撃と互角かよ!?」

「Load Cartridge」

新しくカートリッジを炸裂させるが、白いのも炸裂させたのか、未だ拮抗したままだ。

「ヤロー、カートリッジ使い切つても!」

『Boss!!』

「ッ!?!」

ベロボーグの呼びかけでようやく気づく。

背後から3発、誘導弾が迫っていた。

「クソが！本命はこっちか！」

咄嗟に身を捻ってかわすが、そのせいで砲撃に押し負ける。
完全にアウトだ。

このまま確実に俺は負ける。

油断して稀少技能を切っていればこのザマだ。

「チッ、最悪だぜ」

俺はそのまま砲撃に飲み込まれ……………

なかった。

「ライア！」

ルナが白いのの砲撃を食らう前に俺を搔つ攫ったからだ。
目標を見失った砲撃は、遠くの地表に当たり、そのまま吹っ飛ばした。

「ルナちゃん！？なんで！亮君は！？」

「その辺で寝ているのでは？」

二人が話しているが、耳に入らない。

俺は今、死ぬほど後悔していた。

油断のせいであんなガキに負けたこと。
稀少技能を切ってしまっていたこと。
相手の実力を完全に見誤っていたこと。

俺は、教授の期待を裏切っちゃった！

「ライア、どうしたんですか？」

「……………おい、白いの。それとデバイス。お前ら、名前は？」

ルナが心配そうにしているが、そんなのはどうでもいい。
俺はこいつに負けた。そのことが頭を占める。

「なのはだよ、高町なのは。この子はレイジングハート」

「…そうか。今回は俺の負けだ。
油断したうえにお前を舐めていた。詫びる、すまねえ」

「え？え？どうしたの、突然！」

「そうですよ、ライア！頭でも打ったんですか！？」

うるせえ、ほっとけ！

「負けたら話をするんだっとな。

捕まるのはできねえ。だから今質問しろ。

答えられるのなら答えてやるよ。三つだけな」

「ちょ、ライアなに言ってるんですか！」

「うるせえ！これはけじめだ！

俺は負けた！こうでもしなきゃ気がすまねえんだよ！」

「…わかりました。ですが、行き過ぎればストップをかけますよ」

「…わりい」

ルナは納得してくれた。

流石はリーダー、話がわかるぜ。

「…じゃあ、あなたたちはどうしてヴィータちゃんを助けるの？」

チラッとルナがこっちを見る。

ある程度伏せれば話しても良いらしい。

「闇の書を完成させるためだ。

完成した時に起こる暴走を利用して、あることをするためにな」

「あること？」

「それは答えられねえな」

「…なら、あのアリシアちゃんは何？」

ルナは振り返らない。

「わかってるんだろ？プロジェクトF、その完成体だ。プレシアⅡテストロッサ以外の研究者がいて、それを完成させていた。」

個人情報盗んだ。それだけだ」

それに白いの…、いや、高町は目を伏せる。

「…じゃあ最後に、どうして大和君を殺したの？そんなことしなきゃいけなかったの？」

言いながらも高町は泣きそうだった。

流石にルナはこっちへ振り返った。目が険しい。

むしろ、余計なことを言ったら殺す、って雰囲気だ。

実際、こいつは教授の害になるようなら俺でも殺すだろう。躊躇いなく。

「…はあ、ノーコメントだ。」

だが、今ントコは誰も殺す予定はねえ」

質問はこれで終わりだ。

ルナが転送魔法を発動させる。

管理局がこっちを見張っているから、いくつかの次元を経由して戻るんだろう。

その前に、

「高町なのは！それとレイジングハート！

俺の名前はライア＝ベルツ！相棒はベロボーグだ！

次に戦う時は油断しねえ！全力でデメエに勝つ！首を洗って待ってる！」

そして、俺の初敗北の戦いは終わった。

管理局の白い悪魔vs教授の最高傑作（後書き）

なんか、少年漫画みたいになってしまいました。
あれ、外道はどこへ？

また反省会（前書き）

久々に反省会です。

また反省会

「で、喋ってきたわけか」

「ああ、本当にすまねえ」

『すみません、教授』

「許可した私にも責任があります。申し訳ありません」

謝ってすむ問題じゃないんだが。

あ、どうも。説教中のレン＝ベルツです。

今回の戦闘でライアがなのはに負けてしまったらしい。

信じがたいが、ベロボーグのログにもそうあったから、本当なんだろう。

「あのな、他のは良いとしても最初の質問には答えるべきじゃなかっただろ？」

これで管理局は暴走した時に俺たちのことを頭の隅に置いてくるぞ。つまり、不意打ちが効かないってことだ。わかるか？」

こいつらは強い。

しかし、主人公たちと守護騎士たち、そして転生者と正面から戦って全員を手加減して倒せるほどじゃない。

勝っても必ず死者を出す。

むしろ、負ける可能性だってある。

「はあ、作戦の練り直しが必要だな」

どうするか。まあ、なんとかなるだろう。

「…教授」

「ああ？なんだライア。

お前が俺をそう呼ぶなんて珍しいな」

普段はアンタとかお前だからな。

「俺はもう誰にも負けねえ。

教授の最高傑作が駄作であることは許されねえからだ。
だから次に俺が負けた時、俺を殺処分にしてくれ」

「ライア！？」

「…本気か？」

「ああ、マジだ」

目が笑ってない。本気のようにだな。

「…良いだろう」

「「「！？」」「」」

他の三人が驚く。

まさか俺がOKを出すとは思わなかったのだろう。

「教授！そこまでしなくても！」

「本気？」

「そつだよ！ライアが処分なんてヤダ！！」

三人が口々にそう言うが、これはライアの意味だ。
誰にも邪魔できない。

俺が却下しても、こいつは自害するだろう。

「その代わり、ベロボーグを寄越せ。
暴走が起こるまでには返す」

そのままデバイスをライアから受け取る。

そうは言っても死なれるのは俺も嫌だからな。

せいぜい魔改造してやろう。

具体的には、次になのはと戦っても負けないうようにな。

side 亮

俺たちは今、作戦本部こと、フェイトの家にいる。

「って感じだったんですけど」

そして驚くことに、なのはがあの転生者に勝つたらしい。
おまけに情報まで引き出してきた。

「なのは、凄いよ！あいつ、兄さんでも勝てなかったのに！」

ちなみに、フェイトは原作とは違い魔力の蒐集はルナの人形にされたいらしい。

これでリーゼの役を二回ともあいつらが代わりにやったことになる。つまり、グラム提督とあいつらは繋がっている可能性が高いということだ。

「フェイト、傷口を抉るな」

「あーご、ごめんなさい！」

「ユーナ、フェイト。今は漫才の時間じゃないんだ。少し静かにしてくれ。」

なのは、彼は本当に闇の書の暴走を狙っていると言ったんだな？」

クロノの言葉で場の空気が引き締まる。

「うん。暴走の時にあることをするためだ、って」

「問題はその『あること』、だな。何が目的だ？」

確かに、目的が見えない。

リインフォースが目的か？

それもどうかと思う。

なのはが聞いたのが本当なら、今回は誰も殺さないつもりらしい。そうなるかと奪うしかない。だが、彼女を奪っても闇の書の暴走が再び起こるだけだ。メリットがない。

「なんにしても、俺たちには警戒しかできることはない。
考えるだけ無駄だろう」

「…確かにそうだな。これは追々考えよう。
それから、話すべきことはもう一つある。エイミィ」

「はいはい！皆、モニターに注目してー！」

モニターを見ると、なのは戦闘の映像が映し出される。

「これがどうかしたの？」

皆の疑問を友美が代弁した。
普通に戦闘の映像だ。

「問題なのは、このライアという魔導師が使っている魔法だ」

ライアの足元が拡大されると、確かに見たことがない形だ。
ミッド式のサークルの中にベルカ式の三角形のようなものがある。

「クロノ、この魔法体系を知ってるの？」

「いや、知らない。それが問題なんだ」

「どういうことだ？」

「それが問題なのかい？別にそれくらい管理局のデータを漁れば良いじゃないか」

「もうやった。しかし、こんな魔法はどれだけ探しても見つからな

かったんだ。

それに、解析してみると意外なことがわかった」

「意外なことだと?」

「そうだ。ユーナ、君は近代ベルカ式を知っているか?」

「ああ、確かベルカ式をミッド式でエミュレートした魔法だったな?」

「…ユーノ君、どういうこと?」

「あはは、簡単に言うと、ミッド式でベルカ式を再現したっていうことだよ。

ベルカ式は使える人が凄く少ないんだ。だから、ミッド式で使いやすく作り直したんだよ」

なるほど、わかりやすい。

今までよく理解できていなかったが、そういうことだったのか。

「けどよ、それがこいつと関係あるのか?

これはその近代ベルカ式じゃねえんだろ?」

「…この魔法は逆なんだ」

「逆ってどういうことだい?」

「この魔法は、ベルカ式を使ってミッド式をエミュレートしているんだ」

「それがどうかしたのかい？」

「アルフ、これは結構まずいことだよ」

ユーノが解説モードに入る。

「魔導師っていうのは、フェイトやユーナみたいなのを除けば、総じて接近戦に弱い。

逆に、騎士は対人戦闘に特化している分、遠距離戦や集団戦に弱いんだ。

ここまでは良い？」

クロノ以外が頷く。

「でも、彼の魔法体系は、これらの弱点を完全に克服している可能性があるんだ。

対人戦闘から集団戦まで、近距離から遠距離までを完全にね」

「つまり、使い手によっては距離や人数に弱点がなくなるといふことだ。

反面、こんな魔法を使えるやつなんて、ベルカ式の使い手より少ないだろう」

その言葉に、全員が戦慄する。当然だ。

あのルナが、剣の腕だけでも勝てないあいつが、遠距離戦もできるだー！？

「あくまで可能性の話だが、皆、充分注意してくれ。
今日はこれで終わりだ」

「皆、お疲れ〜！」

クロノとエイミィさんがしめるが、俺はまだルナの脅威に呆然としまだだった。

side out

また反省会（後書き）

はい、クロノの予想大当たり。

ルナたちに、基本苦手な距離は存在しません。

連携訓練もしているので、集団戦もこなします。

それと、夏期講習が終わったので、更新速度も上がるかも。

裏切り（前書き）

眠い、けど明日は何もないから夜更かししてもOK！

裏切り

メリークリスマス！今日はクリスマスイヴだ！！

あ、どうも。レン＝ベルツです。

今言ったとおり、今日はクリスマスイヴ。

つまり、暴走が起こるということだ。

あれから悩んだが、とうとう今日はアイデアに出張ってもらうことにした。

本当はs t sまで探ってもらったつもりだったが、仕方ない。

さ、始めるか。

今日の目的は防御プログラムを回収すること。

あいつらがコアを露出させた瞬間に横から掠め取る！

今日は本当の意味でのフルメンバーだ。

面倒な転生者も原作キャラも関係ない。必ず勝つぞ。

「いいか、お前ら！今日は今までで最も重要な戦いだ！
失敗は許されないぞ！気を抜くな！」

「了解です！」

「やってやるぜ！」

「了解」

「頑張るね！」

総員、出動！！

sideアイデア

戦闘は終盤に入っていた。

私、佐藤 友美ことアイデア「ベルツは皆がいる海上の近くの海岸に
来ていた。

命令を遂行するために。

【アイデア、そろそろです。準備はできてますか？】

【ええ、万端よ】

そう、私はこれから三年來の付き合いの親友を裏切ろうとしている。
なのははきつと悲しむだろう。

短い付き合いだったがフエイトも…。

はやては怒るだろう。

クロノは…、落ち込むかな？

だが、それでも教授たちを裏切るわけにはいかない。

「ユピテル、セッアップ」

「Standby, ready, setup」

電子音声が響き、ニメートルはある柄に、漆黒の巨大な刃が付いて
いる斧が現れる。

見るからに破壊力を重視したビジュアルだ。それに重い。

さらにバリアジャケットは本物の鎧のような形で、実際かなりの重装甲だ。

飛行魔法を使っても、まともな速度では動けない。
自分には必要なものだが。

「三年のブランクがあるんだけど…。
大丈夫かしら？」

『マスターならば問題ありません』

「…社交辞令でも嬉しいわ」

そしてたった今、なのはたち三人が闇の書の防御プログラムに必殺魔法を撃ちこみコアが露出した。

「本体コア、露出…！捕まえ、た！」

「長距離転送！」

「目標、軌道上！」

ユーノとアルフ、そしてシャルがコアの転送をしようとする。

（皆、ごめんね）

『Lightning Road』

「スパークムーヴ！」

魔法で一瞬で移動した私は、ユピテルでシャルルを吹っ飛ばす。

「がっ！」

作戦開始だ。

「なに！？」「友美ちゃん！？」「友美！？」「どうしてデバイスを！？」

皆が色々言っているが、とりあえず無視。
次の目標は…、

「あなたよ、ユーナ」

『Lightning Road』

周囲から見れば、私は一瞬で消えたように見えるだろう。
当然だ。私は今、秒速200kmで動いているのだから。

そして、そんな速度に人間が反応できるはずがない。

ユーナがなにかしようと思った時には、もう海面に叩きつけられているだろう。

凍っていた海面を叩き割り、ユーナが海中に沈んでいく。

まあ、手加減はしたから死んではない…、と思うわ、たぶん。

【ライア、他のをお願い】

【OK、任せとけ】

そして、ライアの狙撃がユーノを、アルフを、ヴィータを、クロノを撃ち落とした。

「友美ちゃん、どうして！？なんでこんなことを…！」

「あなたたちは、今は邪魔だからよ。」

それに、『佐藤 友美』というのは偽名。私は…、」

変身魔法を解くと、地毛のプラチナブロンドが現れる。

「アイデアⅡベルツよ」

守護騎士とはやて以外が驚愕する。

「ベルツ、だと！？じゃあお前は…」

「そう、私はライアⅡベルツの仲間よ。
今までは潜入していた、ただそれだけ」

「ずっと、私たちを騙していたの？」

フェイトが、信じたくないといった表情で確認をしてくる。

「結果的にはそうなるわね。」

でも、私はあなたたちを、本当の親友だと思っているわ」

「それじゃあ…！」

「でも、今はそうも言ってられないの。
本当にごめんね」

『Lightning Road』

言葉が終わると同時に亮の背後に回りこみ、今度は亮を叩き落とす。

【ルナ、まだなの？】

【もう準備完了です！行けます！アリシアは？】

【大丈夫！全員、近くの海岸に転送しておいたよう！】

これで準備は終わり。後は、

「なのは、フェイト、はやて。それと守護騎士の二人。

ここは危ないから逃げなさい。他の皆は近くの海岸に転送してあるから」

『Lightning Road』

その言葉を最後に、私は一瞬で距離を離し適当なビルに降り、状況を見守った。

そして、

空の上から閃光が走り、防御プログラムの再生しかけの生体部品ごとコアを凍結封印した。

「…相変わらず流石ね、ルナは」

思わず呟く。

【アリス、出番よ】

【わかった】

念話で返事が来ると同時に転送魔法が発動し、防御プログラムは消えていった。

管理局の追跡を逃れるために、いくつかの次元世界を渡ってから方舟に帰還するらしい。

ある意味、今回最も疲れるのはアリスだろう。

【全員、聞こえますか？】

ここからバラバラに移動して、追跡を撒いたら方舟に集合です】

【【【了解】】】】

【…皆、本当にごめんね。さよなら】

そして私は海鳴を去った。

もう二度と戻ることはないだろう。

side out

裏切り（後書き）

ちょっと短いですが、キリが良いので。

取引（前書き）

今日、もう一話くらいは…。

取引

よっしゃああああ！作戦、大・成・功！！
ザマー見ろ！管理局！！

あ、どうも。レン＝ベルツです。
今、作戦の成功を聞いてテンションが振り切れてます。

現在は全員が方舟に帰還している。
もちろんアイデアもだ。

「アイデア、三年間ご苦労だったな。
予定よりかなり早くなったが、とりあえずよく戻った」

「ええ、お久しぶりね、教授。
とりあえず、ただいま」

これではようやく全員集合だ。
アイデアはウチらのナンバー2の実力者だからな。
これからの作戦には心強い。

「それで、これからどうするの？
防御プログラムを奪うのは聞いたけど…」

「そうですね。教授、いかがなさいますか？」

「それはもう決めてある。
帰ってきて早々悪いが、すぐに仕事だ」

「別に良いけどよお。何やんだ？」

「管制人格を夜天の書から切り離す」

「…はあ？」

ライアがそんな反応をするのも無理はない。

これは完全にやらなくても良いことだからな。

「あゝ、教授。何故そのようなことを？」

「管制人格だけが残っても、もう融合騎としての能力は残らない。

それに、力の大部分は防御プログラムが奪った。

残っても、力の弱いプログラム体が残るだけだ。

つまり、管制人格は今後、八神はやての弱点になる」

これは建前だ。

本当はまだ未練が残っているだけなんだろう。

俺は身内に甘いからな。

今後、ヴォルケンリッターは俺の敵になる。

だが、まだ敵じゃない。

あいつらは覚えていないだろうが、最後まで親らしいことをしたいと思った。

それだけだ。

ここにいる全員は、それをわかっているんだろう。

誰も、何も言わない。

そして、ルナが大きなため息を吐いた。

「…わかりました。今後のためならば仕方ありません」

「…だな。いつ行くんだ？」

「…日付が変わる頃だ。準備しておけ」

そう、これで親としては最後の仕事だ。

これが終われば、あいつらは敵だ。容赦はしない。

side 亮

暴走した防御プログラムは奪われたが、全員無事だった。

なのはたちは友美の裏切りでさっきまで泣いていたが、今はもう大丈夫だ。

なんでも、次に会ったらきちんと話をするつもりらしい。

…OHANASHIってやつか。

そして、管制人格ことリインフォースが言うには、いつの間にか防御プログラムは今のところ暴走する様子はないらしい。

でも、あいつの中に残った再生機能が、遠からず復活させてしまうという話だ。

だからはやてには知らせずに、原作どおりひっそりと破壊を行うことになった。

だが、

「アースラの皆さん、聞こえますか？」

それはあいつらの通信から始まった。

「テメエ、ルナ！何の用だ！

防御プログラムはどうした！友美は！」

思わず怒鳴りつける。

「一気に質問しないでくださいよ。」

順に答えますと、防御プログラムは私たちが頂きました。

『佐藤 友美』ことイデアは、もうそちらには戻りません。用は今から話します。これで良いですか？

こっちも面倒なのは嫌いです。

アースラの最高責任者を呼び出してください」

リンディさんに用だと？なんのつもりだ？

「アースラ艦長、リンディ＝ハラオウンです。

あなたは…、確かルナさんだったわね？」

「はい、はじめまして。ルナ＝ベルツと申します。

長くなりそうなので、挨拶も程々にしましょうか」

「それもそうね。

それで、今日はどういった用件で連絡してきたのかしら？」

「用件は簡単です。

そちらの闇の書の管制人格さんとその主、そしてヴォルケンリッターを貸していただきたいのです」

なんだと！？どういっつもりだ！？

「貸す…、ですか。何故そのようなことを？」

「闇の書、また暴走しそうなんでしょう？」

こちらには破壊せずに暴走を止める手段があります」

「「「「「！？」」「」「」」

リインフォースをふくめた全員が驚愕した。

「そんな、まさか…」

「不可能だ！そんなこと、できはしない！」

リインフォースがルナに叫ぶ。

だが本当にできるなら、これは原作ブレイクになるんじゃない。

「何故できないと？」

「夜天の書は、すでに元の形を失っている。

原型がわからないのでは、直しようがない」

「わかりますよ?」

その言葉に、今度こそブリッジが沈黙する。

「…今、なんと言った?」

「ですから、わかりますって。

最初期の設計図から、守護騎士たちのデータ、さらに防御プログラムのデータまで全て」

「…そんな、馬鹿な…!」

本当にそんなことが可能なのか?

だとしたら、リインフォースが死ぬ必要も、はやてが悲しむ必要もなくなる。

「…何故、それを知っている?」

「それを知りたければ、今日の日付が変わる頃に今から指定する場所に来てください。

あなたと主と守護騎士たちを連れてです。

護衛として、二人までの同伴を許可します。身柄の安全は保証しますが。

来たくなければ来なくても構いません。
一時間だけ待ちます。

では皆さん、色好い返事を期待します」

そう言っつてルナは通信を終了した。

その時、

「…発信元、特定しました！」

エイミィさんが逆探知に成功した。

「エイミィ、良くやった！それで、発信元はどこだ！？」

「海鳴の海浜公園だよ！デバイスを通じての通信だったみたい。

でも、この場所、指定された場所なんだ。

これからずっと待ってるつもりなのかな？」

よし、それがわかれば後は行くだけだ。

あいつ、全員で今度こそとっ捕まえてやる！

「ちょっと、待ってくれよ！」

しかし、それはヴィータに止められた。

「ヴィータちゃん、どうしたの？」

「ここであいつらを捕まえたら、もう本当にリインフォースが死ぬ
しかないじゃんかよ！」

頼むから、行かせてくれ！」

「でもヴィータ。それは捕まえてから聞き出せば良いんじゃないかな？」

それに嘘かもしれない」

「でもよお」

確かにヴィータの言うことにも一理ある。捕まっても話さない可能性は充分にある。だが、こんな好機を逃すわけには……！

「……良いでしょう。」

リインフォースさんたちが行くのを許可します」

「艦長！？」

そこに、リンディさんが突然許可を出した。

「リンディさん、何でだよ……！」

全員で行けば流石に捕まえらるって！」

「じゃあ、亮さん。」

あなたは指定場所にいるのがルナさんの人形ではないと保証できますか？」

「……！！」「……」

その言葉に、俺はハツとする。

確かに、これで捕まえてもその可能性は高い。

それで、もしルナの言うことが本当ならリインフォースを見殺しにしたことになる。

「それに、向こうは護衛を付けて良いと言っています。そうね…、クロノ、それからユーノさんの二人に行ってもらいましょう」

「なんです！行くなら俺が！」

そんな危険なところにサポート型のユーノを行かせるなんて！

「亮さん、あなたはすぐに頭に血が上りやすい。今回するのは戦闘ではなく取引です。あなたでは少し不安があります」

クツ、そう言われると反論できない。

「なら、どうしてユーノを！」

「ユーノさんならば、いざという時にクロノを囿にして全員を脱出させることができるでしょう。」

つまり、保険です。これで異論はありませんね？

では皆さん、疲れているところ悪いけど、もう一仕事よ」

こうして、あいづらとの取引が決まった。

s i d e o u t

取引（後書き）

もうA・Sが終わる。

思った以上に早かったなあ。

俺たちの物語はまだまだ続く!! (前書き)

はい、A・S 終了です。

俺たちの物語はまだまだ続く！！

S i d e ル ナ

私とアイデアは今、指定場所の海浜公園にいる。
闇の書、もとい夜天の書一行の迎えのためだ。

ひょっとすると戦闘になる可能性があるため、場所にいるのは人形だが。

本体は近くに隠れている。アイデアもそうだ。

ちなみに、この魔法は常に本体と人形がリンクしているため、リアルタイムで複数の視点を得られる。
五体までしか同時に動かせないが…。

「…来ましたか」

近くで魔力を感じた。おそらく転送魔法だろう。

「アイデア」

「大丈夫、誰もいないわ」

一応周囲を探查し、伏兵がないのを確認する。

そして人形の魔法を解き、指定場所に移動した。

「お待ちしてました。ちゃんと全員いますね？」

護衛には執務官とサポート型の魔導師が来た。

まあ、人選としては妥当なところだろう。

「約束どおり、こちらはこれ以外の人員はいない。

それで、本当に夜天の書の暴走を防ぐ手立てがあるのか？」

さっそく執務官が話を切り出した。

「はい、可能です。

しかし、流石にここではできません。ですので移動します」

「移動？どこにだ？」

「知る必要はないわ。あなたは連れていけないんだから」

『Thunder Flash』

そして、アイデアが目眩ましをして、

「二人とも、失礼します」

一瞬で主と管制人格を連れて転送した。

「クッ、貴様ら……！やはり騙したのか……！」

管制人格ことリインフォースが八神さんを庇うように立った。

「騙すなんて人聞き悪い、ちゃんと約束は守ります」

「そうよ、まだ危害は加えてないし」

そう言うが、彼女は警戒を解こうとしない。
しかし、

「動くな、夜天の書」

それは突然聞こえてきた教授の声で簡単に解かれた。

そして、

「ごめんね」

一瞬で八神さんの背後に回ったアイデアが彼女を気絶させた。

side out

今、目の前には気絶した八神はやてと、製作者権限で機能停止した
管制人格、リインフォースがいる。

「二人ともご苦労だったな」

そして俺はリインフォースの額に手を当て、

「管制プログラム作動、ただし人格は眠ったままでだ」

管制プログラムを起動させた。

『管制プログラム、作動しました。』

おはようございます、マイスターレン』

そう、こいつの製作者たる俺はこんなこともできる。

その気になれば管制人格だって自由にできるが、今はしない。

「俺の研究データを寄越せ。その後、お前の破損を修正する」

『了解しました』

すると、こいつの中にあるデータが黒天の書に送信される。

『データの移動を終了しました』

「よし。もう良い、あとは寝てろ」

『了解しました。機能を停止します』

そのままリインフォースは崩れ落ちるが、倒れる前に抱きとめた。

「ルナ、八神はやてを別室に閉じ込めろ。世話はお前がやれ。
一日は掛かるからな」

「はい、わかりました」

そう言い、ルナははやてを乗ってきた車椅子で連れていった。

「さあ、俺も行くか」

これから夜天の書の修理をすると同時に、こいつの俺に関しての記

憶を消す。

まず覚えてはいないだろうが、念のためだ。

「これでもう思い残すことはないな」

俺はそのまま研究室へ向かった。

s i d e 亮

はやてとリインフォースが連れ去られてから一日経った。
しかし、依然として行方はわからない。

守護騎士たちへの魔力供給はまだ続いているから、生きているのはわかるが…。

「くそッ!!」

思わず壁を殴りつける。

やはりあの時に俺も行けば良かった。

あいつらの言葉なんて、信用できるはずもないのに!それなのに俺は!

「亮、落ち着け」

そこにユーナがやって来た。

「あいつらは原作ブレイクを望んではいない。
つまり、はやては無事だ。絶対に戻ってくる」

「…つまり、それはリインフォースが帰ってこないってことだろうが！」

そう、あいつらが何の目的だ二人を連れ去ったのかは知らねえ。だがこれはおそらく確定だ。

今回は全て原作どおりの犠牲で済んだ。だが、その過程は最悪だ。完全に引っ掻き回された。しかし、

「皆！大変だよ！」

エイミィさんからの通信に驚愕する。だって、

「帰ってきたんだよ、二人が！」

それは予想外の結果だったんだからな。

結果を言うと、二人は無事だった。

はやては無傷だったし、リインフォースの修復もされていた。信じられないことに、あいつらは約束を守ったのだ。

そしてあれからしばらく経ち、現在は五月だ。

俺たちは全員無事に四年生になった。

はやての足も順調に良くなっているし、守護騎士たちも元気だ。勿論、その中にはリインフォースもいる。

そして、俺たちは管理局に入局した。

俺は武装隊に、ユーナは執務官を目指している。

他の皆は原作どおりで、リインフォースははやての補佐に回るよう
だ。

そのリインフォースだが、もう融合騎としての機能はないらしく、
戦闘にはもう加われないようだ。

だから現在、原作どおりははやてがリインフォース？を製作中らしい。

このまま原作どおりに進む可能性はない。

必ずどこかであいつらが介入してくるだろう。

だが、俺は絶対に負けねえ。もっと強くなる！

そして、今度こそなのはたちを守ってみせる！

俺たちの物語はこれからだ！！！！

s i d e o u t

って感じになってると思うんだよね、あいつら。

あ、どうも。無理やりA・Sを終わらせたレン＝ベルツです。
挨拶を忘れたので戻ってきました。

さて、何故こんなにいきなりA・Sが終わったのかというと、作者の技量不足が原因です。

だから断じて俺のせいじゃない。まあメタ発言はよそう。

あれからの話だが、二人には何もせずにちゃんと返した。
リインフォースが残存しているのにリインフォース？がきちんと造られるようにするにはどうしたら良いかなり悩んだが、なんとか
なったな。

正直、もう俺には原作を守る必要はなくなった。
目的のデータは手に入れたし、主人公たちの管理局入りも確認した。
後は彼女たちが死ななければ良いだけだ。

つまり、これからは外道ルート一直線ということだ！！

『俺たちの物語はこれからだ』だあ？それはこっちのセリフだ！バ
ーカ！

もう俺に枷はねえ！これからは好きなように物語を弄ってやる！！

これからは、外道祭りじゃああああああああああ！！！！

だがまあ、とりあえず今考えるべきなのは、最近見つけた新しい転
生者をどう料理するかだな！

俺たちの物語はまだまだ続く!!（後書き）

最近イライラしてます。

もっと悪を！もっと不幸を！もっと外道を！！

前準備（前書き）

そして、新たな転生者が…！

前準備

へえ、とうとう聖王の遺伝子が流出したか…。
何やってんだか、聖王教会は。

あ、皆さんこんにちは。レン＝ベルツです。
主人公たちが管理局入りしてから半月くらい経ちました。

いや、この物語ってここ二、三年が一番激動の期間なんだよ。
二年後にはなのは墜ちるし、戦闘機人事件もあるし。

ああ、そうそう。この前新しく転生者を見つけた。
ミッドの新聞読んで偶然なんだがな。

名前は『ホクト＝ナカジマ』だ。
聞いてわかるだろうが、スバルの兄に当たる。
偶然じゃないだろう。特典を使ったな。

充分注意しなければ…。

「教授、昼食の用意ができました」

「おう、わかった」

まあ、先のことはその時に考えれば良いだろう。
臨機応変が俺のモットーだからな。

そして俺が食堂に行くと、やはり全員が既に食いを始めている。

「だーかーらー、主人が来るのを待てって言ってるだろうがー!」

相変わらずこいつらからは俺への敬意を感じられない。ぶん殴るぞ!

「だから、遅いテメエが悪いんだろうがノロマ」

「私たちにあなたが合わせれば良い」

「ごめんね」。もうお腹ペコペコだったから

「細かいことばかり言っていると禿げるわよ?」

「テメエら...!」

「ですからやめてください!」

こんな感じで、今日もベルツ家は平和です。
とそこへ、

「お、遅れてすみませんー!」

新たなメンバーが現れた。

「あ、リリース。遅かったですね。

まだデータの整理が終わらないんですか?」

「は、はい。り、量が多いので、すみません」

そういえば、最近ウチに新しい家族が加わった。

皆さんは、夜天の書の防御プログラムを覚えておいでだろうか?

あれなんだが、どこかに捨てたらいつか暴走するだろうし、放っておくのも勿体ないので修理して改造した。

幸い融合騎のデータに適応可能だったので、改造して黒天の書に組み込んだ。その結果がこれだ。

姿はまるつきりリインフォース？で、髪は真つ黒だ。

この謝りまくっているのが、あのグロテスクだった防御プログラムなんだが…。

改造しておいてなんだが、未だに納得できない。

「あ、あのう、私、何か付いてますか？」

「え？ああいや、なんでもない」

うーん、やっぱり違和感が。

ちなみに、融合騎なだけあってちゃんとユニゾンできる。

適合率が最も高いのは俺だが、きちんと他のやつともユニゾンできるぞ？

「あ、そうだお前ら。少し耳に入れておきたいことがある。食いながらで良いから聞け」

ここで遠慮なく食い続けるのがこいつらである。

ルナとリリスは食うのを中断したが。お前ら、本当に良いやつらだな…！

「先日、新たな転生者を発見した。

名前は『ホクト』ナカジマ』。陸戦AAA+の地上のエースだ」

そう、こいつは地上本部でのなのはポジションに 있다고 しても良い。

「特典と推測されるものは既にある。

一つ、原作キャラの家族になることだ。これはユーナ「テストロッサでもあったパターンだな。

二つ、魔力量だ」

そう、こいつは先天的にS+なんて馬鹿げた魔力を持っている。

他の転生者もほどほどに魔力はあったが、これはいくらなんでも多すぎだ。

親のクイント「ナカジマだってそんなに魔力は多くなかったはず。まず特典と見て間違いない。

「そして、こいつは二年後の戦闘機人事件を回避しようとする可能性がある。

なんせ母親が死ぬ事件だからな。可能性は高い。

これはなんとしても阻止する」

「はいはい！しつもん！」

アリシアが挙手する。

「どうして阻止するの？」

もう原作ブレイクとかってどうでも良いんでしょ？」

「確かにそうだ。

しかし、俺たちはstsで原作キャラや転生者と決着をつけようと思っっている。

その最低限の下地は必要なのさ」

つまり、お互いの人数が増えるのは構わないが、減るのは困るということである。

ここでゼスト隊が壊滅しないと、ルーテシアたちがスカリエッティ軍勢に加わらないし。

「じゃあ、そのスカリエッティっていうのと接触しておけば良いんじゃない？」

今後のことを考えるとそうした方がやりやすいと思うけど。パワーバランスも調整しやすいし」

イデアの言うことも一理ある。
事件の前に何度か接触しておこう。

「これで出てきた転生者は四人。そろそろ転生者も打ち止めだ。出てきてもあと一人つてとこだろう」

これで対策するべきことはかなり少なくなる。
今後はかなり楽ができそうだ。

さて、近いうちにスカリエッティと接触しないと。
どうやって探そうか…。

前準備（後書き）

次回、ス力さん登場！…たぶん。

ミッションポッシブル!! (前書き)

スカさんは次回で。

ミッションポッシブル！！

大丈夫かなあ。心配だなあ。

あ、皆さんこんにちは。レン＝ベルツです。

何故、俺がこんなにハラハラしているのかを説明するには昨日のことを話さなければならぬ。

昨日、どうやってスカリエッティを探すか悩んでいた時のことだ。アリシアが珍しく、本当に珍しく作戦を提案してきたのだ。

「え、作戦？何の？」

「だから、そのスカなんとかって博士に会う作戦だよ！」

「スカリエッティな。」

「で？どんな作戦だ？期待はしてないが一応聞いておく」

どうせ碌でもないものだろう。

そう思っていたのだが…。

「え」とね、直接その人に会うんじゃないくて、管理局の最高評議会に居場所を聞くか取り次いでもらえば良いんじゃないかな。って。その人って最高評議会と繋がってるんでしょ？」

「……………」

「え、えっと…。ダメかな？」

そ、その手があったか――！！！！！！！！！！

「アリシア！お前は天才だ！！」

俺は思わず叫んでいた。

そうじゃん、あいつらに聞けば良いじゃん。
なんで思いつかなかったんだ、俺は。

「よし、その作戦採用！

ただ、問題はどやって最高評議会と接触するかだな」

居場所はいたいわかる。

地上本部の構造を調べるのくらい朝飯前だ。

「よし、ルナとライアに行ってきたもら「異議あり！！」……なんだ？」

「作戦を考えたのは私なんだよ！当・然、私も行く！！」

「あのなあ、まだはつきりとしなが敵の本拠地、管理局の地上本部に潜入することになるんだぞ？」

「だからこそだよ！私の本領は攪乱と潜入と拷問なんだから！こんな時くらいは役に立ちたいもん！」

…確かに、こいつの能力はそういうことに向いているが。

「…わかった。だがルナとリリスも一緒に連れて行け。それが条件だ。万が一見つかったら、お前一人じゃ逃げられないだろうからな」

っていう感じで潜入を許可したんだが…。

大丈夫だろうか。ルナたちとはともかく、アリシアが心配だ。

いらんことをしなければ良いんだが…。

s i d e ルナ

私とアリシアは今、時空管理局地上本部の通路を歩いています。

堂々と。変装もせずに。

「あ、こんにちは」

「む、ご苦労」

アリシアが局員の人に元気に挨拶をする。

それなのに相手は普通に返事をした。それどころか、周囲の人も何もおかしいと感じないらしい。

「はあ、凄いですね。」

これがアリシアの本気ってやつですか。」

「す、凄すぎです……」

そう、これはアリシアの魔法のおかげだ。

教授がアリシアを蘇生させる際に、魔法の適正を弄った結果こうなっただけ。

アリシアは幻術の超特化型だ。

シルエットや姿を消すのは勿論、こうやって周囲の意識にまで干渉できるらしい。

その気になれば、他人の五感の完全支配などもできるという。

フェイトさんとの戦闘で、彼女を気絶するまで言葉責めにできたのもこれのおかげだ。

ぶっちゃけ、今回私はいなかったのでは？

『マスター、そろそろ例の極秘ルートに入ります』

「え、もう？意外と潜入って簡単だね、ロキ」

『まったくですね』

「……いえ、普通はこんなに簡単じゃないんですけど」

そんなことを言っていると、見た目は普通のエレベーターに着いた。

中に入っても、特に変わったところはない。
あくまで、見た目は、だが。

「リリース」

「は、はい。えっと、システムに侵入します」

そう言っただけで操作パネルにリリースが手を当てると、エレベーターが勝手に動き出す。

途中で階の表示が最上階から動かなくなった。それなのにエレベーターは上がり続ける。

「なんか、悪の秘密結社のアジトみたいだね！」

「悪の秘密結社ですか。言いえて妙ですね」

「あ、あの、もうすぐ到着します」

そして扉が開くとそこには広い空間があり、中央には三つ培養器の中に脳が浮かんでいる。
教授の言ったとおりだ。

今は点検をしているのか一人の女性もいるが、アリシアの前では関係ない。

「あの、今日の点検は私たちの担当なのでお帰りくださって結構ですよ？」

「あら、そうだったかしら？
ごめんなさいね、勘違いしていたわ」

そう言うと、女性はそのままエレベーターに乗って去っていった。
この魔法は有効範囲から出ないかぎり続く。

今は地上本部全域を覆うレベルで使っているため、地上本部から出ないかぎり私たちには気づけない。

これほど広いと魔力の消耗はかなり激しいらしいが…。

「ルナ、魔法を解くよ」

「了解です」

そしてアリシアが魔法を解いた。

「な、何だ！？お前たちは！」

「どこから入ってきた！？」

すると最高評議会が騒ぎ出すが、無視してエレベーターの扉を氷づけにする。

これで救援は来れない。

「し、システムを完全に掌握しましたあ」

リリスも終わったようだ。これでゆっくり話ができる。

すると、アリシアがデバイスを展開し培養器に突きつけた。

「あなたたちが管理局で一番偉い人たち？」

「…そうだ。その私たちに何の用だ」

話すしかないと思ったのだろう。
僅かに沈黙してから一人が答える。

「簡単なことだよ。

ス力…、なんたらかんたらっていう博士と連絡を取りたいんだ。
連絡方法を教えて」

「…やつにいったい何の用だ」

「うゝん、そうだなゝ」

アリシアが意地悪く笑う。

何をする気かと思っていると…、

「彼をあなたたちから解放して、一緒に管理局を滅ぼそうと思って
いるんだゝ」

「な、なんだと!?!」「馬鹿な!?!」「管理局を滅ぼすだと!?!」

アリシアが遊びだした。

「そんなに变かな?

私たちと彼がいれば、簡単にできると思うよゝ。

それで、その後は世界征服でもしようかな」

傍から見るとただの頭のイタい子だが、ジェイル「スカリエッティ
も加わるとなると話は違ってくる。本当に実現しかねない。
それは作り出した当人たちが一番よくわかっているだろう。

「だからね、彼に連絡したいの。

あなたたちならできるでしょ？早く連絡方法教えてよ」

本当はリリスがシステムを掌握した時点で勝手にできる。
しかし、アリシアは本人たちに管理局崩壊に手伝えと言っただ。

「そんなことができるか！」

「ふん、そうなんだ」

そう言っアアリシアが培養器の一つに触れると、

「グ、ギャガアアアアアア！」

議員の一人の絶叫が響き渡った。

「うん？どうかしたの？」

脳みそしかないのに痛い場所でもあるの？」

アリシアがわざとらしく話しかける。

おそらく、幻術で痛覚を刺激しているのだろう。

今、彼は個人が体感できる限界の痛みを感じているはずだ。

「貴様……！」

「え、なに？あなたもどこか痛いのか？」

そしてもう一つの培養器にも触れる。

絶叫のBGMが増えた。

「それでどうするの？教えるの？教えないの？

答えによつてはあなたもどこか痛くなるかもしれないよ？」

議員は黙ったままだ。

おそらく葛藤しているのだろう。

しかし、

「あつ、大丈夫！心配しないで！」

どんなに痛くても、絶対に死ねないから！」

それで議員の心は折れたようだ。

大人しく通信データを開いた。

すると、絶叫が止まる。

アリシアが満足げにしているのが印象的だった。

ミッションポッシブル!!（後書き）

外道アリシアが外道能力を手に入れました。

言ったでしょう？外道ルートだつて。

マッドが二人（前書き）

スカさん、登場！！

怖くもない。

クアットロはサイバー戦から手が離せない。結果は火を見るより明らかだ。

そして、予定よりも数時間早く制圧は完了した。

その後、通信越しだがスカリエツティと直接話し、現在に至ると。

それにしても、

「いや、お前マジでスゲーよ。

機械との融合を人間側を改造して実現するとか、天才すぎだろ」

「いやいや、君の方も充分凄さ。

あれほど強力な人造魔導師をこれほどまで安定して生み出せるとはね。

恐れ入ったよ」

あれから俺たちは研究談義で意気投合し、今じゃソウルメイトだ。

昨日の今日出会ったとはいえ、研究者魂が共鳴した。

こいつとは良い関係を築けそうだぜ！

「それで、何故君たちは私に接触してきたんだい？」

おっ、早速本題に入ったか。

俺としてはもう少し討論をしていたかったんだが。

「ああ、最近よく戦闘機人のことを良く聞くからな。

どんなやつがあんなのの技術を確立したのか、気になってな」

「それでかい？

そもそも、どうやって私の居場所を？」

「簡単だ。管理局の最高評議会に聞いた。痛みに訴えたら、泣く泣く答えてくれたぞ？無償で」

「…君は私以上に非常識な存在だね」

失敬な。あながち間違いじゃないが…。

「まあ、それはどうでもいい。

今日の本当の目的は同盟だ。お互いに害になることは極力しない。そして、互いの危機には救援を、というものをな」

「私は構わないが、それは君にメリットがあるのかい？君ならば、降りかかる火の粉くらい簡単に払えるだろう？」

そうなるよな。

しかし、俺にもメリットはある。

「俺の今後の計画に、協力してほしい」

「計画？」

「そつだ。それは…、

世界征服だッッ！！！！」

いや、これはマジだ。

この前アリシアが言っていたが、s t s が終わったら俺にはやることがない。

だから、いつそのこと本当にやろうというわけだ。

拳を掲げて宣言する俺を見て、スカリエッティは呆然としていたが、

「ククク、世界征服か。」

私たちだけで、本当にそれができるんでも？」

そう言いつつも乗ってきた。

「当たり前だ。

すでに最高評議会はないも同然。

なんせ、俺たちの危険性を理解しただらうからな。

もう俺たちに逆らうことはできないだろ？」

それにだ、『無限の欲望』スカリエッティと、『最古の研究者』ベルツの二人がいれば敵なんかいらない。

そうだろ？」

それで、お前はどつするんだ？

拒否するなら、相互不干渉でこの話は終わりだ」

「君も人が悪いね。

こんな面白そうなこと、やらないはずがないだろう！
是非、協力させてもらおう」

そして、俺たちは固く握手をした。

「それじゃ、これからよろしく。ドクター」

「こちらこそ、よろしく頼むよ。教授」

ここに、最凶のマッドコンビが誕生した。

マッドが二人（後書き）

次回、新たな転生者が！？

嘘じゃない(前書き)

新たな転生者が!!

嘘じゃない

この前、はやてがとうとうリインフォース？を完成させたらしい。
お疲れ様です。

あ、皆さんこんにちは。レン＝ベルツです。

あれから一年、そろそろ戦闘機人事件やなのは撃墜が起こる。

というか、最近ゼスト隊が活発に動いている。そして、ホクト＝ナ
カジマもその部隊に所属している。

おそらく、突入してからすぐに撤退するという手段で回避しようとするだろう。

ゼスト＝グランガイツはレジアス＝ゲイズに担当を替えられる寸前
だったからな。

つまり、最後のあがきになる。中止になどするはずがない。

河内とテストロッサ（兄）が介入してくる可能性もあったが、なのは
のことで手一杯のようだ。
介入の気配はない。

とそこへ、

『やあ、教授。少し良いかい？』

ジェイルが連絡を寄越してきた。

このように連絡してくることはよくあるが、このタイミングということ
は、

「どうした、ドクター。何か用か？」

『いや、少し頼まれてくれないかい。』

「どうやら今夜、管理局の捜査がここに入るらしいんだ」

「やっぱりか。」

「それで？俺たちにそれを返り討ちにしろってことか？」

『いや、それは娘たちがやるよ。』

「ついでに、スポンサーに娘たちのお披露目をしようと思っているからね」

「最高評議会へのか？わざわざそんなことしなくても良いんじゃないの？」

『いや、予算は彼らが出してくれるからね。』

「時々だが、成果を提出しなければならないのさ」

「大変なんだな、こいつも…。」

『だから君たちは万が一生き残った局員がいれば始末してもらいたいんだ。』

「ただ、ひよつとするとレリックウェポンの素材に使える人材がいるかもしれない。」

「一応、捕縛の準備もしておいてほしい」

「なるほど、了解」

「ホクト」ナカジマは生き残るだろう。おそらく仲間を連れて。

そついうやつを転生させたんだからな。

ならば面白いことができるだろうな。

sideホクト

俺はホクトⅡナカジマ、転生者だ。

今、俺は戦闘機人の生産プラントにいる。

既に戦闘は始まっているが、高濃度のAMFの影響でほとんど魔法が使えない。

それに隊長とも合流できていない。

（これじゃあ、撤退できない！）

こうなったら決死の覚悟で壁ごとぶち抜くしかないだろう。

「母さん、メガーヌさん！」

俺が壁に穴を開けて退路を作るから、そこから皆で撤退を！」

そして、カートリッジを全発使い、

「うおおお、リボルバーストライク！！」

壁を全力で殴りつける。

するとなんとか外に通じる道ができた。

「総員、脱出よ！」

母さんの一声で、隊員たちが脱出していく。

【隊長、聞こえませんか！隊長！！】

最後に念話で呼びかけるが、返事はない。
既にチンクにやられたのだろう。

「何してるの！撤退よ！」

「わかってる…！でも！」

「隊長ならきつと大丈夫よ…！ほら、行くわよ！」

母さんが気休めを言うてくるが、わかって言っているのだろう。
もう隊長が敵の手にかかっていると。

「隊長、すみません！」

そう言っただけで俺たちは脱出した。

しばらく移動し追っ手がいないことを確認する。
半数以上の隊員がやられた。

くそっ！これじゃあ、なんのためにゼスト隊に入っただのかわからない！

助けられたのに！俺がしっかりしていれば！

「ホクト君、局との連絡がついたわ。」

もうすぐ応援が来るから、すぐに隊長の救援にもいける。
だからそんなに落ち込まないで…」

「…はい、すみません。もう大丈夫です」

メガー又さんのおかげで目が覚める。

そうだ、ここで落ち込んでいてもしかたない。
せめてスカリエッティだけでも…！

その時だった。

「そう。なら第二ラウンドを始める」

あいつがやってきたのは。

「なに、あなたは！？」

「ドクターの頼みで来た追っ手。

秘密を見られたからには、生きて帰すわけには、ってやつ。
だから、帰りは死体で、帰る場所は棺桶になる」

なんなんだ、こいつは…。

こんなやつ俺は知らない…。

すると、やつはこっちに振り向いた。

【転生者はあなただけじゃない、ということ】

背筋が凍りついた。こいつも転生者！？

「じゃあ、死んで」

その言葉で全員が臨戦態勢になった。

そしてそいつは、魔法の詠唱を始めた。
俺たちの目の前で、だ。

「舐めているのか！隙だらけだ！」

隊員の一人が襲いかかるがそれは防がれる。

黒い聖王の鎧で。

「フィールド防御！？あんな強力な！？」

母さんたちは防御の硬さに驚いているが、俺はその能力に驚いていた。

こいつ、こんな特典を…！

目の前で堂々と詠唱を始めたのはそれだけ防御魔法に自信があるからだろう。

詠唱が終わった。

「じゃあね。」

…メモント「モリ」

視界が漆黒に染まり、俺の意識は消し飛ばされた。

s i d e o u t

s i d e アリス

「この程度、相手にもならない」

ドクターが言うには、この中のどれかが研究の素材に使えるらしい。
だから全員生け捕りにしたが、正直どうでもいい。

「アリス様、ご苦労様です」

すると、ドクターの戦闘機人がやってきた。
三番だったかな？

「…必要なだけ連れて行って。残りは使う」

「了解しました」

そう言うのと、そのまま一人の局員を担いで夜の闇に消えていった。

それはそうと、最近私は全然遊んでいない。

だからこの転生者を使って遊ぼうと思う。教授の許可もある。

「起きて」

転生者の頭を蹴り飛ばす。

その声で周囲の局員も起きだした。

「ガッ！く、ここは…」

「ようやく起きた。

これから楽しいゲームの時間。あまり待たせないで」

「ゲームだと？なんのつもりだ！」

うるさいから無視する。

「ルール説明。

今から私はここにいる全員を一人ずつ殺す」

その言葉に全員が戦慄した。

「全員を殺し終わる前に私を止められればあなたの勝ち。

あなた以外が全員死ねばあなたの負け。

安心して、ゲームが終わってもあなたは殺さないから」

「ふざけるな！そんなこ「まず一人」…な！？」

転生者がなにか言ったけど、もうゲームは始まっている。

まず一人が死んだ。体の半分が消し飛んだからだ。

残りは12人。

「この野郎！」

そう言っオートて殴りかかってくるが、自動で聖王の鎧が発動する。

そして二人目が死んだ。返り血すら聖王の鎧が弾く。

「皆、逃げろ！俺が時間を稼ぐ！」

転生者がそう言々と数人の局員が逃げ出した。残りは戦う気らしい。
でも、

「レメゲトン、探して」

『Yes, my lord』

逃げた連中は全員私の探査魔法で居場所はわかる。

だから、

【一番遠いやつから殺す】

そう念話で新ルールを知らせる。

「お前え!!」

転生者たちが攻撃してくるが、全て通じない。

「飛びたて 毒の竜」

詠唱完了。

「ニーズヘッグ」

局員を遠い順に地面ごと決る。

一人、また一人と殺しているうちに、もうこの場にしか的が残っていないのに気づく。

「もう残りはあなたたちだけ、残り四人」

ずっと攻撃してきたからか全員の息が荒い。

「お前は、こんなことをして、何も、感じないのか!」

荒い息のまま転生者が怒鳴ってくる。

「私だって感じるくらいいる」

「だったら!!」

「的が減るからまた調達しないと。だから面倒くさい」

その言葉を言うと同時にまた一人の胴体が吹き飛ぶ。
残り三人。

「そういえば、その女。あなたの母親？」

「！？母さんに手は出させない！」

転生者の攻撃が一層激しくなる。

手数が増えただけで威力は大して変わらないが。

「そう、じゃあ他のはどうでもいいんだ」

三人のうちの二人も消し飛ばす。

「最後はあなた」

そして残るは一人になった。

しかし、転生者が女の前に立ちはだかる。

「やめろ！…頼む。」

俺はどうなっても良い！だから母さんだけは…！」

「ホクト、やめなさい。」

そこのあなた、この子は殺さないって言うてたわね。
それは本当？」

「本当」

「なら殺しなさい」

「母さん！？」

転生者が驚愕する。私自信も驚いた。

「何を考えているの？」

「私の命でこの子が助かるなら安いものよ。」

その代わり、この子に手を出すのは許さない」

「母さん！！なに言ってるんだ！

大丈夫さ！もうすぐ応援が来る！それまで時間を稼げば！」

そういえばそうだった。

遊ぶのもほどにしなれば。

「…興が冷めた。もう帰る」

そう言っ、私は二人に背を向けた。

もう攻撃をする気はない。後は帰るだけだ。

「見逃して、くれるの？」

「そんなわけない。いつか殺す。

応援が来るのは困るからさっさと帰るだけ」

「…そう」

そう言っ、私が飛び立つのと、

女の腹に大穴が開くのは同時だった。

後ろで転生者の絶叫が聞こえる。
嘘は言っていない。

あの攻撃は母親かどうか確認した時にしたものだ。
それに、

【今じゃない。きちんと十秒後にした】

そう念話で伝えて、私はそこをあとにした。

嘘じゃない（後書き）

アリスの外道が炸裂！

アリスの防御力はメンバー最硬です。

人物設定 空白期（前書き）

人物設定です。

この時期は年齢がどんどん変わるので、あえて載せません。

人物設定 空白期

教授サイド

レン＝ベルツ

性別 男

年齢 プログラム体のため歳をとらない。

一応、二十代中盤くらいに設定している。
その気になれば変更可。

特典 技術チート

魔力をそこそこ

古代ベルカに転生

他の転生者を呼ぶ

魔力 A A A

魔力光 黒

魔導師ランク 総合 A A A +

デバイス 魔導書型デバイス『黒天の書』

稀少技能 なし

容姿 伸ばした金髪を後ろで結んで下ろしていて眼鏡をかけている。
常に白衣を着ている（科学者っぽいから）

擬人化クルル？

紹介 古代ベルカに転生した元高校生の日本人。

第二の人生を楽しむために、あえて主人公たちと敵対することを選ぶ。

インドア派のモヤシに思われがちだが、激動の戦乱時代を生きぬいてきたため

意外と強い。

デバイスに自分の全データがあるため、リンカーコアを破

壊されるか『黒天の

書』を破壊されないかぎり死なない。
普段は『教授』と呼ばれている。

ルナ＝ベルツ

性別 男

魔力 SSランク

魔力光 白

魔導師ランク 空戦SS 陸戦S+

デバイス 剣型デバイス『アルテミス』

稀少技能 魔力変換資質『氷結』

容姿 透けるような白い肌に深い青色の瞳、腰まで伸びた銀髪。

白い服を好む。

紹介 主人公の秘書兼助手兼方舟の最終兵器。

主人公が対転生者に生み出した人造魔導師の一号機。

本来は二号機以降を製作する時の助手にしようと、実験目的で造られた。

しかし、想像以上の強さと容姿になったため仕事を兼任することに…。

主人公を敬愛している。

アリス＝ベルツ

性別 女

魔力 SSランク

魔力光 黒

魔導師ランク 総合SS

デバイス 魔導書型デバイス『レメゲトン』

稀少技能 聖王の鎧

容姿 肩まで伸ばした黒髪と紅い瞳。いつも眠そう。

ゴスロリが基本的な服装。

紹介 対転生者用の人造魔導師の二号機。

三号機の『ライア』と同時進行で造られたうえ同じ遺伝子から造られたため、『ラ

イア』とは双子。

普段は寝てすごしている。

わかりにくいが、主人公の外道のことだけは尊敬している。

ライアⅡベルツ

性別 男

魔力 S -

魔力光 赤

魔導師ランク 空戦SS 陸戦S -

デバイス 銃型デバイス『ペロボーグ』

稀少技能 ???

容姿 黒髪に金色のツリ目。

瞳の色以外は『アリア』と同じ。

実は主人公の服装をリスペクトしている。

紹介 対転生者用の人造魔導師の三号機。

『アリス』とは双子。

言葉にはしないが、『ルナ』と同じくらい主人公をしたっている。

ツンツンツンツンツンデレくらいツンの要素が強い！

イデアⅡベルツ

性別 女

魔力 S +

魔力光 銀

魔導師ランク 空戦SS

デバイス 斧型デバイス『ユピテル』

稀少技能 ???

容姿 腰まで伸ばした黒髪をポニーテールにしている。

瞳は紫色。

これは潜入用の変装で、地毛はプラチナブロンド。

紹介 対転生者用の人造魔導師の四号機。

現在は海鳴に潜入中。

転生者『佐藤 友美』として転生者たちを見張る。

しかし、闇の書の暴走を機に転生者たちを裏切る。

アリシアⅡテストロッサ

性別 女

魔力 S

魔力光 金

魔導師ランク S +

デバイス 鎌型デバイス『ロキ』

稀少技能 幻術の超特化

容姿 昔のまま

紹介 対転生者用の人造魔導師の五号機。

教授の技術によって蘇生した。

戦闘技術はすでに脳にインストールされている。

リリス

性別 女

魔力 SSS（測定不能）

魔力光 黒

魔導師ランク AA+

容姿 黒髪のリインフォース？

目の色は紺色。

紹介 夜天の書の防御プログラム。

教授が改造したため、現在は融合騎。

一応、メンバー全員と融合可能。

かなり気が弱い。

キャロルルルシエ

性別 女

魔力 SSS

魔力光 桃色

魔導師ランク 総合S

容姿 原作と同じ

紹介 ライアが拾ってきた。

教授たちの魔改造により前衛、後衛の両方ができる万能型に…。

レリックウェポンだがレリックがリンカーコアと完全に融合している。

もう竜の制御は完璧。実はフリードも成長している。

気配に敏感で背後に立たれると第六感並に超反応する。

転生者サイド

河内 亮

性別 男

魔力 A A A +

魔力光 白

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 剣型デバイス『カリバーン』

稀少技能 零落白夜

要は剣の形の A M F。

しかし密度と濃度が段違いなため、普通の魔法では勝てない。

燃費が超悪い。

容姿 某ライトノベルの『織○一夏』

紹介 転生者その一。

大和の仇を討とうと、自分から原作ブレイクをして教授たちを誘い出そうと考え

ていた。しかしユーナに諭され思いとどまる。

木島 大和

性別 男

魔力 A A A -

魔力光 緑

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 剣型デバイス『グラム』

稀少技能 S E E D

結局、一度も使われずに終わったレアスキル。
空間把握と反応速度が凄まじくなる。

容姿 某アニメの『キ〇〇ヤマト』

紹介 転生者その二。

原作ブレイク賛成派だった。

別に疚しい理由ではなく、なのはたちをもっと幸せにした
いという正義感から。

ルナの自爆に巻き込まれ死亡。

ユーナニテストロッサ

性別 男

魔力 A A A

魔力光 黄

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 斧槍型デバイス『グラディウス』

稀少技能 加速

音の三倍近くまで速く加速できる。

しかし、その速度は自分で反応できないうえに、細
かい調節ができない。

おまけに急停止と急加速は反動が強すぎて、バリア
ジャケットがないと自分

にダメージがくるというポンコツ具合。

一回一回の移動でバリアジャケットにダメージが行
くため、再生されるまで

は加速できない。

容姿 髪を肩までしか伸ばしていないフェイト

紹介 転生者その三。

現在、フェイトとともに保護観察中。
私立聖翔大付属小学校に転入。

ホクトⅡナカジマ

性別 性別

魔力 S+

魔力光 薄い青

魔導師ランク 陸戦A A A +

デバイス ギアナツクル

稀少技能 なし

容姿 スバルの男版。

髪の色はギンガより少し薄い。

紹介 転生者その四。

戦闘機人ではなく、クイントⅡナカジマの実子。

地上のエース。

ゼスト隊に所属していた。

人物設定 空白期（後書き）

随時更新します。

俺たちでやっちまおうぜ！（前書き）

今回は誰が活躍するのでしょうか？

俺たちでやっちまおうぜ！

アリス、お前そんなにストレス溜まってたのか…。

あ、どうも。レン＝ベルツです。

昨日の戦闘データを見て、正直肝が冷えました。
戦闘というより虐殺だったけど…。

そういえば、そろそろなのは撃墜事件が起こる頃だ。
しかし転生者どものせいでそれは回避される可能性が高い。
だから、

いつそのこと、俺たちでやっちまおうぜ！！

って話に昨日なった。

それで不参加を表明したアイデアとリリースを除いた皆でジャンケン大会になったのだが、その結果はというと、

「それでは、行ってきますね」

ルナが行くことになった。

「チツ、おーおー行ってこい」

「しくじったら殺す」

「うーん、私も行きたかったな」

負け組はかなり残念そうだ。
つていうか、アリスはこの前遊んだらうが。

「ま、気をつけて行ってこい」

「はい、ちゃっちゃんと終わらせてきます」

そう言つてルナは出かけていった。
そのまま皆でモニターを見る。これから起こることを見物するためだ。

これはジェイルたちにも中継する。

さあ、皆で楽しもうか！！

s i d e ルナ

私は今、無人世界で高町さんたちを待ち伏せしている。
教授が調べたところ、事件が起こるのは今日この世界である可能性

が高いらしい。

幸いにも周囲には雪が積もっていて、現在も降り続けている。これは私にとってはかなり有利なことだ。見つかりにくいという意味でも、戦闘の意味でも。

『マスター、どうやら戦闘が始まったようです』

アルテミスの声で気を引き締める。
行きましようか。

「アルテミス、弓を」

『Bow form』

鞘と柄を合わせると、アルテミスの形態が弓になる。ぶつちやけ、アルテミスはレヴァンティンの強化版だ。製作者が同じなため、システムや変形の癖は結構似ていたりする。

変形を終えると、私は矢を番えた。

どうやら、戦闘は終わって帰還するようだ。

やはり介入しなければ事件は起こらなかったらしい。しかし、

「残念でした。私が起こします」

そのまま矢に魔力を込める。

「羽ばたけ、梟！」

『Silent Owl』

そして発射。

この魔法は、烈火の将のシュルムファルケンの強化版だ。なんと、魔力反応と発射音を完全に隠蔽して発射できる便利な魔法なのだ。

目で見なければ絶対に避けられない。

そして、高町さんたちは戦闘が終了して油断している。

当然、高町さんは避けられるはずもなく胸元を貫通し、そのままそこが凍りついた。
ただし、今のは非殺傷設定なため傷はない。
これからが仕上げだ。

「爆・散♪」

『Ice Detonation』

胸元の氷がそのまま爆発した。

今度は殺傷設定だ。

勿論、ちゃんと手加減はした。死なないギリギリって意味で。

しかし、サイレントオウルで居場所を特定したのだろう。

河内さんがこちらにかつとんできた。

そして、私を見つけるなり斬りかかってくる。

私はアルテミスの形態を剣に戻し受ける。

「お前は！なのはまで！許さねえ！」

「いきなりご挨拶ですね。二年ぶりなんですからもっとゆっくり話しましょうよ」

かなり怒っているようだ。

「それにしても、鉄槌の騎士さんはどうしたんですか？
あなたよりもあの人と戦いたかったんですけど」

「テムエの相手は俺だ！
二年前と同じだと思っなよ！」

どうやら鉄槌の騎士は高町さんの方についているらしい。
残念だ。

それにしても、

「なるほど…。確かにもうチャンバラではありませんね」

そう、確かに技術は向上している。

戦い方から見るに、烈火の将に剣を習ったのだろう。
動きが洗練されている。

しかし、

「それでも二流ですね。一流には程遠いです」

そう言ってデバイスを弾き飛ばす。
そしてそのまま追撃。

「氷華一閃」

咄嗟に彼は防御魔法を発動したが無駄だ。

障壁に刀身が接した途端に障壁が凍りつき、そのまま氷になった。

「なに!？」

河内さんが驚愕の声を上げるがもう遅い。

氷になった障壁を力尽くで砕き、そのまま斬り裂く。
悲鳴を上げながら河内さんが吹っ飛んだ。

「やっぱり弱いですね。」

二年前から成長はしていても、これじゃあ意味ないですよ。
せめて私と打ち合えるくらいにはなってください」

河内さんは立ち上がれないのか、うつ伏せのままこちらを睨みつけてくる。

私は彼の頭をそのまま踏みつけた。

「ぐっ！」

「睨んだってあなたが弱いのは変わりませんよ。というか、目障りですね。」

そのままグリグリと踏み続ける。

下が雪だから冷たそうですね。

「ザ〜コ〜ザ〜コ〜役立たず〜
これじゃあだ〜れも守れませ〜ん〜」

即興で歌を作ったが、意外と上手いと思う。

とそこに、

「テメエー！よくも亮を！」

ようやく鉄槌の騎士が来たようだ。
増援なのか、数人の魔導師も一緒にいる。

デバイスで殴ってきたため、咄嗟に飛びのいてかわす。

「こんにちは、鉄槌の騎士さん。二年ぶりですね」

「ッ、テメエは…、あの時の！」

どうやら覚えてくれていたようだ。

「早速ですが勝負です！！」

と言いたいですが、無粋な輩が多すぎますね」

他の局員たちは既に臨戦態勢だ。

彼女の合図で一斉に攻撃を始めるだろう。

仕方ない。

「残念ですけど、今日は帰ります。

お相手はまた今度お願いしますね？」

「誰が逃がすかよ！このまま終わりだッ！」

そして彼女が合図をするのと、

『Ice Detonation』

彼女たちの足元の地面が爆発したのは同時だった。

私の周囲以外が吹き飛んだ。

「はあゝ、アホですか？

何の準備もないのに余裕なわけないでしょう？」

ここで戦闘になるのは予想済みだ。

だから来てすぐ、この辺一帯にアイスダガーを仕込んでおいたのだ。
雪の中に。

「それでは、今度こそ帰りますね」

そのまま私は転送魔法で帰った。

「教授は満足してくださったでしょうか？」

それだけが気がかりだった。

俺たちでやっちまおうぜ！（後書き）

はい、今回の主役はルナでした。

痛いよあ、お兄ちゃん…（前書き）

またアリシアです。

ネタがありません。

痛いよお、お兄ちゃん…

あゝ、平和だゝ。

あゝ、どうも。レン＝ベルツです。
最近は平和すぎて暇です。

だらけるなって？

仕方ないだろ。今は原作も安定期なんだよ。
事件やイベントも何もない。暇すぎる時期なのだ。

最近の俺たちはジェイルからの仕事をやったり、レリックを集めたりと普通の犯罪しかやっていない。

まあ、そのせいでルナたちは指名手配になってしまったのだが。

それにしても…、あゝ！やることねー！

sideアリシア

「あゝ、平和だなゝ」

最近よく教授がこう言っているけど、本当にそうだと思う。
退屈で仕方ない。

「なにか事件が起こらないかなゝ」

今、私は教授が持ってきたバイトで密輸入の護衛をしている。

扱っている品は、ロストログアや質量兵器などの違法の物ばかり。
しかし大体は問題なく終わるため、いつそのこと管理局が踏み込んでこないか、とすら思う。

すると、

「全員、動くな！こちらは時空管理局だ！
武装を解除して投降しろ！」

本当に来た。

寝転がっていた倉庫の屋根から跳ね起きる。
これも普段の行いが良いからだろう。

「あはっ、待ってました〜！」

仕事を依頼してきた連中を無視し、私は次々と局員をなぎ倒す。
結果的に依頼人たちを逃がせたので護衛としては合格だろう。

半数以上を倒すと、流石に目立ちすぎたのか局員が集まってきた。
しかし、

「おい、戦闘はどこで行われている！」

私の幻術のせいで目の前で行われている戦闘には誰も気づけない。
辺りを見回しても、私がいるのに気づけない。

次々と味方がやられていても、その光景に違和感を抱けない。

「お〜しまい」

五分程度で局員は全滅した。

正直、全然歯ごたえがなかった。

「…つまんない。帰ろ」

幻術を解き、帰ろうとすると、

「逃がすか！」

魔力弾が放たれた。

咄嗟に避けると一人の青年が銃型デバイスをこちらに向けている。

「あれ？全員倒したと思ったんだけどな？」

「君がこれをやったのか！？」

悪いけど、逃がすわけにはいかないな。

僕は首都航空課のティードランスターだ。君を逮捕する」

…少しはできるようだ。少なくともさっきの連中よりかは。だから、暇つぶしにさっきの魔法は使わずに倒すことにした。

「ロキ、行くよ！」

『M i r a g e S h o o t e r』

周囲にシューターを展開したように見える。
その数、なんと50発。

「シュート！」

そして、全てのシューターを発射した。

「そんな、こんな数の誘導弾を同時に!？」

咄嗟に防御魔法を使うが、それは意味がない。
何故なら、

「手ごたえがつ、これは幻術!？」

そう、ほとんどが幻術なのだ。

…ほとんどは、だが。

「これなら、…ガッ!？」

彼の後頭部に本物のシューターが命中する。
一方で、

「…ロキ、まだ？」

『少しお待ちください。…来ました』

戦闘をする傍らで、私は彼の名前に聞き覚えがあったため教授に確認を取っていた。

結果はビンゴ。

どうやら原作キャラの身内らしい。しかも、そろそろ死亡する予定の。

「んー、じゃあ殺っちゃって良いよね？」

彼のデータもついでに送ってもらった。
少し遊んでから殺すと決めた。

s i d e o u t

s i d e ティーダ

今、僕が戦っている少女は僕より強い。

雨のように降り注ぐシューターの幻術を前に、僕はそう感じていた。

僕の妹、ティアナと同じくらいの歳に見えるが、その実力はスランクはある。

とうてい僕では勝てる相手ではない。

しかし、増援が来ればあるいは。

そのために、少しでも時間を稼がなければ。

すると突然、少女が移動を開始した。

飛行魔法で飛び去っていく。

「逃がさないって言ったぞ！」

追跡を開始する。

追跡中にも攻撃はしているが、一向に当たらない。簡単に避けられる。

しかし、何故かあの子は全く反撃してこない。

ならば、一か八か！！

一気に飛行魔法の速度を上げ、あの子に追いつく。

少女が驚いた顔をしたが、そのまま零距离で魔力弾を放って近くのビルに叩きつける。

「ハア、ハア、捕まえたよ！
君を逮捕する！」

そのままバインドをしようとすると、

「痛い、痛いよお兄ちゃん……」

妹の、ティアナの弱々しい声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん、どうしてこんなことするの…？
私のこと、嫌いになったの…？」

血まみれのティアナがそこにいた。
さっきまでは間違いなくあの金髪の少女だったのにだ。

これは幻術だ！！

そう理性が叫ぶが、体はこの子がティアナだと認めている。
鉄くさい血の臭いが、今にも死にそうな声が、この子の頬を伝う涙
が、僕を狂わせる。

段々と何がなんだかわからなくなってきた。

「やだ…、殺さないで…。」

お兄ちゃん、助けてよお…。」

これを僕がやった？

でも、ちゃんと非殺傷設定に…。

「血が、血が止まらないよお…。」

助けて…、助けてえ」

気がつくと、辺り一面が血の海になっていた。
見渡す限りの血と、ティアナの死体が転がっている。

「あ、ああ、そんな、ティアナ、が…、どうして」

「う、うう、お兄ちゃん？」

すると、目の前のティアナがこちらを見上げた。

まだ生きてる！

咄嗟に抱き上げようとするが、

右手が勝手に動き、ティアナを撃ち殺した。

「あ、ああ、あああああああああ

声が出ない。

自分がティアナを殺したのだと自覚する。
頭がグラグラする。耳鳴りがひどい。

もう、何も考えられない。

s i d e o u t

s i d e アリシア

「うーん、やりすぎたかなあ？」

ここはビルの屋上だ。

さっきこの人に叩きつけられた。

わざとだが…。

目の前には、精神ダメージを与えすぎて廃人になったティードラ
ンスターがいる。

「ま、いつか！どうせ死ぬ予定だったんだし！」

そのままロキで胴を切り裂く。

出血で屋上がどんどん赤く染まるが、彼はなんの反応もしない。

「じゃあね、妹さんにはよろしく言うておくねー」

そう言っただけで私はそのまま立ち去った。

翌日の新聞で彼の記事が載っていたらしいが、新聞はあまり読まな
いたため見なかった。

痛いよあ、お兄ちゃん…（後書き）

次回、空港火災事件です！…たぶんですが。

空港火災（前書き）

今回、ルナが本気の魔法を見せます。

空港火災

あゝ、原作までまだまだあるな。

あ、皆さんどうも。レン＝ベルツです。

現在、新暦71年。つまり空港火災が起こる年だ。

これのおかげでスバルは管理局に入る決意を固めるんだよね、確か。ジェイルからこのレリックの回収を頼まれているんだが……。仕方ない、ふりだけにしておくか。

というか、そろそろライアがなのはと決着をつけたがっているんだよね。

そのせいか最近イライラしていることが多いし。

よし、この辺でスッパリと決着をつけてもらおうか！！

s i d e ルナ

「ありました？」

「ああ、確に見つけた」

「相変わらず凄い便利よね、それ」

私とライアとアイデアは今、これから火災が起こる臨海空港にいる。火災まではまだ時間があるため空港内の喫茶店で時間を潰している。ライアには目で、一応レリックがあるかどうかを確認してもらった。

「じゃ、役割の分担を確認しますね」。

あなたは高町さんを引きつけてください。私とイデアは来ると思われる転生者たちの相手をしますから」

最近になりようやくホクト、ナカジマと河内たちが合流したという報告があつた。

そのため、これからはより活発に転生者たちが動き出すだろう。もうどこかにいると思われる最後の転生者も気になる。油断は許されない。

すると、

「お、来るぞ」

そうライアが言うのと爆発が起きた。

防御魔法を張つたため私たちは無事だ。

というか、このテーブルだけが無傷なためかなり違和感がある。周囲は黒こげだ。

私は残りの紅茶を飲み干してから立ち上がった。

「それでは、時間まではブラブラしていきましょうか。

ここでは救助に来た人に見つかってしまいますから」

「そうだな。とりあえず奥に行こうぜ」

「わかったわ」

一応バリアジャケットを身に付けてそのまま空港の奥に向かった。

ちなみにアイデアのバリアジャケットは今はまだごつくない。守護騎士の甲冑程度だ。

戦闘時以外は基本的に軽装なのだ。そうしないと動きにくいらしい。ライアはその間も、ずっと探査を続けている。

高町さんを探しているのだろう。

しばらく歩いていると、不意にライアが上を向いた。

「来ましたか？」

「…いや、違えな。

魔力はオーバースはあるが…、これはアリスが相手にしたやつじゃねえか？」

「ああ、ナカジマさんですか。」

まあ、放っておきましょう。あなたに決着をつけてもらうのが今日来た目的ですしね。」

「…なんか悪いな。俺の事情につき合わせて…」

「いえいえ。最近イライラしていたようなので丁度いいですよ。

それに、もう十年以上の付き合いなんですから、水臭いことはなしで。」

「そうよ、周りにも迷惑だし」

「そりゃそうだがよお…、来たぞ」

そんなことを話していると、どうやら本命が来たようだ。

「他はどうですか？」

「…金髪兄妹とザコ剣士もいるな。
あと、少し離れているが闇の書の主もいる」

「…オールスターですねえ」

多すぎる。

最悪、オーバースの魔導師を五人も相手にすることになる。
しかも見事に能力が分かれているし。

「…ライア、日を改めませんか？」

「賛成。これは厳しいでしょ」

わりと真剣に聞いてみた。

「…いや、このままやるぞ。

今日、ここで決着をつける。延期はねえ」

「…マジですか」

「もういいわ」

イデアは諦めたようだ。

私も腹を括る。

「わかりました。

でも、管理局の応援が来るまでがタイムリミットです。
来たら撤退します。時間はあまりありませんよ？」

「わかった。なら、すぐに行くぞ」

それを聞き、アイデアがバリアジャケットを重装甲に変える。

「私が河内さんとナカジマさんをやります。

アイデアはテストロッサさんたちを。

参戦してこない人は放っておいてかまいません。

八神さんは無視して良いです。広域殲滅型の彼女はおそらく参戦してきませんから。

それと、目的を忘れないくださいね。今回の目的はライアの決着です。

無闇に戦う必要はありません」

「OK、任されたわ」

準備は完了。あとは行くだけだ。

「では、また後ほど」

「さっさと終わらせてね」

「任せろ」

そして、そのままライアは高町さんに砲撃をお見舞いする。

咄嗟に高町さんは避けたが、抱えていた子を落としてしまった。というか、あれってスバル「ナカジマでは？」

「ちょ、アイデアー!!」

「了解!!」

『Lightning Road』

一瞬でアイデアが彼女の下に飛び込み、なんとか受け止めた。あ、危なかった…。危つく原作キャラを殺すところだった。

「友美ちゃん!?なんでここに!?!」

「お前の相手は俺だぜ!!」

どうやら向こうも始めたようだ。

高町さんはいまいち戦いに集中できていないようだ。

「アイデア、その子を送ってきます。

スパークムーヴはその子がいたら使えませんか?

つまりあなたが送ったら時間が掛かります」

「それはそうだけど…」

「送ってくる間をお願いしますね」

スバル「ナカジマをアイデアから受け取り、そのまま人が集まっている場所に移動する。

別に転送魔法で跳ばしても良いのだが、少しでもあそこから離れていなかった。

アイデアはわかっていたようで、凄く睨まれたが…。

「あ、あの！」

すると、スバル「ナカジマが話しかけてきた。

「ん？なんですか？」

「あの、管理局の人ですか？」

「いゝえ違いますよ。」

私たちは、悪い犯罪者なんです。だからあの人たちと戦っているんですよ。」

彼女の顔が青ざめる。

「別にあなたには何もしませんよ。このまま普通に送りますよ。それと一応忠告しておく、あなたも気をつけないといけませんよ。」

あなたは珍しい体なんですから。」

「な、なんで知ってるの！？」

：なんか、昔の高町さんを思い出す。

思ったことが顔に出すぎだ。

「さあ、なんででしょうね。」

ほら、着きましたよ。」

「スバル！！」

着くなりこの子の姉と思われる子が駆け寄ってくる。

その子に彼女を渡しそのまま戻ろうとすると、

「あ、あの！お名前、なんていうんですか！」

彼女が大声で尋ねてきた。

まあ、別に答えても良いだろう。調べればわかるし。

「ルナ＝ベルツです。」

もしあなたが管理局に入るようなことがあれば、また会うこともあるでしょう」

そう言っただけで今度こそ飛び立つ。

アイデアが心配なので急いで戻ると、アイデアが一人で八神さんを除く四人と戦っていた。

っていうか圧倒している。遠目でもわかるくらいに。

アイデアがやっているのは単純に近づいてデバイスを叩きつけるというのを繰り返しているだけだ。

速すぎて目で追えないが…。

【ルナ、遅いわよ。私一人で全員を相手にしていたのよ？
疲れたわ。ここから交代】

【え〜。そのまま倒してくださいよ〜。

…そ、そうです！そろそろ応援が来るので、そっちをなんとかします！

なので、そのままお願いしますね！】

【…今度なにか奢りなさい】

咄嗟に口実を作って不参加を表明する。

イデアは渋々納得してくれたが、後で何を奢らされるのやら。

上空では八神さんが大規模氷結魔法で消火をしている。

っていうか、味方の局員も凍っているんですけど…。

凄い大雑把だ。精度が甘い。

そして、応援がやってきた。

しかしライアの方はまだ終わっていない。

決着はまた今度ですね〜。

【二人とも、脱出の準備を。

大規模氷結魔法で気を引きますから】

【了解】

【チッ、もつかよ！】

ライアも渋々とだが納得したようだ。

さて、こっちも始めないと。

この魔法は八神さんがいずれ使うらしいが、氷結魔法は私の分野でもある。

私に使えない道理はない。場所も良いというのも理由の一つだ。

「海より集え水神の槍 彼方より来たれ銀雪の吐息 逆巻き連なり
天に座せ」

近くの海の海水を使って大氷塊を作り上げる。
かなり巨大で、空港の敷地の半分くらいはあるのができた。
原作だと砕かれたらしいが、この大きさを砕くのは無理だろう。

全員が全力で避難に徹している。

「ま、せっかく作ったので落としますけど」

どうせこの空港はもう使えないし、別にいいだろう。

「ヘイムダル」

翌日、空港火災のニュースが流れたが、火災よりもヘイムダルの方が取り上げられていた。

空港の半分が押しつぶされている光景を見て、方舟の皆が恐ろしいものを見る目で私を見るようになった。

空港火災（後書き）

やっと空港火災が終わった。
次回をお楽しみに。

少女誘拐及び監禁の罪で逮捕だ（前書き）

今日はあの人が。

少女誘拐及び監禁の罪で逮捕だ

「変ですね」

「変」

「変だよ」

「変ね」

「あ、あの、変…、だと思います」

「やっぱり変だと思うか、お前らも」

うーん、どうしたんだライアのやつ…。

あ、皆さんどうも。レン＝ベルツです。

何故こんなに皆で変を連呼しているのかというと、ここに参加していないライアが原因だ。

最近ライアが仕事から帰ってくると報告もせずに部屋に引っ込むようになった。

別以後で報告はしてくるからそれは良いのだが、食事すら自室でするようになったのだ。

さらに、部屋に誰も入れないようになった。

…何コソコソしてんだ、あいつ？

「ペットでも飼い始めたんでしょうか？」

「だったら隠す必要はない」

「私が幻術使って姿を消しても反応してきたよ。普段から目を使ってまで警戒してるみたい」

「それに留守の間にも部屋に結界を張っているわ。凄いい念の入れようね」

「ほ、本人に聞いてもはぐらかされますし」

「うーん、ないとは思うが謀反でも起こす気なのか？」

「全員でこうして会議をしても全くわからない。どうするか」。

「もう、めんどくさい！」

「こうなったら直接部屋に行こう！そのまま強制捜査だよ！！」

「…そうですね。気は進みませんがそれしかないですよ」

「姉に隠し事は許さない」

「…別にプライベートなことなんだからそつとしておきましょうよ」

「あ、あの、ひょっとすると反抗期に突入したのかも」

「いや、それはないと思うぞリリス。」

「というか普段以上に反抗されたら俺がもたん。」

その後、なんやかんやでライアの部屋に全員で行くことになった。

とりあえずインターフォンで呼び出す。

数秒の間をおき、ライアが出た。

「誰だ？」

「俺だ。少し話がある。中に入れろ」

「な、中か！？あ、いや、今は散らかっているからよ、食堂か会議室にしようぜ！」

…あからさまに部屋に入れようとしないう。
これは黒か？

「別に構わない。早く開けろ」

「い、いや、ほらあれだ！
とにかくここ以外にしようぜ！」

「…もういい。リリース！」

「は、はい！なんでしょうか！」

「ここは電子ロックだ。こじ開けろ」

「り、了解しました！」

リリースが開錠を始めた。

「は？ちょ、おい！なにしてんだテメエは！」

「最近お前の様子がおかしかったからな。

満場一致で家宅搜索の案が可決されたんだよ。

何をコソコソしているのかは知らんが、万事休すだ」

「…私は賛成してないわよ」

アイデアが呟くのと、ライアの部屋の扉が開くのは同時だった。

すると室内から非殺傷設定の魔力弾が大量に撃ち出された。

全員が扉から飛び退き、壁に背中合わせに立つ。

どうあっても中には入れないようだ。

「ライア、あなたは完全に包囲されています。」

大人しく武装を解除して投降しなさい」

「そうだそうだ〜！！」

ルナとアリシアはノリノリだ。

「中に入れないと殺す」

アリスは既に殺る気満々だ。

「何も後ろめたいことがないなら入れなさいよ。

本当に何か隠してるの？」

冷静に語りかけるのはアイデアだ。

「う、うるせえ！とにかく今は駄目だ！別の日にしろ！」

弾幕を張りながらライアが叫ぶ。

「おいお前ら、やめろ」

とりあえずカオスなこの事態を収拾しなければ。

「ライア、別に俺たちは怒っているわけじゃないんだ。

お前の行動が怪しいから確認に来たんだよ。

そんなに隠したいなら話さなくても良い。だから攻撃をやめろ」

「…アంత」

すると、弾幕がやんだ。

馬鹿め!!

「ルナ!突撃だ!!」

「了解です!!」

瞬間ルナが突撃した。

「え？おま、ちょ、騙しやがったなああああああ！！！」

室内で打撃音が響く。

数秒後、ルナがライアを引きずってきた。

「…テメエ、話さなくて良いって言ったじゃねえかよ」

「ああ、お前は何も話さなくて良い。

何故なら俺たちが勝手に確認するからな」

嘘は言っていないぞ？

「き、教授！！大変だよ！凄いの見つけちゃった！！」

すると、アリシアが室内で何か見つけたようだ。

「よくやったアリシア。で、なんだった？」

「え、え〜と、それがね……」

「うん？」

「や、やめろ！よせええええええええええ！！！」

ライアが隠していたものを見てその場の全員が絶句した。

「え、え〜と、ある意味ペットみたいなものでしたね」

「……………」

「まさか弟がこんな犯罪に走るとは思わなかった」

「……………」

「うつわあ〜、ライアってそういう趣味だったんだ」

「……………」

「…あ、あの、悩みがあるなら相談して良いのよ？いつでも相談にのるから」

「……………」

「え、えっと、とりあえずノーコメントで…」

「……………」

「…で、何か申し開きはあるか？」

「…一つ良いか？」

今まで無言だったライアがようやく口を開いた。

ちなみに、ライアは今バインドで簀巻きにされて床に転がされている。

部屋に連れ込んでいた幼女の隣で。

「何だ？ロリコン」

「そうやって誤解するだろうから黙ってたんだよ！」

ライアが叫ぶが誰も聞く耳を持たない。

「ルナ、罪状を読み上げる」

「はい。未成年の少女の誘拐、及び監禁です」

「ふむ、アリシア、アリス。判決は？」

「「有罪」だね」

「ということだ、ライア。」

俺たちは確かに悪の犯罪者だ。だがな、それでもプライドを持つぜ？」

「うるせえ！誘拐も監禁もしてねえ！
いつでも出て行って良いつて俺は言った！」

「へえ、部屋に結界まで張ってたか？」

ネタは上がってるんだよ、とばかりにライアを責めたてる。
特に女性陣からの視線は冷たい。

「あ、あの！違うんです！」

すると、誘拐されていた幼女が突然声を上げる。
いや、見た感じ六歳か七歳くらいだから少女か？

「お嬢さん、違うとはどういうことかな？」

とりあえず話を聞いても良いだろう。

「あの、私が森で遭難しているところを偶然通りかかったライアさんが助けてくださったんです」

「ほう、ライアが？」

ライアに言わされている可能性もある。
信じるのは半々くらいだ。

「それで行くところがないって言ったらここに連れてきてくださったんです。

悪いのは私です！だからライアさんを責めないでください！」

「ふん。なるほど」

筋は確かに通っている。

ライアのことだ、立ち去るに立ち去れなかったんだろう。

前に路上に捨てられた猫の前でジツとしていたこともあったし。

「ライア、それなら何故報告しなかった？」

【…こいつ、原作キャラだ】

少女以外に伝えられた念話で全員が状況を理解する。

こいつ、やらかしやがったー！

「おい、もう隠してもしょうがねえ。

一緒にいた竜を出せ」

「は、はい。フリード！」

すると、部屋の奥から白い小さな竜が飛んできた。

「……………」

…あゝ、最悪の展開だ。

間違いない。

この子、キャロルルシエだわ…。

少女誘拐及び監禁の罪で逮捕だ（後書き）

はい、というわけでキャラ登場です。

史上最強の弟子キャロ（前書き）

魔改造が、今始まる！！

史上最強の弟子キヤロ

おいおいおい、どうすんだよこれ。

あ、皆さんどうも。レン＝ベルツです。
現在、非常に困った事態に陥っています。
原因はそこに転がっているロリコンと、

「あの、私キヤロ＝ル＝ルシエといいます」

そう、この子だ。

「全員、集合！！」

とりあえず会議が必要だ。
ライアのバインドを解き、全員で集まる。

【おいおい、どうすんだよ。
なんで原作キヤラのあの子がいるんだよ！？】

【仕方ねえだろ！
拾った時は気づかなかったんだよ！あの竜を見てからようやく思い
出したんだ！】

【言い争っている場合ではありません！
とりあえず、あの子をどうするかです！】

「あの！」

全員がキャ口を振り返った。

「あの、ご迷惑なようなので私は行きます。短い間でしたけど、お世話になりました」

そう言つて頭を下げる。

「」「」「」「」.....「」「」「」

「な、なんだよ...?」

全員の視線が俺に集中した。
いつの間にか俺だけが完全にアウェーだ。

「いえ、教授が捨ててこいと言うなら私は従いますよ?」

「だな。アンタがそう言うなら仕方ねえな」

「教授に任せる」

「そうだね。教授が言うなら仕方ないよ」

「ええ、そうね。仕方ないわね」

「え、え」と、そうですね。仕方ないです」

言外に、捨てるなら俺のせいだと言っている。
こいつら、全部俺の責任にする気だな...。

「はあゝ。わかった、好きにしろ」

俺が折れるしかないだろ、この状況。

「えっと、良いんですか？」

「ああ、構わないさ。

その代わり、ウチは働かざるもの食うべからずがモットーだ。よって何かやってもらうことになる。いいな？」

「はい！」

「キョクルー！」

こうして、ウチに一人と一匹の家族が加わった。

加わったんだが！！どうしよ、stsは。

戦力は増えても減らすつもりはない。それは変わらない。だからこそ困る。

これじゃあ機動六課の戦力が減る。どうすれば。

「教授、それならば彼女には六課へのスパイになってもらえば良いのでは？」

「……………」

そ、その手があったか——！！

確かにそれならば一石二鳥だ。

情報が手に入りつつ六課の戦力も補える。

「よし、その案で行こう。

しかし最後にはこちらに戻ってもらうがな」

そうと決まればやることは一つしかない。

キャラの魔改造だ！！

最後にはこちらに戻ってもらうのだ。

そこそ使える戦力でなくては困る。最低A A A + くらいは欲しい。

s t s が始まるのは確か四年後。

キャラがフェイトに保護されるのは来年くらいだろう。

ちゃんと保護されないと転生者どもが怪しむからな。保護はさせる。つまり、残りの一年だけでなんとかしないといけないわけだ。

「フフフ、燃えてきたぞお！

ルナ！早速ドクターに連絡しろ！レリックを一つ貰ってこい！！」

「れ、レリックですか！？

どうするんですか、あんなもの。

キャロさんにレリックウェポンの素質があるかはわかりませんよ？」

「とにかく貰ってこい！俺がなんとかする！

クハハハハハ！腕が鳴る！」

待っている、キャロール！ルシエ！俺が最強の召喚師にしてやる！！

そして半年が経った。

一応、キャロの魔改造は成功した。

魔力量はレリックでカバーした。

え？レリックウェポンの素質はあったのかって？

なかったけど？

それがどうした！ないなら作れば良い！！

そういうわけで、まずはキャロの肉体改造から入った。

簡単に言くと、レリックに100%適合できるように、逆に体を調整したのだ。

これで誰でもレリックウェポンになれる！！技術チートの成せる技だ！！

ちなみに、転生者うんぬんはもう説明してある。

家族には全て話す。これが俺のルールだ。

最初は驚いていたが、最後には協力してくれると言ってくれた。家族のためならば頑張ると言っていた。

…俺、泣いて良い？

こんな良い子を捨てようとしていたとは…。

少し前の自分を殴ってやりたい。

後は戦闘訓練だ。

ウチのメンバー全員が総出で訓練した。

フルバック？いえいえ、自分で戦えない魔導師に意味はありません。

特に格闘戦には力を入れた。徒手空拳を鍛えまくったらしい。

もう普通に前衛でもやっていける。

え？端折りすぎ？

いや、キャラに話を聞くと泣き出すんだよ。

なんでもトラウマらしい。

満足できないならダイジェストでお送りしよう。

ケース１ ルナ

「ほらほらキャラさん。ちゃんと避けないと爆死しますよ？」
ま、近づいたら斬殺しますけどね。」

「キャアアアアアア！！！」

ケース2 アリス

「何してるの？」

どんな手を使っても良いから私にダメージを与えて。
竜を使えば良い。そうしないと殺す」

「キャアアアアアア！！！」

ケース3 ライア

「安心しろ。俺は普通に射撃の回避訓練だ。
そんなに厳しくねえよ。まずは無難にシューター掃射百発避けでい
くか」

「キャアアアアアア！！！」

ケース4 イデア

「私と同じ重さのバリアジャケットで訓練室を百周して。
その後で徒手空拳の稽古ね。自分にブーストをしながらやりなさい」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ」

ケース5 アリシア

「ほら、まずは竜への恐怖を克服しないとね！

今から竜が目の前で暴れまくる幻覚を見せるから、それを観賞しよう！」

「キャアアアアアア！！！」

俺が見ていた感じだとこんなだった。

でも、これってだいぶ初期のことらしい。

どんだんハードルが上がっていったんだと。

例えば訓練じゃない時に後ろから襲ったり、終了と言ってから不意打ちしたり。

おかげでちょっとやさっとじゃ動じない子になった。

半年前とは別人だ。後ろに立つと超反応を見せる。

前に一回だけボディブローを入れた。痛かった。

はあ、これ完全に原作のキャラと違うだろ。

史上最強の弟子キャロ（後書き）

一年で強くするつもりが、度が過ぎて半年で終了。
残り半年はどうするの？。

予想以上（前書き）

キャラがどんどんチートに…。

予想以上

「と、まあこんな感じだ」

「なるほど、素体の方をレリックに合わせるとはね。

生まれる前から調整していたならばまだしも、生後に調整するとは……。

相変わらず、すばらしい技術力だ」

「そう褒めるなよ」

お互い常に見習うところがあるなあ。

あ、どうも。レン＝ベルツです。

今、ジエイルと通信中です。

この前貰ったレリックについての説明をしていました。

向こうには既にレリックウェポンが二機も稼動しているからな。キャロの件では参考にさせてもらったのだ。

「しかし、実に興味深いね。

キャロ＝ル＝ルシエだったかな？」

「見たいなら見たいと言え。

だが、そうだな。久々に顔を合わせるのも良いな。

数日後にそっちに行く。そっちも例の二機を呼んでおいでくれ」

「おお、そうかい！

楽しみにしているよ。美味しいお茶も用意して待っているよ」

というわけで、数日後にジェイルたちと会うことになった。
今のうちに今後のことも話しておきたいしな。

数日後、今俺たちはジェイルのアジトにいる。

「やあ、こうして実際に顔を合わせるのは四年ぶりくらいかな？」

「そうだな。元気そうだなによりだ。

それで、その二人が？」

ジェイルの後ろに立っている二人を見る。

ああ、ゼストⅡグランガイツとルーテシアⅡアルピーノだな。
間違いない。

「ああ、そうさ。

この二人が私が作り上げたレリックウェポンだよ。
詳しいデータは奥で見よう」

「わかった。

んじゃ、お前らは解散で。全員、このアジトの中なら好きにしておいて
良いぞ」

そう言って二人で奥に行く。

ここからはウーノもなしの、本当に二人きりだ。

さあ、久々に息抜きするか。

sideキャラ

困りました。

私は今、ドクターさんのアジトにいる。

アリスさんとアイデアさんはパスしたので来ていない。

「ライア殿、久しぶりに模擬戦などいかがですか？」

「よし、セイン！一緒にここの探検に行こう！
リリースも行こうよ！」

「あゝんルナ様。前の高町なのはとの戦闘！とても痺れましたわ
〜！
是非詳しく聞かせてくださいな〜！！」

気がつくと、周囲にはルーテシアという子と、ゼストさん以外は
なくなっていた。

な、なんか寂しい。

思い切って話しかけてみる。

「ね、ねえ。ルーテシアちゃん…、だよね？」

「…なに？」

話しかけると返事はしてくれた。

良かった。一見、雰囲気のアリスさんに似ているけど、あの人みたいに殺す殺す言わない。

あの人なら間違いなく「話しかけたら殺す」って言うし。

「あの、良かったら少しお話ししない？私、同い年くらいの友達っていないくて」

「…そう」

それから少し話をして色々と驚いた。彼女も私と同じ召喚師らしい。そして、母親のことも聞いた。

「…そうなんだ。

あの、お母さんのこと、良くなるといいね」

「…うん」

教授の話によると、この子は私がいずれ管理局に行けば戦うことになるらしい。

正直いやだけど、それがこの子のためにもなると言っていた。

「応援してるよ、ルーちゃん」

私たちの後ろでゼストさんが微笑んだ気がした。

side out

「…これはどういうことだい？」

「ああ、俺にも予想外だったが事実だ」

俺とジェイルは今、アジトの最奥にいる。

そこで昨日取ったキャロのデータを検証していたのだが…。

「信じがたいね。」

彼女の中にレリックがないとは。なにかの間違いということとは？」

「いや、何度診ても同じだ。」

俺が考えるに、調整が上手くいきすぎてレリックが完全に融合したんだと思う」

そう、キャロの中にはもうレリックはない。

どうやらリンカーコアと完全に同化したらしい。

「適合率が高いとこのようなことが起こるとは…。

実に興味深い！できることなら解剖して調べてみたいよ！！」

「却下だ。バラすのは俺が許さん。」

というか今後を見守った方が得だぜ？

あいつはまだ成長過程だ。今後、爆発的に魔力が増える可能性もある」

「なるほど、それもそうだね。」

ああ、君と出会えて本当に良かった！

他人の研究がはかどるのがこんなに嬉しいのは生まれて初めてだよ」

「それはお互い様だ。

俺も自分の研究を理解してくれるやつがいて嬉しいからな」

そう、今後キャラは対転生者の切り札になる。

機動六課を潰すのも、おそらくキャラになるだろう。

だからこそ隠蔽はしっかりしなくては。

俺たちの前には、キャラのデータが映し出されていた。

キャラ〃ル〃ルシエ

魔力量 S＋ランク

二騎の竜の完全制御に成功

レリック適合率 134%

予想以上（後書き）

なんか、凄いことに…。

進化あああああああ！！（前書き）

改訂しました。

本当に申し訳ありません。

進化あああああああ！！

「キャラさんの魔力値、また8%上がりました〜！」

う〜ん、これは困った。

あ、皆さんどうも。レン＝ベルツです。
現在、非常事態に陥っています。

ジェイルのアジトから戻って数日後、キャラが突然の熱で倒れたのだ。

原因はリンカーコアの急成長による負荷だ。

「教授〜、再び増大です〜。

もうじきSSランクを突破しますよ〜。こんな聞いたことないです〜」

「おい！キャラは大丈夫なんだろうな！？」

ライアが詰め寄ってきた。
っていうか落ち着け。

「大丈夫だろ、たぶん。
レリックウェポンとしては最高峰として調整したんだ。
むしろ、今その成果が出ようとしてるんだよ」

そう、このまま行けば魔力量はとんでもないことになるだろう。
そうなった時こそが彼女の完成となるのだ。

「さうてキャラ、お前はどこまで行く？」

今夜は眠れないだろう。

そして翌日、キャラは無事に目を覚ました。

もうどこにも異常はない。ピンピンしている。

平気なふりをしていたが、ライアが一番喜んでいた。

で、肝心の魔力量なんだが…、その、なんだ。

SSSランクだった。

本来は魔力量にSSSランクなんてものはない。

SSSランクというのは、いわば人間の測定不能の領域のことなのだ。

つまり人類最高の魔力の持ち主がSSランク認定される。

キャラはそれを超えた。

ということは、キャラは記録上では人類最大の魔力量になったとも言える。

これじゃあどれだけリミッターが必要かもわからん。

あれ、これって六課へのスパイ作戦無理じゃね？

「……………」

魔改造、やりすぎた。

「っていうことがあってさ」

「それは凄い！今度また来てくれたまえ！
ぜひとも彼女を研究したい！」

ジェイルのテンションが振り切れそうだ。

「それで、今日は何の用だ？」

今日はジェイルの方からの連絡だ。

キャロのことはついでに話ただけで本題じゃない。

「そうだったね。」

実はナンバーズの9、11番が稼動し始めたのだよ。

しかし予想よりも完成が早くてね。まだ武装が完成していないんだ。
だから当分は固有武装なしの訓練になるんだが、そこでキャロ君の
成長具合を思い出してね」

「つまり鍛えてほしいってことか。」

筋力とかはもうあるんだろ？つまり戦闘経験や武器の使い方か……」

「そうだね。それで、頼めるかい？」

「わかった。」

その代わり、武装はこっちで造る。

その方がお互いに楽だろ。こっちはその武装に合わせて鍛えられる
からな」

「それは助かるよ。」

あとで二人の詳細なデータを送るから、参照してくれたまえ」

「了解した」

はあ、なんか豪いことになった。

ノーヴェとウエンディを鍛えるのか。

ここで強くしすぎたら原作途中で終わるんじゃない？

あれ？冷静に考えたらあの二人が出るのって結構終盤じゃ…。

そうじゃん。なら妥協はいらないな。

幸いルナたちはキャラの件ですっかり味を占めたので快諾してくれるだろう。

…二人のご冥福をお祈りします。

その翌日、トーレとチンクに連れられて二人が方舟に来了。

ちなみに、ドクターたちも一度だけ来たことがあるがその時はウーノとトーレしか連れてきていなかった。

「よく来たな。それで、その二人が？」

「はい、ナンバーズ9番『ノーヴェ』と11番『ウエンディ』です。愚妹たちですが、どうぞよろしく願います」

「ちょっとトーレ姉、愚妹はひどいツスよ」

「ウエンディ、静かにしろ。」

これからこちらでお世話になるんだぞ？」

「チンク姉の言うとおりだ。静かにしろ馬鹿」

「ちえ」

なかなか面白い連中のようだな。

「それでは、私たちはこれで」

「二人とも、失礼のないようにな」

そう言って二人は去っていった。

「それじゃ、二人には早速訓練に移ってもらうんだが。

ノーヴェ、お前は陸戦の前衛型。

ウエンディは両用の射撃型で合ってるな？」

「「はい」ツス！」

「よし、武装はもうあらかじめ構想は終わっている。

お前たちがここにいる間にはできるだろう。

それまでは基礎訓練だ」

「えゝ！基礎訓練なんてつまらないツス」

「おい、馬鹿!!」

ここでウェンディが声を上げるが、これは最初だから許す。
それに、

「安心しろ。

この方舟においての基礎訓練とは、本訓練を始めるための訓練だからな」

以下ダイジェスト

ケース1 ルナ

「うおおおおおおお!!?」

「死ぬ!このままじゃ死ぬッス!!」

「なに言ってるんですか?」

ただの人間にできて戦闘機人にできない訓練なんてあるはずないでしょ?」

それ、爆発爆発また爆発ッ」

ケース2 ライア

「馬鹿どもが！！センサーに頼りつきりだからそうなるんだよ！視覚に拘るな！相手がどうやってお前らを殺そうとしているか考える！！」

そうすりゃ自然と攻撃してくる方向がわかるんだよ！！」

「この誘導弾の雨の中でどうしろってんだよ！！」

「うひゝっ、360度シューターしかないッス！」

ケース3 イデア

「相手がどんなに速くても、必ず速度が落ちる瞬間があるわ。そこを狙うのよ。二人もいるんだからどちらかが罠になりなさい」

「ウェンディ、お前がやれ」

「無理ッス！」

ケース4 アリシア

「なんだこの幻術！？全然見分けがつかねえ！」

「センサーに掠りもしないッス！これじゃあどうしようも……」

「隙ありだ〜!!」

「ギャアアアアアアアアアア!」

こんな感じだった。

俺とリリスは二人の武装を造っていたからよく知らんが。

アリスはできる訓練がないからって参加していない。

キャラは魔力が増えたので、自主トレで操作訓練をしている。

ノーヴェとウエンディが言うには肉体よりも精神の消耗の方が激しいらしい。

しかし、日に日に悲鳴が聞こえる回数も減っていきどんどん遅しくなっていたとはルナの談だ。

固有武装が完成するまでこれを毎日やったらしい。完成してからは応用の訓練を始めたとか。

悲鳴が普段から聞こえるようになった。

そうだ、二人の武装をここで説明しておこう。

まずノーヴェ。

原作ではガンナツクルという籠手とジェットエッジというローラーだった。

正直、俺が造ったのも大差ない。出力と耐久力を上げただけだ。

問題はウエンディだ。

原作ではライディングボードという盾で攻撃したり防御したり飛んだりだった。

しかし俺は思った。

「飛ばせるなら四つくらいあった方が便利じゃね？」

実際、あれは彼女のＩＳで浮かべてるものだ。
そして重量限界にはまだまだ余裕がある。

あれ？これって一番やりやすい？

そうと決まれば早速やるぞ！！

という感じで、彼女の武装だけ凄まじい数の変形や形状を追加した。
フフフ、もう後衛とは言わせない。

最前線を射撃で制圧する最強の射撃型戦闘機人にしてくれよう！！
ルナたちにはますます訓練を厳しくさせねば！！

「はーっはっはっはっはっは！！」

数週間後、ジェイルのアジトへと帰った二人はこう言ったらしい。

「あそこに行けば強くはなれるのは確かだ。

そうしないと生き残れないからな…」

「もう二度と基礎訓練を馬鹿にはしないッス。

基礎より上なんて、もう思い出したくもないッス…」

進化ああああああああ！！（後書き）

キャラ“たち”の進化はまだまだ続く！！

最後の転生者（前書き）

とうとう最後の転生者が！？

最後の転生者

side最後の転生者

私はアンナ＝サンシャイン、転生者よ。

私はフェイトさんに孤児として引き取られて、保護責任者になってもらったという過去がある。

でもそれも計算の内。

本当はそれでエリオと会うことこそが本当の目的だ。

そしてそれは上手くいき、いまじゃエリオとは幼馴染だ。

私の今後の目的はただ一つ。

キャラになんかエリオは渡さない！！

エリオを見守るために私は転生してきたのだ。

原作どおりにくっ付かれては困る。

フェイトさんには感謝してもしきれない恩があるけど、こればかりは譲れない！

エリオとくっ付くのは私だ！！

と思っていたのだが、

現在、私は機動六課の施設のロビーではやての部隊長挨拶を受けている。

そして、この場にキャラはいない。

…あれ？

side out

やっと、やっと見つけたぞ！転生者ああああ！！

あ、どうも。レン＝ベルツです。

とうとうstsが始まりました。キャラなしで。
今はちょうどはやての部隊長挨拶が終わったところだ。

え、なんでわかるかって？

アリシアが幻術を全開にしてロビーにいるからだ。
そこでデバイスを通して中継してもらってる。

そこで見つけたのだ。最後の転生者を！

まさかフェイトの孤児の中にいるとは。
どおりで見つからないわけだ。そこらのモブキャラと見分けがつか
なかった。

そして今、彼女のことを全力で調べている。

名前はアンナ＝サンシャイン。

階級は三等陸士で魔導師ランクはBか。

魔力量はAAA - と普通の転生者と同じくらいだ。

孤児を特典に選んだのだろうかまだ残っている。
要注意だな。

「アリシア、もう戻って良いぞ」

「はいはい！」

さて、今後は訓練で特典を出すかどうかだが……。
いや、やめとこう。ぶっつけ本番の方が面白い。

「ククク、アンナ」サンシャインね。

エリオを目的で来たシヨタコンだと思うが、悪いな。
そんなことを思えないくらい面白い目に遭わせてやるよ」

side アンナ

初日だというのにキツイ訓練だった。
体のあちこちが悲鳴を上げてる。今は皆で寮に戻るところだ。
すると、

【悪い、少し良いか？】

スターズの河内 亮さんから念話が来ました。
こんな人は原作にはいなかったはず。私の同類だ。

【訓練で疲れているので念話のままで良いですか？】

【ああ、構わねえ】

念話をしていると寮に着いた。
雑談をする気力もないので全員無言だ。

【それで何の用ですか、転生者さん？】

【…お前も、転生者、だよな？】

【は？】

なんでそんなわかりきったことを聞くのだろう。
シャワーを浴びながら若干イライラする。

【そうですけど？】

あの、そういう確認なら今度にしてもらって良いですか？
疲れているので？】

【いや、念のためだ。

今日は忠告のために話をしたかったんだ】

【忠告？】

何が言いたんだこの人は。

【俺たちの他にいる転生者のことだ。
一人、危険なやつがいる】

【はぁ、危険ですか…】

もう眠い。早く寝たい。

【そいつは原作ブレイクをしようとする転生者を殺す。
気をつける】

【はあい、わかりましたあ】

半分寝ていた私は話を途中から聞いていなかった。
あれ、忠告が何だっけ？

そのまま私は眠りについた。

最後の転生者（後書き）

この忠告を聞かなかった彼女はどくなるんでしょうね？

情け容赦無用少女キャラです（前書き）

キャラの初任務です。

情け容赦無用少女キャロです

「よし、作戦は覚えたな？」

「はい！初任務、頑張ります！」

うんうん、良い返事だ。

あ、皆さんこんにちは。レン＝ベルツです。

今日は新人たちの初仕事の日、つまりファーストアラートだ。今回はキャロのポジションに例の女の転生者がいる。

うん、憧れのエリオ君とイチャついてるところを悪いが、

ボコボコにしてやろう！殺しはしないがな！！

男女平等の時代だ。女にも容赦はしない。

さあ、魔改造キャロの力を思い知れ！転生者ども！！

side
アナナ

午前の訓練を終えると、六課にアラートが鳴り響いた。

とうとう来たな、ファーストアラート！

その後すぐに準備を終え、ヘリで現場に移動する。
今回はライトニング5のユーナ・テストロッサさんも来ている。
この人も転生者だろう。軽く会釈する。
すると、彼がこつちを向いた。

【お前が亮が話していた…。初任務だ、気をつけろ】

思っていたよりも良い人のようだ。

現地に到着すると、なのはさんとユーナさんは敵の航空戦力を叩く
ために出動していった。

それで降下ポイントに到着したわけなんだけど…、

高すぎでしょ、これ！！

スバルさんティアナさんは先に飛び降りていったけど、私にはキツ
イ。

どうしよう…。

すると、エリオが私の手を取った。

「大丈夫。一緒に行こう、アンナ」

思わずキュンとした。

そうだ、こんなことで立ち止まっている場合じゃない。
ここで良いところを見せて、エリオにアピールしないと！

「ライトニング3、エリオ」モンディアル！」

「ライトニング4、アンナ」サンシャイン！」

「「行きます!!」」

よし、頑張るぞ!!

side out

side キャロ

「うわ、本当に飛び降りましたよ…」

ヘリから次々と飛び降りるフォワードのメンバーに驚愕します。
私だったら空中で撃墜しますよ…。

現在、私は列車の上空からフリードに乗って状況を見守っています。
かなりの高度なので誰にも見つかっていません。
すると、教授から通信が来ました。

『キャロ、状況はどうだ?』

「はい、例の転生者さんは杖のデバイスを使っています。
前衛も後衛もできるオールラウンダーみたいですね」

『そうか。列車が止まり次第、攻撃を開始しろ。
他のメンバーも同時に攻撃する。ライアに良いところ見せるチャンスだぞ?』

「ッ！はい！頑張ります！！」

そうだ、ここで良いところを見せればライアさんに褒められるかも！
そして、列車が止まります。

「フリード！絶対にレリックを奪うよ！！」

フリードは咆哮とともに急降下しました。

先制攻撃だ！幸い、フォワード陣は一箇所に固まっています。

「フリード、ブラストレイ！」

ようやくフォワードの人たちが気づきましたが、遅いです。
しかし、

「全員避けて！何か来る！」

攻撃をする寸前に、転生者が三人に呼びかけたので回避されました。

攻撃を読まれた！？完全な不意打ちだったはず！

あの転生者、今どうやって…。

どんどんと頭が冷えて、余分な感情が消える。

師匠たちの地獄の訓練のおかげで切り替えができるようになったのだ。

そうしないとあれは廃人になるくらい辛い。

だからこれくらいは容易くできる。

「フリード、様子を見るから。」

鉢巻きと銃使いの相手、五分で良い」

そのまま列車に飛び降りる。

すると、転生者の少女が私を見て驚愕する。
隙だらけだ。

「あ、アンタは…、って危ない!!」

チツ、またかわされた。

銃使いを無視して転生者に攻撃を続ける。

足払いから締め技、投げ技まで試すが全てかわした。
こいつは攻撃を読んでいるかのようにかわし続ける。
このままじゃ埒が明かない。

「アンナ、今援護するから!」

すると銃使いが乱入してきた。

しかしその動きはまだ拙い。ザコだ。

「エリオ駄目よ!」

転生者が声を上げるが、もう遅い。

槍など懐に入れば役に立たない。よほどの達人なら別だが。

「邪魔するなら殺すよ?」

『Boost Up・Strike Power』

教授が私にくれたブーストデバイス『ケリュケイオン』で自己ブーストを掛けた。

そしてそのまま胸に拳を叩き込む。

「がはっ」

そのまま槍使いを列車から突き落とした。
バリアジャケットがあるから死ぬことはないだろう。

「エリオ！」

「余所見する余裕があるの？」

転生者にも全力の突きを叩き込む。
すると今度は当たり、転生者はその場に蹲ってしまった。
バリアジャケットで相殺しきれないほどの威力を込めたためだ。
もう動けないだろう。手加減はしたから死にはしないが。

「そんなに心配なら仲良く落ちれば？」

そしてそのまま谷底へ蹴り落とす。
今日の目的はレリックだ。転生者の相手はこんなもので良いだろう。

『Boost Up・Acceleration』

加速ブーストをして残りの二人の元へ急ぐ。
どうやらフリードを相手に頑張っているようだ。

「スバル、さっきの子が来たわよ！」

銃使いが私に気づいた。
連携されると面倒だ。ならば、

「フリード」

それだけでフリードは理解した。

そのまま足でその車両を掴み、列車を谷に引きずり込む。

「そんな!？」

「なんて無茶なことを!」

二人は鉢巻きの移動系魔法『ウイングロード』に着地した。

予想どおりに。

「フリード、ブラストレイ」

フリードが上空から二人に向けてプレスを放つ。

鉢巻きが銃使いを庇ってバリアを張った。

今だ!

同じく鉢巻きのウイングロードに着地していた私は全速力で後ろに回りこむ。

「挟み撃ちにされた!？」

銃使いがこちらに気づくが鉢巻きはバリアの維持で手一杯だ。そして、この銃使い程度ならば一対一なら絶対負けない。

「レリックは貰うから」

銃使いからレリックを奪い取った。

そして、バリアを張っていた鉢巻きごと谷底に蹴り落とす。

そのせいでウイングロードが消えて私も落ちたが、落下の途中でフリードが拾ってくれた。

「止め、ブラストレイ」

またウイングロードに着地した二人を、今度こそ撃墜した。二人ともそのまま谷底に落ちていく。気絶したようだ。

「ふう、なんとかなったね、フリード」

周囲に敵がないのを確認して、ようやく落ち着く。

そして、戦闘態勢を解除しました。

「そうだ、教授に連絡しないと！」

上ではルナさんたちが隊長陣を抑えています。撤退しながら教授に連絡しました。

『そうか、わかった。』

ルナたちにも撤退させる。ご苦労だったな。

それで、どうだった？ 転生者は』

「え、あの子ですか？」

うーん、攻撃を避けるのは上手でしたよ。

でも、警戒する必要がないくらいのゴミでしたね。
本気を出せば二秒で挽き肉にできます」

レリックをちゃんと手に入れたし、ライアさんは褒めてくれるかな
あ？

それだけが心配です。

情け容赦無用少女キャラです（後書き）

まだまだ本気ではありません。

真の魔改造の結果すら出てません。

ところがギツチヨン！（前書き）

一方ルナたちは…。

ところがギツチョン！

Sidelna

おう、キャラは無双をしているようですね。

私とイデアは今、列車の上空で隊長陣の相手をしています。

イデアが高町さんとフェイトさんを、私がユーナさんを相手にしています。

「それにしても、やっぱり速いですね。」

最速で音速の三倍ほどで動けるらしいです。特典なしでも充分に速いですが。

イデアほどではないですが、反応できない速さというのは変わりありません。

「そう言うわりに簡単に防いでくれる……」

「当たり前ですよ。」

長年の勘があれば先読みくらいできます。」

事実、彼は攻撃の仕方やタイミングに癖があります。それさえわかれば、

「こんな風にカウンターもできます。」

加速して一瞬で背後に回った彼を鞘で殴り飛ばします。

「ぐっ、この「こ」で連続コンボ〜！」がはっ

それに彼は特典を使うと一定時間の間がないと連続で使用ができません。

つまり使用後すぐに攻撃を仕掛ければ簡単に墜ちます。

「それぞれそれぞれそれ〜！」

「ぐがががががががががッ」

鞘と剣の腹で殴り続けます。

ずっとなのタ〜ン！！

「止めの〜、氷華一閃！」

「ガアアアアアアッ」

バリアジャケットがズタズタになってしまっても容赦しない！
泣いて謝っても許さない！抵抗すらさせない！
それが外道クオリティです！！

ユーナさんはそのまま崖に叩きつけられてしまいました。
まあリミッター付きですしね〜。こんなものでしょうか？

『マスター、教授から通信です』

「繋いでください」

教授から連絡が来たということは、キャラが撤退を始めたということですね。

『ルナ、作戦終了だ。アイデアと一緒に撤退しろ』

「了解です。意外と早かったですね」

通信を終えて、アイデアに連絡をしました。

【アイデア、そろそろ撤退です。

振り切れますか？】

【…少し難しい上に問題があるわ】

【問題？】

【どうやらこの二人が私の魔法のタネに気づいたみたいなの】

…マジですか。

side out

sideアイデア

「いい加減に諦めなさいよ。しつこいわ」

「絶対に諦めないよ、友美ちゃん」

「そっだよ、あんなやつらの仲間になったのは理由があるからなんでしょ？」

さつきからこれの繰り返しだ。

何度叩き潰しても私を、『佐藤 友美』を取り戻そうとしてくる。そんなの出来っこないのに…。

「友美！」

『Plasma Smasher』

「うるさいわ、私はイデアⅡベルツよ！」

『Lightning Road』

フェイトが砲撃を放つが、私はそれを回避しつつ攻撃をしようとした。

今度こそフェイトを撃墜しようとユピテルを振り下ろす。

しかしその先にフェイトは居らず、全く見当違いの場所に私はいた。

しまった、辿る道をずらされた！

『Lightning Road』

隙を晒すまいと咄嗟に二人から距離を取る。

「…フェイトちゃん、今…」

「うん、確かに友美は攻撃をミスした」

二人にも不振がられてる。
マズイ、速攻で終わらせる！

『Lightning Road』

しかし、移動の瞬間にフェイトが魔法を使用した。

『Thunder Rage』

周囲に雷がばら撒かれ、再び移動に失敗した。
これは、しくじったか…？

【アイデア、そろそろ撤退です。
振り切れますか？】

もう撤退か。

しかしスパークムーヴのタネが割れそうな今、迂闊にそれで逃げるのは危険だ。

【わかりました。援護するのでその間に撤退してください。
対策はまた後ほど】

ルナが語尾を延ばさずに答えた。
これは相当に真剣だな。

「…そうか、友美がそんなに速く動ける理由がわかったよ。
答えはスバルのウイングロードと同系統の魔法だね？」

「…なんのことかしら？」

マズイ、完全にばれてる。

しかし攻撃はできない。魔力変換資質『雷電』を持つ彼女に警戒された時点でアウトだ。

「フェイトちゃん、どういうこと？」

「友美の魔法はウイングロードみたいな移動系魔法を一瞬だけ発動させて、その上を特別な魔法で高速移動しているんだ。そしてその移動系魔法は電気で構成されている。だから私の魔法の影響を受けただ」

…完全に正解だ。

私の『ライトニングロード』は電気の道を一瞬だけ構成する魔法だ。そして『スパークムーヴ』でその上を、文字通り雷速で移動する。何故スパークムーヴだけを使わないのかというと、速すぎて方向と移動距離を調節できないからだ。

だからライトニングロードでそれを設定する必要がある。

発生する反動は全てバリアジャケットで相殺するため大丈夫だが。

これはもうフェイトがいる前じゃ使えないわね…。

「タネがわかった以上、もう対策はできるよ。観念して投降して」

【ところがギッチョン！そうはいきませんねー！】

突然の広域念話で二人が動揺した瞬間、

『Ice Javelin』

氷の槍がフェイトを襲った。

「フェイトちゃん、危ない！」

咄嗟になのはが前に出て、バリアでフェイトを守るが、

それは悪手だ。

今のは何としても回避すべきだった。

ルナの『アイスジャベリン』はバリアに浸透し、強制的に氷に変換

した。

そしてそのままバリアを貫通して二人を凍り付けにする。

【アイデア！今のうちに撤退を！】

【ルナ、助かったわ】

『Lightning Road』

そのまま一気に現場から移動する。

危なかった、私一人だったら捕まっていたかもしれない。

「…教授に相談しないとね」

side out

あゝ、世の中上手くいかないな。

あ、みなさんこんにちは。レン＝ベルツです。

あの後、キャラは無事にレリックを持って帰ってきたのだが、アイデアの高速移動のタネがばれたらしい。

っていうか、ばれるだけなら良いんだよ。

どうせ雷速に反応できる人間なんていないしな。

最悪なのは対策を既に向こうが掴んでいることだ。

…これはアイデアが今後に参加する作戦を選ばないといけなくなったな。

最後の転生者の特典が不透明な今、油断せずに行かなければ。

ところがギツチヨン！（後書き）

ルナの転生者苛めはもはや趣味です。

遊ぼう？（前書き）

妹、現る！！

遊ぼう？

あゝ、そろそろホテル・アグスタかゝ。

あ、皆さんどうも。レン＝ベルツです。

ファーストアラートから時間も経って、そろそろあのホテルの事件が始まる頃だ。

でも行くの面倒だなゝ。

だって待ち伏せしてれば連中は簡単に事件解決だぜ？

面白くねゝなゝ。

「教授、ならばアリシアに行かせれば良いじゃないですかゝ」

「それじゃあアツサリし過ぎだろ？

なんかこう、アツと驚く怪盗みたいなことがしたい」

「怪盗ですかゝ」

というか、どうせルーテシアが勝手に盗んでくれるだろ。
ん？盗む？

「…ルナ、作戦を決めた。すぐに準備しろ」

s i d e ルナ

「で、これが作戦ですかゝ？」

現在、私たち全員（教授とリリスを除く）はホテル・アグスタにいます。

もちろん全員キチンとした格好です。

「っていつかよお、こんなに堂々としてて良いのか？

俺たち犯罪者だぜ？一応」

「理解不能」

「今回は高みの見物を決め込むらしいですよ。」

ですから、見つかったら引つ掻き回して帰って来いだそうです。」

「…つまり、見つかるの前提というわけね」

そう、盗むのはルーテシアさんに完全に任せてしまおうという作戦らしいです。

捕まりそうになったら救助するらしいですが。

「で、アリシアは良いとしてキャラはどうした？」

「二人は騎士ゼストに挨拶に行ってます。」

少し会ったら帰るらしいので心配しなくても良いですよ。」

「し、心配なんかしてねえよ！」

はいはい、ツンデレ乙です。

「ったく！話は変わるが、ルナ、どうしたんだお前の格好？」

「え、何か変ですか？」

軽くスーツを見回すが、異常はありません。
普通の黒いスーツです。

「変だな」

「変」

「そうね、変よ」

「ま、満場一致ですか？」

何か見落としがあつたでしょうか？

「ドレスが用意されていたろ？あれを着れば「殺しますよ？」…
あ、悪い」

「あれの方が似合」「アルテミスの鎧にしますよ？」…なんでもない」

「正直スーツは違和感が「カキ氷にしますよ？」…似合ってるかも
ね」

今ライアたちが何か言いましたが言い切る前に止めます。

確かに女顔というのは認めますが、女装はしません。

以前それを私に強要した金髪ツインテールがいましたが、彼女には
生まれてきたことを後悔するほどの地獄を見せました。

もう私にはその話を一切しません。

「皆、遅くなってゴメン！」

「遅くなりました〜！」

すると、アリシアとキャロが来ました。
もちろんドレスです。結構似合ってます。

「ライアさん！どうですか、このドレス？」

「どうって…」

【いいからここは褒めなさい！

女性は服装を褒められると喜ぶものよ！】

「…似合ってると思うぞ？見違えた」

「本当ですか…！」

咄嗟にアイデアが助け舟を出しました。
流石です。

「ね〜ね〜！私はどう？」

「あ？馬子にも衣装ってやつだな。褒めてやっても良いぞ、ドレスを」

「そうですね、すばらしいドレスです」

「高級そう」

「私を褒めてよ…！」

そんな感じでふざけていると、会場が少し騒がしくなりました。

「…ライア」

「ああ、来てるな。ガジェットどもが」

「どうするの？」

どうしようか。

「そつだ！ねーねールナ！遊びに行っても良い？」

突然アリシアがこんなことを言い出しました。

「遊びにですか？」

「うん！前に殺した航空部隊の局員の妹が今日はいるんだ！だから軽く遊んであげようかなーって」

「…ああ、ティアナ＝ランスターですか」

そういえば前にそんなことをしていましたねー。
少し面白そうです。

「許可します。」

捕まらないように気をつけてくださいねー」

「アイアイサー！」

side out

side アリシア

フフフフン、どうやって遊ぼうかな。

頭の中はそれでいっぱいだ。

どうやら一緒に転生者が防衛についてるらしいけど、そんなのどうでもいい。

早く遊びたいな。

「お！見つけた！」

ホテルから少し出た所に彼女たちはいた。

近くには河内とかいう転生者もいる。ミスショットをなくさせるつもりかな。

ま、どうでもいいけどね。

ドレスのまま彼女に近づく。

「はるかどってますか？」

「ッ誰！？フェイト隊長！？」

む、私をあんな偽者と間違えるなんて。失礼だぞ！

「違うよー！私はアリシア！あんなのと一緒にしないで！」

「…そのアリシアさんが私に何の用？」

さっそく警戒されちゃった。

たぶん念話で転生者とかを呼んでるんだろうな。

「ティアナ、無事か！？」

「ティア、大丈夫！？」

すると、すぐに転生者と鉢巻きがやってきた。
なんだか面倒なことに。

「うーん、できれば一対一で話たかったんだよね。
お兄さんのこと」

するとティアナちゃんの表情が変わった。
釣れた釣れたー！

「アンタ、何を知ってるの！！」

「えー、一対一で話したいんだけどな。
どうしようかな」

目に見えて彼女がイライラするのがわかる。
楽しいな。

「ティアナ、聞くな！こいつの本分は「お兄さんの死の真相はー！」
ツクー！」

転生者が余計なことを言う前に終わらせないと。
もう少し焦らしたかったんだけどな。

「私の幻術で廃人になるまで痛めつけて、その後デバイスで一刀両断！」

口キを展開してみせて、幻術でティードゥランスターの廃人化した姿を出す。

実演した方がわかりやすいだろうしね！

「こんな風にね！」

そして幻影を両断する。

真つ二つになった幻影は、少し間をおいて消滅した。

その光景に、誰も言葉を出せない。

しかし、ティアナちゃんの目に涙が溜まっていく。

「アンタが、アンタが兄さんを！」

デバイスを向けて射撃体勢になった。

ちよ、殺傷設定だよ、それ！

「ティアナ、よせ！」

咄嗟に転生者が止めるが遅い。

「かわいそう。でも当たってあげない！」

砲撃を撃とうとする彼女に接近し、ロキを振り上げた。

「ティア！」

『Protection』

しかし横から突撃してきた鉢巻きに防がれる。

あゝもう、邪魔だなゝ！

【アリシア、撤退ですゝ。連中に見つかりましたゝ】

【こっちはちよつとピンチだよゝ！
敵に囲まれちゃったゝ】

気がつくと周囲にはあの融合騎やチビハンマーも来ている。
囲まれたゝ。

問題ないけどね！

「絶対に許さない！」

ティアナちゃんが誘導弾を出した。その数16発。
頑張るなゝ。

「クロスファイア！」

これは避けきれないだろうなゝ。

「シュート！」

そしてクロスファイアは発射され、全発が命中した。

鉢巻きにだけどね！！

鉢巻きが悲鳴を上げて吹き飛ぶ。

痛そうだな。咄嗟に防御はしていたみたいけど。

その間に私はもう撤退を始めている。

もうホテルがグングン小さくなっていく。

それにしても馬鹿だな。味方を撃つなんて。

途中から、私と鉢巻きが入れ替わってるのに誰も気づかなかったみたいだね。

【ミスショットはなくなっただし、感謝してくれてもいいよ？】

そう言って私は去った。

遊ぼう？（後書き）

そろそろヴィヴィオが出ますね。

どうしようかな？。

転生者狩り（前書き）

ある意味、これからが本番です。

転生者狩り

空気が重い……。プレッシャーで圧殺されそうだ。

あ、皆さんこんにちは。レン＝ベルツです。

現在、方舟の空気はとても殺伐としています。
視線が火花とかそんなレベルじゃない。

目が合ったら、殺される……。そんな雰囲気だ。

何故こんなことになったかという、話は数日前に遡る。
きっかけはキャロの何気ない一言だった。

「師匠たちの中で一番強いので誰なんですか？」

そんな感じだった。

きっと彼女は純粹に疑問に思っただけなのだろう。
しかし、それはこの方舟においてはタブーの一つだ。

「そんなの俺に決まってるだろ？」

速射も連射も砲撃も狙撃もできる俺より強いやつなんかいるかよ」

「聞き捨てならない。最強は私。

アウトレンジからの広域殲滅魔法に勝てるやつなんていない」

「そんな距離、私なら一瞬で詰められるわ。

一撃必殺の攻撃力と雷のスピードを持つ私こそが最強よ」

「アハハ、そんなの当たらなきゃ意味ないって」。

幻術で精神攻撃もできる私が最強だよ！クロスレンジもできるしね！」

「いやですね。最強は私ですよ？」
バリア破壊からクロスレンジ、砲撃、広域殲滅まで何でもできますから」

「ケツ、器用貧乏が」

「射撃馬鹿に言われたくはありませんね」

こんな感じでどんどん空気が悪化していった。
飯の時も訓練の時も、拳句に翌日まで…。

ど、どうすれば…。

「キャロ、お前は思うんだよ？」

誰が最強か正直に言ってみろ。というか言え」

そしてとうとうキャロにまで聞くようになった。
頼む、火に油を注ぐなよ。

「うーん、そうですね。」

皆さんは同じくらい強いと思いますよ？」

それを聞いてホッとした。

キャロ、お前はちゃんと空気を読める子だったな。

「まあ、万全の体勢なら私が最強だと思いますけどね」

「キョクー！」

「「「「あ？」「」「」」

訂正、火にガソリンを注いでくれました。
空気読めこのガキ！！

その後、数日間この空気は続いた。そう、数日だ。
そしてある日、俺がとうとう我慢できなくなり最強の座の決定戦を
行うことになったのだ。

「それで、どうやって決めるんですか」

「ルールは簡単だ。数日後、廃棄都市で事件があるな？
あれで転生者を最も早く一人殺した者を最強とする。
ただし、アンナ＝サンシャインを狙って良いのはキャラだけだ。
これはハンデだからな」

キャラは不満そうだが、そうしないと彼女が集中攻撃されるのは目
に見えてる。

地下通路ごと圧殺したりとか地表ごと吹き飛ばすとかで。

そういうわけで、数日後の事件で転生者の誰かが死ぬことになる。
最近、邪魔なだけで全然面白くないからなあ、あいつら。

一人くらい減っても良いだろ。

俺的には河内辺りが死ぬんじゃないかな〜と思っているがな。

S i d e ル ナ

というわけで、現在は廃棄都市の上空です。

既にメンバーは散開していて、各人が思い思いに動いています。

「お、いました〜。

転生者が一人、二人…、あ、三人目もいます〜」

今回は別部隊のナカジマさんもいらっしやいますね〜。

まあ、私の狙いは一人ですが。

おそらく狙いの振り分けは、ライアとアリスが弱った転生者を掠め取る横取り派。

私は河内派、アイデアがユーナ派、アリシアは…、わかりませんね〜。つまり、一撃で仕留めないと獲物を持つていかれる可能性があります。

「というわけで、一撃必殺を狙っていきましようか〜！」

S i l e n t O w l

もちろん矢も爆発も殺傷設定ですよ？

「さっそくですが、死んでくださ〜い！」

S h o o t

無音で飛来する矢には誰も反応できない…、

はずでしたが。

どうやら偶然誰かが見つけたらしく、彼は咄嗟に振り返って避けてしまいました。

「ありやりやゝ、残念！はずれですかゝ」

仕方ないです。

ここは地道に叩くしかないですかゝ。

「そうと決まれば行動あるのみですゝ！」

河内さんに急接近し、剣形態のアルテミスで斬りつけます。

「クソツ、やっぱり来たか！」

今度は何が目的だよ、テメエらは！」

「今回の目的はあなたたちですよゝ。

いい加減つまらないので、そろそろ死んでくださいゝ。

木島さんみたいにねゝ」

「テメエ！」

むむむ、ここ数年でまた腕を上げましたね。

もう充分一流の域です。これはミスでしたね。

これじゃあクロスレンジで瞬殺！とかは難しいかも…。

罅迫り合いをしながら考え中です。

「まあ難しいだけでできないことはありませんけどね」

『Freeze』

すると突然アルテミスの刀身が凍りつき、河内さんのデバイスとくっ付けました。

「なに!？」

「邪魔です」!

そのまま彼の腹を蹴って、近くのビルに叩きつけます。もちろん剣はくっ付いたままで私の手元にあります。

「剣がない剣士なんて存在価値がないです」。
サクツとあの世に送ってあげますからね」

『Ice Dagger』

周囲に氷のダガーを三十本ほど作ります。
それをそのまま発射、ビルに直撃しました。

周囲に彼の味方はいません。

ユーナさんはアイデアと、原作キャラはガジェットたちと戦っています。

ナカジマさんは…、どこに行ったんでしょう？

「まあ、どうでもいいですか」

弱つてない以上ライアが狙っても回避されるでしょう。

私の魔法はそれこそ一撃で殺せる威力のものが満載ですからね。

「はい、死体一丁上がりです！」

『Ice Detonation』

これで最強の座はいただきました！

sideイデア

「友美、やめろ！」

「悪いけどやめないわ」

私とユーナは今、高速で衝突しては離れてを繰り返していた。時々ライアが狙撃をしてきて凄く邪魔だけど…。

だが、速度も一撃の威力も圧倒的に私が上だ。そう長くはもたないだろう。

「クッ、俺たちは仲間だっただろう！」

それなのにこんなことをして、なんとも思わないのか！！」

「あつ、隙ありよ」

「グハッ」

戦闘中に敵と話すなんて何考えてるの？

特に高速戦闘中は舌を噛むわよ？

すると、亮がビルに叩きつけられるのが見えた。
そして大量のアイスダガーも。

「やばっ、持ってかれる！」

『Lightning Road』

速攻で勝負を決める！

一瞬で距離を詰めた私はユーナにユピテルを振り上げ、

「ま、元仲間のよしみで一撃で殺してあげるわ」

『Load Cartridge』

そのまま躊躇なく振り下ろした。全力で。

「紫電一閃！！」

最強はもらったわ！

side out

side アリシア

「うえっ、全然いないよっ」

私は今、下水道で転生者を探しています！

あ、チビツ子じゃないよ？

あのホクト＝ナカジマっていう転生者が地下に潜るのを見ちゃったんだよね。

つまり、彼は私が独り占め！…なんだけど。

「…どこにもいないね」

『そうですね』

見失っちゃったんだよね。

っていうかローラーとか卑怯でしょ、こついう場所では！
スイスイ進んでいくし！

「はあ、どうしょ」

『地上に戻ってはいかがですか？』

「それは無理。たぶんもうルナとかに持ってかれてるよ。
割り込むのは相当の覚悟と勇気がいるもん」

そうやって進んでいると、微かに聞こえた。

「これは、爆発音？」

『近いですね』

これはひょっとして見つけちゃった？

「ラッキー！」

そのままその音のする方向へ、全速全身DA！

「見つけ！ホクト！ナカジマ！」

そこにはガジェットの残骸と、ホクト！ナカジマがいた。
横に知らない女もいるけど。

「フエイトさん！？」

「違う！あれは例の集団の別人だ！
ギンガ、先に行け！お前が相手にできるレベルじゃない！」

「でも兄さん！…あれ？」

二人が言い争っている間に幻術を使い姿を消した。
うんうん、今日も絶好調！

そのまま突撃～！

そして、足元の水溜りを踏んでしまった。

……………あ。

「そこかあああああ！」

「危なああああああい！？」

咄嗟に避けると打撃を食らった地面が陥没し、拳がめり込んだ。

……え、死ぬよね、これ？

今の間にもう彼女は行ってしまった。
気をつけてとか言ってたけど…。

いやいや、気をつけなきゃいけないのは私だよ！？
死ぬって、こんなの食らったら！！あ、幻術解けてる…。

「行くぞおおお！」

「キャアアアアアア！」

咄嗟に口キで受け止めるけど、そのまま数メートル吹っ飛ばされちゃった。

『…マスター、痛いです』

「私だって手が痛いよ！」

凄くビリビリする。

「終わりだあああ！」

今度は蹴りが私を襲うが、

「いつもそうやって！」

『Load Cartridge』

ロキを構えて突撃する。

「やれると思うなあああ！」

しかし相手はクロスレンジの達人だった。

すぐに角度を修正した彼はそのまま私に蹴りを放つ。

しかし、私の姿が掻き消えた。

その後ろにはロキを振りかぶった私がいる。

「ぎゅんねん、幻術でした！」

いくら達人でも蹴りを振り切れれば隙だらけだ。

二流の私でも充分殺せるくらいに。

わざわざカートリッジまで使って突撃するふりをしたんだから引つかかってもらわないと困るんだよね。

「しまった！」

「やった〜！私が最強だ〜！！」

side out

side キャロ

「うん、なかなか見つからないね」

「…うん」

おまけに暗いし少し臭い。

あ、皆さん、下水道から失礼します。キャロルルシエです。

現在、私はルーちゃんたちと合流して、レリックを探しつつ転生者を探しています。

ああ、早くしないと先を越されちゃいます。

「…見つけた」

「え、どこ!？」

「すぐ近く。ガリユーが向かってる」

急いでそこまで行ってみると、フォワード陣と知らない女性がいました。

って、もう回収されてる!？ガリユーさんは女の人に抑えられています。

「先手必勝！フリード、ブラストフレア！」

「ダメ、レリックにも当たるよ？」

おおっと、危ない危ない、ここを爆心地にするところでした。

「ならばクロスレンジです！」

『Boost Up・Acceleration』

加速ブーストをして、一気にレリックを持っている転生者に接近します。

しかし、途中で槍使いの男の子に邪魔されました。

「もう！邪魔するなら殺すって前に言ったよね？」

「クッ、レリックは渡さない！」

「エリオ、退いて！」

エリオ君？が飛び退き、その隙に銃使いの人が攻撃してきました。甘いです！

「ケリユケイオン！」

『Boost Up・Strike Power』

ブーストを重ね掛けし、魔力弾を殴り飛ばします。

【キャロ、目と耳を塞いで】

すると突然ルーちゃんから念話が。

急いでフリードを呼び寄せ、言われたとおりにします。

「スターレンゲホイル！」

周囲に光と爆音が満ちました。

これは好機です！

「我が求めるは 戒める物 捕らえる物 言の葉に答えよ 鋼鉄の縛鎖」

私が何をするのか理解したガリユーさんがルーちゃんの所まで下がりました。

流石はガリユーさん！そこに痺れる！憧れはしませんが！
あ、フリードは見習ってね？

「錬鉄召喚 アルケミックチェーン！」

「これは、無機物操作！？」

これで全員を一網打尽にしました。

「ケリユケイオン、ブースト全開！」

『Yes , my master』

転生者に向かって一直線！

右手に氷の魔力変換を、左手に電気の魔力変換を。

ルナさんの『氷華一閃』とアイデアさんの『紫電一閃』の合わせ技。
これが私の必殺技です！ただの打撃ではありませんよ！

【それじゃあ死んでください、転生者さん】

【ッ、アンタまさか！や、やめて…！】

【だが断る!!】

そして両手を同時に彼女に突き出した。

「氷雷双撃!」

よし、ハンデ有りとはいえこれで私が最強です!

s i d e o u t

s i d e ????

うーん、結局ワンサイドゲームになっちゃったな。
これじゃあ一方的すぎて面白くないな。

よし、彼らにも最後のチャンスを与えるか!

そうすれば今後も面白くなるだろうしね！
そうと決まればさっそくやろうかな。

「転生者の皆、聞こえる？神だよ」

転生者狩り（後書き）

はい、ここで神が介入！

余計なことすんなよおおお！（前書き）

困った時の神頼み！

余計なことすんなよおおお！

な、なんだこれは…。

神だと？何故あいつが介入してくる！？

あ、どもレン＝ベルツです挨拶終了だ緊急なんだよ！！

なんであいつが介入してんだよ！？

現在、周囲の時間が止まっているかのような状態だ。

リリースは静止しているし、モニターの中の連中も動いていない。

『はいはい、それでは転生者の諸君にラストチャ～ンス！

一つだけ特典を追加するか、今の特典の強化をさせてあげよう！
どれくらい強くするかは僕が決めるけどね～。

あと、新特典なら前とルールは同じだよ～。

少なくとも今の状況なら絶対なんとかなるのを僕が選びます！』

はあ！？余計なことすんなよ！！

『なら俺は零落白夜を強化してくれ！』

『俺もだ。加速を強化してくれ』

『俺は新特典だ！』

『私も新特典よ。超直感だけじゃ限界があるわ』

あ、シヨタコン転生者の特典は超直感なんだ。

キャラに言つとこつ。

『それで、君は?』

え、俺もか?

「つていうかこれって転生者ども全員と繋がってるのか?」

『そうだよ。何かメッセージでもあるの?』

「まあな。ん、んん!

聞こえるか? 転生者ども。

俺が最後にして最初の転生者、真の黒幕だ」

『なに!?!』

『あのライアとかいうのじゃないのか!?!』

『お前のせいで母さんは…!』

『じゃあキャラのこともアンタが…』

「ええい、喧しい! 話してるのは俺だ! 黙れ!

なんだつたつけ? そう!

今までは殺さない方が面白そうだったが、それもこれで終わりだ。
これからはメンドそうなだけだからな。全員殺す。

もう容赦はしない。せいぜい生き足掻けよ?

それから俺を楽しませたら存分に死ね!

そして神!」

『なんだい？』

「あのなあ、こういうことされると困るんだよ。
せめて最初に言ってくれ」

『いやあ、それは悪かったね。』

もうこんなことはしないよ。なんせ、ラストチャンスだからね。
それで、君はどうするんだい？』

そうだった。どうするかな。

ま、答えは最初から決まっているがな。

「……いらん」

『は？』

「だからいらないって言ったんだよ。俺は現状で満足しているんだ。それに、強化だか新特典だかを土壇場で手に入れるのは正義のやつらだ。」

俺は悪だぜ？やりたいことは自分でなんとかする。

それにな、どれだけ強くなるうが俺の人造魔導師たちには勝てねえよ。

いや、やれるならやってみる！転生者ども！」

言い切ってやったぜ！

そんな正義の味方みたいな展開、虫唾が走る！

外道魂を舐めるな！！

『上等だぜ。絶対にお前を捕まえてやる!』

『大和の仇もそれで取る』

『母さんの仇もだ!』

『エリオルトの邪魔はさせないわ!』

一人だけ悪っぽいやつがいたが…。
別に良いか、どうでも。

『はい、それじゃあラストチャンスは終了!』
皆、頑張つてね!』

そして時が動き出す。

「リリース!今すぐに全員と通信を繋げろ!」

「え、え?ど、どうしたんですか?」

「いいから繋げろ!緊急事態だ!」

s i d e ルナ

爆発!と思った瞬間にダガーの魔力が霧散しました。
あれ?」

「これは…、AMF?ドクターの仕業ですか?」

すると、ビルの中から砲撃が発射されました。

「って砲撃！？」

咄嗟に回避しましたが、その間に彼が接近してきて剣を取り返されました。

しかし、今の砲撃は…。

「カリバーン、砲撃形態だ！」

『Cannon mode』

砲撃ができるなんて聞いていないですよ。

「食らえ！」

『Silver Cannon』

今度は余裕を持って避けました。

やっぱり遠距離攻撃は素人ですね。

まるで突然砲撃ができるようになったような…。

『全員、聞こえるか？』

すると教授から通信が来ました。

かなり焦った様子です。これは相当ヤバイことですね。

『転生者どもが突然強くなったな？』

それは今、神が世界に介入して連中を強化したせいだ』

か、神様ですか！？

予想の遙か斜め上の原因です！

『河内とテストロッサ（兄）は特典の強化だ。
ナカジマとサンシャインは新能力を手に入れた。
気をつける。何かあればすぐに撤退するんだ。』

それと、もう殺しても構わないからな』

それで通信は切れました。

音声のみだったので、転生者には聞かれていません。

というか、

「なんだか面倒なことになりましたね〜」

side out

side イデア

「ちょっと嘘でしょ？」

通信が終わる前に戦闘は始まっていた。

紫電一閃はユーナの突然の加速で回避された。

そして、今もそのまま加速したままだ。

加速を制御した上で反応もできてる？

どんなチートよ、それ…！

バリアジャケットの限界が来ればちゃんと減速はしている。
崩壊を起こさない程度までだが。それでも充分速い。

これは相性が悪いわね。

【ライア、聞こえる？

私はギブアップよ。撤退するわ。ユーナはあげるから援護して。
どうせ今でも見えてるんでしょ、ユーナが】

【当たり前だ。俺に見えねえ魔法はねえ。

まあOKだ、任せろ】

これで逃げることはできるだろう。

あとはタイミングだ。

「もう諦めて投降しろ。お前をこれ以上攻撃したくない。
俺の方が強いというのはもうわかってるだろう」

「はっ、神に助けてもらったのに調子にのらないでよね」

「やはりお前は…、ガッ!？」

ライアの弾丸がユーナを撃ち抜いた。

馬鹿ね、さっさと攻撃すれば良かったのよ。

それにしても相変わらず凄い精度ね。

現に今のは十数キロ離れた場所からの狙撃よ。

「じゃ、私は行くわね」

「クソ、待てっ！グガッ」

今度は別の方向からの狙撃だ。
たぶん転送魔法の応用だろう。これで死角はない。

ライアの稀少技能『プロヴィデンス・ヴィジョン』、通称『目』は
最強の探知能力だ。

半径十数キロの魔力反応を完全に探知する。

この前は戦闘機人のエネルギーもわかると言っていた。
そしてそれは死角がない。

つまり後ろだって見えるし、障害物だってすり抜けて見える。
まあ、魔力しか見えないらしいけど。

「くっ、狙撃か！！」

『Acceleration』

加速で回避しようとしても無駄だ。

あの目の使用中は視覚と思考速度が極端に上がる。

私のスパームーヴを完全に目で追ってたこともある。

つまりあの狙撃法と目があれば、

「グガガガガガガガガガガガガ」

相手はああなる。

狙撃を四方八方から連射で食らってボコボコになるユーナがいた。

これは最強はライアで決まりかな。

side out

side アリシア

なんか理不尽だ。

私たちも相当ズルイ強さだとは思うけど、突然目覚めた力で〜とか、心を一つに〜とかでいきなり強くなるのは反則だと思う。つまり何が言いたいのかというと、

「ぶっ殺してあげるよ、転生者」

「やれるものならやってみろ！

このニュータイプの力の前では幻術なんか意味はない！」

あの時、防御魔法で攻撃を防いだ時から明らかに反応速度が上がった。

そして幻術にも反応するようになってきた。

シルエットにも騙されないし、姿を消しても見抜かれる。

ステージも悪い。相性も悪い。最悪尽くしだ。

「でも負けないよ！」

とは言っても不利なのは変わらないしな〜。

私は動くのをやめた。

「…どうした？諦めて投降する気になったか？」

それすら無視して心を落ち着かせる。
大丈夫、行ける！

「…ロキ、全力で行くよ」

『Yes , my master』

魔力も体力もまだある、ならば！

「最強の幻術『タルタロス』の出番だよ！」

魔方陣が足元に浮き出る。

もう発動は始まっているんだから！

「させるかぁ！」

転生者が突っ込んできた。

カートリッジを何発も炸裂させている。

…絶対殴り殺す気だね、これ？

「でも、ざんねん！時間切れ」

そして転生者が倒れた。受身も取らずに。
そしてそのまま動かない。

ロキで突いても反応すらない。当然だよね！

『相変わらず恐ろしい魔法ですね。

管理局に見つかったら禁術指定は確定するようなものですよ?』

「良いじゃん、勝てたんだし。」

それより、一番に殺したんだから私が最強ってことだね?」

そう、この転生者はもう死んでいる。

さつき強制的に心臓を止めた。血流も止めた。神経伝達も止めた。

これが『タルタロス』の効果だよ！敵の体を自由に動かすんだ！
本人の意思に関係なくね！

まあ少しの時間しか発動できないし、凄い集中力があるんだ。
魔力も凄く使うし。

これで彼の心臓を止めた。本人が動かせるかは関係ないよ。
相手の肉を、神経を、機能を、全てを制御下におくからね。

『もはや幻術の域を超えていますね』

「それがアリシアクオリティ！

っていうか、一応これも幻術だよ。」

相手に死の幻を見せてるんだから。解けはしないけどね」

あゝ、疲れた。もう動けない。

後でキヤロに迎えにきてもらおうかな。

side out

side キャロ

気がつくと思つ飛ばされていました。

ガリユーさんが受け止めてくれなければもつと吹き飛んでいました。

「えゝと、今なにが起きたの？ルーちゃんは見てた？」

「あの子が短距離転移で避けた後、デバイスで殴り飛ばした」

…ええゝ。そんな能力があつたんですかゝ？

すると教授から通信が来ました。

それで状況を理解します。

まったく、そんなにチートが好きですか、あなたたちは！

「ウラヌス！」

『Scythe Form』

そして魔力刃でアルケミックチェーンを切り裂いていきました。

つていうかその杖どこかで見たと思ったら、彼女の隊の隊長のによく似てますね。

二号機か何かでしょうか？

彼女の新能力はおそらく短距離瞬間移動ショートジャンプですね。

これは面倒です。

超直感で危険を感知した途端に短距離瞬間移動で回避されます。

「ルーちゃん、退こう。場所が悪いし敵が有利すぎるよ」

クロスレンジで私に勝ち目はなくなりました。

ガリューさんにもです。

「おいおい、アタシがいるんだぜ！

こんな連中、イチコロだ！」

そう言いながらアギトさんが火炎弾を放ちます。

爆煙でよく見えませんが、おそらく避けられました。

ガリューさんが突っ込んでいきましたが、そろそろ他の心配要素ができそうで怖いです。

っていうかアギトさん、その攻撃やめてください！

全然敵が見えないじゃないですか！

「ッ！ルールー、キャロ、なんか近づいてきてる！

魔力反応、デケェ！」

「増援ですか！」

すると突然、天井が崩落しました。増援みたいですね。

というより、局員が公共施設を壊して良いんですか！？

「捕らえよ 凍てつく足枷！」

瓦礫の中から出てきた小さい子が詠唱を始めました。

この魔法、確か昔にルナさんが使っていました！

「フリーレンフェッセルン！」

あー！ルーちゃんとアギトさんが凍り付けに！

そしてガリユーさんも紅い甲冑の子にデバイスで殴り飛ばされました。

これは孤立無援になりましたね。

仕方ないですね、撤退します。

ルーちゃんたちは脱出したようなので、もう別に良いでしょう。

はあ、それにしても、最強の座は先送りですね。

そう思いながら、私はその場からコッソリと転送魔法で地上に移動しました。

あ、アリシアさんを拾ってくるの忘れた。

余計なことすんなよおおお！（後書き）

外道は神のチャンスには負けません！！

そして最強はアリシアに決定！

人物設定 s t s (前書き)

人物設定です。

人物設定 s t s

教授サイド

レン＝ベルツ

性別 男

年齢 プログラム体のため歳をとらない。

一応、二十代中盤くらいに設定している。
その気になれば変更可。

特典 技術チート

魔力をそこそこ

古代ベルカに転生

他の転生者を呼ぶ

魔力 A A A

魔力光 黒

魔導師ランク 総合A A A +

デバイス 魔導書型デバイス『黒天の書』

稀少技能 なし

容姿 伸ばした金髪を後ろで結んで下ろしていて眼鏡をかけている。

常に白衣を着ている（科学者っぽいから）

擬人化クルル？

紹介 古代ベルカに転生した元高校生の日本人。

第二の人生を楽しむために、あえて主人公たちと敵対することを選ぶ。

インドア派のモヤシに思われがちだが、激動の戦乱時代を生きぬいてきたため

意外と強い。

デバイスに自分の全データがあるため、リンカーコアを破

壊されるか『黒天の

書』を破壊されないかぎり死なない。
普段は『教授』と呼ばれている。

ルナ＝ベルツ

性別 男

年齢 19歳

魔力 SSランク

魔力光 白

魔導師ランク 空戦SS 陸戦S+

デバイス 剣型デバイス『アルテミス』

BJ 白いロングコートとマフラーと手袋

稀少技能 魔力変換資質『氷結』

容姿 透けるような白い肌に深い青色の瞳、腰まで伸びた銀髪。

白い服を好む。

紹介 主人公の秘書兼助手兼方舟の最終兵器。

主人公が対転生者に生み出した人造魔導師の一号機。

本来は二号機以降を製作する時の助手にしようと、実験目的で造られた。

しかし、想像以上の強さと容姿になったため仕事を兼任することに…。

主人公を敬愛している。

アリス＝ベルツ

性別 女

年齢 19歳

魔力 SSランク

魔力光 黒

魔導師ランク 総合SS

デバイス 魔導書型デバイス『レメゲトン』

BJ ゴスロリ（水銀○みたいな感じ）

稀少技能 聖王の鎧

容姿 肩まで伸ばした黒髪と紅い瞳。いつも眠そう。

ゴスロリが基本的な服装。

紹介 対転生者用の人造魔導師の二号機。

三号機の『ライア』と同時進行で造られたうえ同じ遺伝子から造られたため、『ライア』とは双子。

普段は寝てすごしている。

わかりにくいですが、主人公の外道のことだけは尊敬している。

ライアⅡベルツ

性別 男

年齢 19歳

魔力 S-

魔力光 赤

魔導師ランク 空戦SS 陸戦S-

デバイス 銃型デバイス『ベロボーグ』

BJ ルナの黒バージョン（マフラーはなし）

稀少技能 プロヴィデンス・ヴィジョン

容姿 黒髪に金色のツリ目。

瞳の色以外は『アリア』と同じ。

実は主人公の服装をリスペクトしている。

紹介 対転生者用の人造魔導師の三号機。

『アリス』とは双子。

言葉にはしないが、『ルナ』と同じくらい主人公をしたっている。

ツンツンツンツンツンデレくらいツンの要素が強い。

イデアⅡベルツ

性別 女

年齢 19歳

魔力 S+

魔力光 銀

魔導師ランク 空戦SS

デバイス 斧型デバイス『ユピテル』

BJ ごつくて黒い鎧

稀少技能 魔力変換資質『雷電』

容姿 腰まで伸ばした黒髪をポニーテールにしている。

瞳は紫色。

これは潜入用の変装で、地毛はプラチナブロンド。

紹介 対転生者用の人造魔導師の四号機。

海鳴に潜入していた。

転生者『佐藤 友美』として転生者たちを見張る。

しかし、闇の書の暴走を機に転生者たちを裏切る。

アリシアⅡテストロッサ

性別 女

年齢 15歳

魔力 S

魔力光 金

魔導師ランク S+

デバイス 鎌型デバイス『ロキ』

BJ 無印のフェイトの白バージョン

稀少技能 幻術の超特化

容姿 昔のまま

紹介 対転生者用の人造魔導師の五号機。

教授の技術によって蘇生した。

リリス

性別 女

魔力 SSS（測定不能）

魔力光 黒

魔導師ランク AA+

容姿 黒髪のリインフォース？

目の色は紺色。

紹介 夜天の書の防御プログラム。

教授が改造したため、現在は融合騎。

一応、メンバー全員と融合可能。

かなり気が弱い。

キャロルルルシエ

性別 女

年齢 10歳

魔力 SSS

魔力光 桃色

魔導師ランク 総合S

デバイス ブーストデバイス『ケリュケイオン』

BJ 原作より黒っぽい

容姿 原作と同じ

紹介 ライアが拾ってきた。

教授たちの魔改造により前衛、後衛の両方ができる万能型に…。

レリックウエポンだがレリックがリンカーコアと完全に融合している。

もう竜の制御は完璧。実はフリードも成長している。
気配に敏感で背後に立たれると第六感並に超反応する。

転生者サイド

河内 亮

性別 男

年齢 19歳

魔力 AAAA+

魔力光 白

魔導師ランク 空戦AAA

デバイス 剣型デバイス『カリバーン』

BJ 白い甲冑

稀少技能 零落白夜

要は剣の形のAMF。

しかし密度と濃度が段違いなため、普通の魔法では勝てない。

燃費が超悪い。

神の力で白式の第二形態の能力を手に入れた。

容姿 某ライトノベルの『織○一夏』

紹介 転生者その一。

大和の仇を討とうと、自分から原作ブレイクをして教授たちを誘い出そうと考え

ていた。しかしユーナに諭され思いとどまる。

現在は六課で教授たちと戦う。

木島 大和

性別 男

享年 9歳

魔力 A A A -

魔力光 緑

魔導師ランク 空戦 A A A

デバイス 剣型デバイス『グラム』

稀少技能 S E E D

結局、一度も使われずに終わったレアスキル。

空間把握と反応速度が凄まじくなる。

容姿 某アニメの『キ○〃ヤマト』

紹介 転生者その二。

原作ブレイク賛成派だった。

別に疚しい理由ではなく、なのはたちをもっと幸せにした
いという正義感から。

ルナの自爆に巻き込まれ死亡。

ユーナ〃テストロッサ

性別 男

年齢 19歳

魔力 AAA

魔力光 黄

魔導師ランク 空戦AAA

デバイス 斧槍型デバイス『グラディウス』

BJ フェイトのやつのスカートじゃないバージョン

稀少技能 加速

音の三倍近くまで速く加速できる。

しかし、その速度は自分で反応できないうえに、細かい調節ができない。

おまけに急停止と急加速は反動が強すぎて、バリアジャケットがないと自分

分にダメージがくるというポンコツ具合。

一回一回の移動でバリアジャケットにダメージが行

くため、再生されるま

では加速できない。

しかし、神の力で完全制御が可能に。

容姿 髪を肩までしか伸ばしていないフェイト

紹介 転生者その三。

亮の親友。

大和やホクトの仇をとろうと日々、精進を重ねる。

ホクトⅡナカジマ

性別 性別

享年 19歳

魔力 S+

魔力光 薄い青

魔導師ランク 陸戦AAA+

デバイス ギアナツクル

稀少技能 ニュータイプ

容姿 スバルの男版。

髪の色はギンガより少し薄い。

紹介 転生者その四。

戦闘機人ではなく、クイントⅡナカジマの実子。

地上のエース。

ゼスト隊に所属していた。

アリシアに敗れ死亡。

アンナⅡサンシャイン

性別 女

年齢 10歳

魔力 A A A +

魔力光 濃い紫

魔導師ランク 空戦 B 陸戦 B

デバイス バルディッシュ二号機『ウラヌス』

B J エリオのやつのスカートバージョン

稀少技能 超直感

勘が鋭くなり、半ば危険に関しては未来予知のようになる。

ショートジャンプ
短距離瞬間移動

短距離ならば空間移動ができる。

容姿 藍色の髪をストレートに伸ばしている。

瞳は青色。

紹介 エリオが目当てで転生したシヨタコン。

彼が無事なら他がどうなっても良いくらい重度。

そろそろ勝負といきますか〜（前書き）

ウェンディたちがようやく登場！

そろそろ勝負といきますか

はあ、どうしてこうなった。

あ、皆さんこんにちは。レン＝ベルツです。

ようやく転生者の一人を殺せた。

つていうかチートが増えるとか強くなるとか反則だろ。

残りは三人だ。

結局テストロッサ（兄）には逃げられたし、ルナがアリシアの救出に行ったから河内も無事だ。

はあ、今回で全滅できればよかったんだけど。

なんか、このままズルズルと先延ばしになりそうで怖い。

「どうなされたんですか？」

「次は交換意見陳述会だろ？」

なんかそれでも残りの転生者を殺せなさそうなのがしてさ。

いやホント、主人公補正は凄いわ。

どんなピンチでもだいたいなんとかなるし？」

「でも、もう二人も転生者を倒してるじゃないですか」

「そうなんだけどな。なんか勘が言ってる」

そう、シヨタコンはともかく残りの二人は結構粘ると思う。

実際ルナとやり合えるだけの能力も経験もある。

なんだかねだであいつらって強敵なんだよな。

「ルナ、お前ならあの二人を殺せるか？
あいつらが全力で逃げてもだ」

「…うん、どうでしょう。」

正直、確実とは言い難いですね」

そうなんだよ。

あいつらは最悪s t s が終わってから俺たちを倒しても良いんだ。
俺はそんなの御免だ。もう飽きた玩具で遊ぶ気はない。

するとジェルから通信が来た。
なんだこんな憂鬱な時に。

「おや、どうしたんだい？
なんだか調子が悪そうだね。何かあったのかい？」

「いやさ、いい加減にしつこい局員がいてさ。
もう、どうしたものかってな」

「君がしつこいと言うとは相当なものだね。
誰だい、それは？」

「あれだ、六課の河内とテストロッサ（兄）の二人。
いい加減に殺したいんだけどな」

「…また大物だね。」

どちらも本局のオーバースランクじゃないか」

「っは！俺らからすれば小物だ。ゴキブリ並みにしぶといがな」

まったく忌々しい。
さっさと地獄に落ちろ！

『それならば良い案があるよ。
君は今度の交換意見陳述会を知っているかな？』

「あゝ、あれな。
お前のことだからなんかするんだろうけど、ウチに戦闘機人はいないからAMFに対応できないぞ？足手まといだろ？」

『いや、君たちには六課の攻撃に行ってもらいたいのだよ。
どうやら、当日は例の二人は六課に残るらしいんだ』

ほう、それは初耳だ。
なるほど、確かに聖王の器であるヴィヴィオが奪われなければ最終的には勝ちだからな。
その判断は正しいと言えるだろう。

「…わかった。その作戦に俺たちも加わろう」

これはチャンスだ。
上手くいけばこれで全てが終わる。

「教授、その作戦は私に任せていただけないでしょうか？」

「ん、どうしたんだ？珍しい」

「いえ、河内さんは長い付き合いですから。
最後くらいは私の手で葬ろうかな」と

それくらいなら別に良いだろう。

「いい加減に終わらせてやるよ。転生者！」

s i d e ルナ

そして現在は陳述会の襲撃の真っ最中です。
リリースとクアットロがシステムにハッキングをしかけています。
私はその護衛です。

「うゝん、見事な手腕ですね。
感心しましたよゝ、クアットロゝ」

「そうですかゝ？ 光栄ですゝ！
でもゝ、リリースさんも凄いですよゝ」

「え、えっと、ありがとうございます」

二人がかりなのもあるのですが、手際が神がっかけています。
これは凄い。

「ルーお嬢様、キャロお嬢様、お願いしますゝ」

『はゝい、遠隔召喚開始！』

これでガジェットが地上本部を包囲しました。
そこにディエチが砲撃を撃ちこんだりと、やりたい放題ですねゝ。

「それじゃあ私たちはもう行きますね。」
後はお願ひしますクアットロ」

「お任せください！」

そのまま六課へ移動します。
なるべく急がないと、ナンバーズの二人がやられてしまいますからね。

守護騎士二人に転生者が二人。
ぶっちゃけ中隊規模の戦力があります。

「リリース、今回は本気で殺しにかかりますよ。
ユニゾンを使います」

「は、はい」

「ユニゾン・イン！」

私のバリアジャケットが灰色になり、髪や瞳も黒っぽくなりました。
うん、何も問題なしです。

「じゃ、今日こそ二人の命日にしてあげましょうか」

side out

side ノーヴェ

私とウエンディは今、六課のフォワードのメンバーと戦っている。個人での技能は私たちには遠く及ばないが、連携でそれを補いやる。

「クソが、いい加減に死ねよ！」

「そうはいかないわよ！」

槍使いのチビを殴ろうとすると瞬間移動でもう一人がカバーし、そしてガンナーがその連携を補強する。なるほど、確かに悪くねえ。

「ノーヴェ、下がるッス！」

私が三人の相手をするからタイプゼロを！」

そう言うウエンディは、教授から貰った武装を展開する。あの反則アイテムか。

「IS発動、エアリアルレイヴ！」

すると周囲に展開した四つの盾が浮遊し、別々に動き出した。そしてそれぞれが射撃をしたり、エネルギー刃を出したりして突撃する。

「何これ！？こんなの知らない！」

チビ魔導師が何か言っているが、それでも瞬間移動でなんとか避けてる。

おいおいマジか。私でもそれを避けるのは難しいのに。

「この、ちょこまかと！さっさと墜ちるッス！」

ウェンディが手に持っている盾も使って攻撃するがやはり当たらねえ。

チツ、面倒なやつだな。こいつが一番この中で厄介だ。

ん？槍使いがいない…？

「…ッ！ウェンディ、上だ馬鹿！」

「しまったッス！？」

「サンダー！」

槍使いがデバイスを振り上げるとウェンディが盾を構えるのは同時だった。

だが甘え！それじゃあウェンディはやれねえよ！

その程度の奇襲は方舟じゃ基礎だ！

「レイジ！！！」

「残念、私の盾はまだあるッスよ！」

新しい盾がウェンディの前に展開され攻撃を防いだ。

「胸ががら空きッス！」

そのまま撃ち抜こうとするが、チビ魔導師が瞬間移動で連れ去った。逃がすかよ！このまま追撃をかけてやる！

「ちょこまかしてんじゃねえよ！…なに！？」

「ノーヴェ、どうしたんス！？…ってこれは！」

周囲には連中の幻影がばら撒かれていた。

あのガンナーにここまでの幻術ができるわけがねえ。

それはアリシアに鍛えられたからわかる。

ってことはあの魔導師、ブーストまで使えたのか！？
だが！

「全部潰せば同じだろーが！」

エネルギー弾で纏めてぶっ潰す！

「うおおおおお！」

すると背後からタイプゼロが殴りかかってきた。

馬鹿が！それくらいアリシアの訓練で経験済みなんだよ！

「ウエンディ！」

「了解ッス！」

タイプゼロの強襲をウエンディが盾で防いだ。
それでできた隙を逃さない。

「IS、エアライナー！」

「ガッ」

エアライナーを伸ばしてタイプゼロを吹っ飛ばす。
ただの移動のための能力じゃねえんだよ！

しかしそれは図だったらしく、ウエンディを魔導師が強襲した。
瞬間移動で一気に懐の深くまで潜り込み、デバイスを一閃。

「ハーケンスラッシュ！」

ウエンディは咄嗟に後ろに跳んでダメージを少なくした。
さらに跳びながらフローターマインをばら撒き、魔導師を吹っ飛ばす。

「ウエンディ、このグズ！」

爆煙で何も見えねえだろうが！逃げられるぞ！」

実際、連中の気配がどんどん遠ざかっていく。
このままだと逃げられる！

『ノーヴェ、ウエンディ。少し手伝え』

そこでチンク姉から通信が来た。
チツ、見逃すしかねえか。

そのまま私たちはチンク姉を手伝いに移動した。

side out

そろそろ勝負といきますか（後書き）

もうすぐです！もうすぐ魔改造キャラの真の力が出ます！
あと数話くらいで！

大逆転（前書き）

転生者の二人vsルナです。

大逆転

S i d e ル ナ

急いで六課に向かいましたが、既にオットーとデイドはやられたみたいです。

建物の所々で火の手が上がってますが戦闘は終了しています。

「ありやりや、遅かったですか」

とりあえず念話を送って確認しますか。

【二人とも、まだ生きてますか？】

【お、応援に来ました〜！】

駄目ですね。反応なしです。

流石に殺されてはいないでしょうが、もう捕まってしまったでしょう。

救出しないとですね〜。

「とりあえず施設を粉碎すれば誰か出てきますよね〜？」

「その必要はないぜ」

声が出た方向を向くと、既にお出迎えが来ていました。しかも二人もです。

さらに私の周囲を影のような犬が囲んでいます。

ウシエントリヒ・ヤークト

無限の獵犬ですか。これはあの査察官がいますね。

「おやゝ、河内さんにユーナさんではないですか。堂々と出てくるとは、よほど死にたいらしいですね。」

どうやら向こうもここで決着をつける気らしいです。

そしてナンバーズの二人からも既に情報を読み取ったと考えて良いでしょう。

なおさらこの二人は殺さないといけなくなりましたね。

「その姿…。お前らユニゾンデバイスまで持ってたのか？あの黒幕、本当に何でもありだな」

「だがそれでも関係ない。今日こそお前を捕まえる」

「遺言はそれだけですか？」

なら地獄へのご案内を始めますね」

そして私は踏み込みました。

まず狙うのはユーナさんです。あの速さは面倒ですから。

「やらせるかよ！」

しかしそれは河内さんに防がれました。

そしてユーナさんが加速し、私にデバイスを振り上げました。

『R e j e c t i o n 』

しかしアルテミスがオートガードで防いでくれます。

そのまま河内さんを弾いてユーナさんに攻撃しようと思いますが、加

速で離脱されました。

これは面倒ですね、心の底から。連携が想像以上に上手いです。

「見たかよ！俺たちは十年前からお前たちを倒すために訓練を欠かさなかったんだぜ！」

「個人はもちろん連携もだ」

「それはご苦労様です〜。
それも今日で無駄になりますけど〜」

そうは言ったものの、どうしようか〜。
内心では焦りまくりです。

流石にユーナさんには追いつけませんし、魔法は河内さんに消されます。

近距離も遠距離も抑えられました。

あれ、これって詰んじゃいました？

「行くぜ！」

「覚悟しろ！」

そういつて二人が突撃してきます。

河内さんはアルテミスで受け止め、ユーナさんは鞘で受け止めます。
正直、腕が折れそうですがその前に決めます。

「縛れ 鋼の軛！」

『ひ、氷結付加です！』

守護獣さん、魔法借りますね。
これってかなり便利なんですよ。

『Ice Bondage』

これは予想外だったらしく、二人は咄嗟に避けたものの所々に掠つてバリアジャケットが凍っています。
チエックメイトです。

「今のは、ザフィーラの!？」

「くそ、油断した!」

「それでは御二人とも、さようなら」

『Ice Detonation』

しかし、勝ったと思った瞬間に

私は桜色と金色の砲撃に吹き飛ばされました。

そのまま海まで吹っ飛びます。

しかしそんなことはどうでもいいんです。
ありえません。今の魔力光だけは絶対にです。

しかし現実とは無情なもので、そこには最悪の光景が広がっていました。

「亮君もユーナ君も大丈夫？」

「作戦どおりだね。本当に来た」

なんで高町さんとフェイトさんがここにいるんですか！？

二人は地上本部にいるはずです！

「理解できないって顔だな、それは」

「簡単なことだ。交換意見陳述会の間にお前たちが来るのはわかっていた」

「そ、そんな馬鹿な！そんなの不可能です！

可能性だけで隊長クラスの二人を残すなんてこと、できるはずありません！」

そう、私の襲撃は充分に転生者たちにも予測はできました。

しかし、曖昧な可能性だけで地上本部への出向という任務を拒否して待ち伏せをするなんてことは、組織では不可能なことです。

「それがもし、決定的な証拠だとしたらどうだ？」

「そんな証拠、あるわけが……」

すると河内さんはモニターを出しました。

映像はなく、音声のみが流れます。

『教授、その作戦は私に任せていただけないでしょうか？』

『ん、どうしたんだ？珍しい』

『いえ、河内さんは長い付き合いですから。最後くらいは私の手で葬ろうかな』と』

それは私と教授の会話でした。

これならば確かに証拠としては充分でしょう。つまりこれは、

「方舟に、裏切り者がいるって言うんですか……」

それは私にとっては大いにショックでした。

思わず呆然とするくらいには。

そして、方舟にはその隙を見逃す者はいませんでした。

『Lightning Road』

パリッというスパーク音が聞こえたと思うと、私は海に叩き込まれました。

今の攻撃は、そういうことですか。

私の頭の中で全てが繋がりました。

咄嗟に防御したためダメージは少ないです。

そのまま私は海上に飛び上がります。

すると、やはりいました。

転生者たちと一緒にいる彼女が。

「まさか、あなたが裏切るとは思っていませんでしたよ、イデア」

そう、裏切り者は彼女でした。

その目は覚悟を決めたもので、演技ではないのは確定です。

「何故、私たちを、いえ、教授を裏切ったのですか？

理由によつてはただじゃ済ましませんよ？」

「私はもう彼女たちを、親友を傷つけることなんてできないの！
彼女たちはずっと私を心配してくれて、だから！」

「あゝ、もう良いです」

イデアの答えを聞いて確信しました。

もうこの女は教授の害以外のなんでもありません。
話を聞く価値すらないゴミです。

「待つてルナ！あなただって、もう教授のために何かをする必要はないのよ！

あんなやつ、守る価値なんてないのよ！」

「…そうですか」。

アルテミス、フルドライブを」

『Full Drive』

「リリス、ナンバーズの皆さんに来ないよう言ってください」

『り、了解しましたあ！』

アルテミスのフルドライブは形態が変わるということはありません。しかし、私から放出される魔力量は圧倒的に増えます。

「ルナ！！」

なおも私を説得しようとする彼女に私はニツコリ笑いかけます。

「この売女が、その臭い口を閉じろ。

汚らわしいメス豚風情が教授がくださった私の名を呼ぶな。
お前みたいなクソ女から聞く話などない」

もうこんな女を生かしてはおけません。

教授をあんなやつ？何様ですか、あなたは。
生きてるだけで不快です。

同じ空気を吸っていると思うだけで虫唾が走ります。

もう私の頭の中は、どうやってこの女を殺すか以外はありません。
転生者なんかどうでもいいです。

そんなのいつでも殺せます。

「簡単に地獄へは送りませんよ？自分から死を懇願しても許しません。」

無反応になるまで痛めつけますから。」

ああ、早くこの女を苦しめたいです。

s i d e o u t

大逆転（後書き）

ルナが激怒しました。
方舟の最終兵器が動き出します。

本物のチート（前書き）

この作品で一、二位を争うチートが出現します。

本物のチート

side 亮

とうとうルナがフルドライブを使った。

だが友美が加わった今、いくらルナでも俺たちに勝てるはずがない。

「アルテミス、『粉雪』を」

『Ice Veil』

すると、ルナの周囲で白い雪が舞い始めた。

あいつがいる海上もどんどんと凍り付いていく。

「友美、なんだよあれは」

「…知らないわ。あんなのは見たことがない。

そもそもルナは方舟の切り札って言われていたけど本気を見たことはないの」

つまり、どんな魔法かわからないってことか。

だけど問題ねえ。皆がいればきつと大丈夫だ。

「行くぞ！」

「了解！」「」「」

そして全員で一斉に攻撃態勢に入る。

まずは俺がその妙な魔法を破る！

「どんな魔法かは知らねえが、零落白夜の前では意味ないぜ！」

しかしルナは一步も動かない。
構えすらしない。だが、

「関係ねえええええ！」

動かないならこのままぶっ倒す！

しかしそれは唐突に、目に見えて起こった。

零落白夜が凍りついた。

ルナに触れた瞬間、魔法を無効化するはずの零落白夜が凍らされた。

そんな、ありえねえ！

「邪魔です」

ルナが俺の左腕を掴んだ。

それだけでバリアジャケットが凍りつき、腕に激痛が走る。

「ぐっ ああああああああ！！」

「亮！」

咄嗟にユーナが俺を加速で連れ出してくれた。

そのおかげで、肩に届かないくらいところで凍結は止まっていた。

「今いったい何をしたんだよ、あいつは」

「わからん。お前の腕を掴んだようにしか見えなかった」

やっぱりそうか。

くそ、触れるだけで凍り付けなんて反則だろ。

「デイベインバスター！」

なのはが砲撃を撃つと、やはり砲撃はルナに当たった瞬間に凍りついた。

どうなってやがる。

「まさか…！」

ここで友美が顔を青くした。

明らかにマズイことに気がついたって感じた。

「どうしたんだよ？」

「あの魔法、たぶんフィールド系防御よ。」

自分の周囲の魔力を無理やり氷結させているのよ」

…いまいちわからねえ。

「つまりAMFの氷結版よ。魔力を霧散させないで凍らせるってこ

と。

しかも物理的にも凍らせるみたいだから相当に強力ね。

あの雪は空気中の魔力が凍ったものでしょう。

そしてルナは氷結魔法のエキスパートだから、その氷を再利用もできる」

…おいおい、マジかよ。

A M Fは俺の専門分野だ。だからこそわかる。

あんなに急激に魔力を凍らせるのを霧散させるバージョンでやるなんてことは零落白夜じゃないと不可能だ。それをわざわざ氷結させるような複雑な魔法を身に纏う？

おまけに零落白夜が霧散させる速さよりも速く氷結させるだと？

「チートはお前の方じゃねえかよ…」

俺は思わず呟いた。

もうあいつには近づくことも、魔力攻撃もできない。

つまりは、

「発生した効果をぶつけるしかない！」

フェイトが天候操作魔法で雷雲を作り出す。

なのはが周囲の瓦礫を魔法で持ち上げる。

「サンダー！」「スターダスト！」

「「フオール！！」」

それを見てルナがようやく動いた。

「壁を」

『Ice Wall』

するとルナの前に分厚い氷の壁が一瞬で出来上がり攻撃を防いだ。海水を使って作ったから魔力の消費は少ないのだろう。

「その人たちとお別れは済みました？」

「じゃあもう死んでください。」

「あ、訂正です。四分の三殺しくらいで勘弁してあげますから、今は」

そこからは一方的な虐殺だった。

攻撃が効かない俺たちは早々にやられ、もう見ていることしかできなかった。

ザフィーラとシャマルが途中で応援に来たが結果は変わらない。

そしてルナは今、俺たちの前で友美をいたぶっている。

「そうですね。」

「どうでしょうか。悩みます。」

そう言いながら友美の左腕を、踏み潰す。

「あああああああ！！」

「あ、すみません。」

「うっかり踏んじやいました。豚の足はわかりにくいですから。」

「そう言いながら左腕を足で小突き続ける。」

「うゝん、これじゃあ不恰好ですね。」

そうです！反対側も同じようにしましうか？」

そして右腕も踏み潰す。

友美の悲鳴が周囲にこだました。

「アハハ、アハハハハハハハハハハ！」

ルナはそれが楽しくて堪らないようだ。

狂ったように笑い続ける。いや、こいつは狂ってる！

「テメエ、なにがそんなに楽しいんだよ！

そいつはテメエの仲間じゃねえのかよ！」

するとルナは笑うのをピタリと止め、こっちへ振り返った。

「そうですね、仲間でしたよ？」

でも裏切ったじゃないですか？それならもう敵です。

そして、そうさせたのはあなたたちですよ？

無責任なことやってんじゃないやねえですよ」

興が冷めました、とルナは友美の方に向き直った。

「うゝん、このままやってもつまらないですね。」

どうしましうか？」

『あ、あの、もう殺しても良いと思います。
し、正直、もう飽きました』

「それもそうですね」。

じゃ、そろそろバッドエンドの時間で」す

ルナがデバイスを振り上げた。
狙いは頭だ。

「さよなら、裏切り者」

振り下ろした。

しかし、それは友美に届くことはなかった。

ユーナが友美の前に加速して自分を盾にしたからだ。

「ゆ、ユーナ？」

俺の声が届くことはなく、ユーナはそのまま崩れ落ちた。
地面に血溜まりが広がっていく。

「ありや」や、失敗失敗」。

邪魔なのが割り込んできました」

そう言つてルナはユーナを蹴り飛ばした。
まるで何もなかったかのように友美を殺そうとする。

「デメエエエエエ！」

よくもユーナを！あいつを殺したな！」

「はあ〜？」

ルナは理解できないという感じでこつちを向いた。
若干、侮蔑の色が目には浮かんでいる。

「あのですね〜。

こんな女を命を懸けてまで守る必要がありますか〜？
答えは、完全にはないが正解です〜。

非効率的です〜。無意味です〜。命の無駄です〜」

こいつはユーナの行動を無駄と言い切った。

完全に、バツサリとだ。

もう言葉すら出ない。

「それじゃあ、処刑続行〜！

…つてわけにもいなくなりましたね〜」

そう言つてルナが飛び退いた瞬間、シグナムが現れレヴァンティン
を振り下ろした。

どうやら応援に来てくれたらしい。

「おや〜、あなたは烈火の将さん〜。
もう来たんですか〜」

「…貴様がユーナを殺したのか!!」

シグナムの怒号が響く。

しかしルナは全く動じない。

「そうですよ？」

命を無駄にした結果がそれです。馬鹿ですね。」

むしろ笑っていた。

「あなたとは相性が悪いので、もう撤退しますね。裏切り者は…、もうどうでもいいです。」

そう言つてルナは立ち去つていった。

シグナムは俺たちがいるからか追おうとしない。

【それと、聖王の器ことヴィヴィオちゃんはもう頂きました。オットーとデイドも私の仲間が回収したのでご安心を】

それを聞いて俺はようやく悟った。

俺たちの完全敗北だと。

s i d e o u t

本物のチート（後書き）

また一人減りました。

突入

S i d e ル ナ

「報告は以上です」

「そうか」

アイデアを除いたメンバー全員がこの場に集合しています。
しかし、なんだか空気が重いです。

「おい、アイデアが裏切ったってなあ本当なのかよ!？」

「驚愕。連中の情に絆された?」

「そんな、アイデアさんが…」

「…もう死んだのか?」

教授がリリースに視線を送ります。

「い、いえ。寸前で応援が来たので。

う、腕の怪我も最終決戦には復帰できる程度でした」

「そうか。

アリシア、間に合うか?」

「うん、バッチシ!」

「よし、ならば今から作戦を説明する!!」

——説明中——

「……というわけだ。理解したか？」

「「「「「……」」」」」

「OK！完璧だよ！」

「り、理解しました〜！」

アリシアとリリス以外の全員が無言です。
というか、啞然としています。

「……えっと、マジですか？」

「本当にアンタ、良い趣味してるな……」

「でも面白いから許す」

「が、頑張りますけど……」

正直、その発想はありませんでした。
それじゃあ、最初からこのつもりだったんですね。

「それじゃあ作戦開始だ。」

忘れるな。俺たちの目的は転生者狩りじゃない。
世界征服だ」

side out

side 亮

——数日前

俺たちは数日後の交換意見陳述会へ向けて準備をしていた。
問題は、その時に起こる襲撃のことだ。

俺とユーナは初めからここに残るつもりだった。
襲撃の回避はできないだろう。

しかし、最悪ヴィヴィオを守りきれればなんとかなる。
だからこのシフトで陳述会を迎えるつもりだった。
しかし、

「友美が自首したと!?!」

そう、敵であるはずの友美が自首してきたというのだ。
しかも情報を話すとも言ってるらしい。

しかし油断はできない。また罠かもしれない。
それははやてたちも思っていたらしい。だから保険を用意した。

「やあ、はやて。

君から僕を呼ぶなんて珍しいじゃないか」

そう、ヴェロツサーアコース査察官だ。

この人は他人の思考を読み取る能力がある。

これなら嘘はつけないし、確かな情報も手に入れられる。

その結果、友美の情報に偽りが無いことも本当に裏切ったことも証明された。

友美は本当に帰ってきたんだ。

「友美ちゃん、おかえり！」

「おかえりなさい、友美」

「…ただいま、皆」

皆と話す友美を見て俺も確信した。

友美の言葉も感情も本物だと。

友美の情報をまとめると、黒幕の『教授』は次元航行艦を拠点にしているらしい。

そして六課を襲撃することも、そのメンバーも明らかになった。

これで正式に六課で待ち伏せをする作戦ができる。

情報の確実性はアコース査察官のお墨付きだ。

「皆、良く聞いて。

ルナの力は強大よ。たぶん方舟において一対一でルナにかなう人はいないわ」

そう、だからこそ全員でかかることになった。

いくらルナが強くてもオーバーSが四人がかりで倒せないはずがない。

さらに、

「私も一緒に戦うわ。」

作戦を開始した時点で裏切りはばれるもの。

それならば、確実に行きたいの」

これには流石にはやても難色を示した。

「友美ちゃん、気持ちは嬉しいんよ。」

でもな、流石にそれは上が許してくれんと思うんや」

俺もそう思う。

確かに戦力としては欲しいが、友美はまだ自首したばかりだ。すぐに戦力として使うことはできないだろう。

そう思っていたのだが、

「…通っちゃったんや」

「マジでか!？」

そう、はやてのダメもとの申請は受理されたのだ。

なんでも地上本部が許可してくれたのだとか。

なんにせよ、戦力が増えるのはありがたい。

これでルナを倒せる！

そう思っていた。

その結果がこれだ。

俺たちは今、アースラにいる。

六課の施設はルナとの戦闘で半壊したためだ。

ユーナは死に、友美は重症。

さらにヴィヴィオも連れ出され、ナンバーズも救出された。
完全に敗北だ。

原作どおり、スカリエッティはゆりかごを浮上させるだろう。
俺はまた、なにもできなかった！

「そんなことないわ！

亮たちは充分にやったわよ。ルナが強すぎただけ」

包帯を両腕に巻いた痛々しい姿で友美が励ましてくれた。
自分だってそんなにボロボロなのに。

「どうして裏切ってまで俺たちの味方をしてくれるんだ？
あのまま向こうにいればほぼ確実に勝っていたのによ」

つい、そんな言葉を言ってしまう。

八つ当たりなのはわかってる。しかし、言わずにはいらなかった。
それくらい俺は疲弊していた。心も、体も。

「そんなの、仲間だからに決まってるでしょ！」

その言葉は俺にガツンと響いた。

そう、だよな。

ユーナだったらこの状況でも諦めないはずだ。

そして、もう諦めている仲間は一人もいない。

それなのに諦めるのはまだ早い！

「友美、目が覚めたぜ。悪かったな」

「わかれば良いのよ。」

それと、まだ打つ手はあるわ。

はやてたちも賛成してくれてる」

友美が提案した作戦は突拍子もないものだった。

「方舟に侵入して教授を押さえるのよ。」

作戦中ならルナたちはいないし、いても融合騎のリリースだけよ」

確かに、それならば可能性はある。

教授本人はルナたちほど戦闘力はないらしいし。

「だけだよ、それは無理だろ。」

それくらい向こうも考え付くはずだ。

一人くらいは残ってるんじゃないのか？」

「そうね。でも、それならそれで良いわ。」

護衛につくのは確実にルナかライアよ。それ以外は護衛向きじゃないから。

そもそも方舟には防衛システムもあるしね。

そして、どっちかが護衛なら好都合よ。

それなら空域かスカリエッティの護衛が空くわ。

キャロは地上の制圧に向かうはずだし、アリスははやてが相手をする」

「…わかった。ならそれは俺が行く。
侵入する部隊の編成は…」

「もう終わったわ。

それに、道案内として私も行く」

「…頼むぜ」

そして数日後、聖王のゆりかごが浮上した。

既になのはたちは出動している。

報告を待つしかないというのが腹立たしい。

そして、

「こちら、高町なのはです！

ルナⅡベルツを確認しました！デバイスを持っています！

あれは本物だよ！」

「こちら、フェイトⅡテストロッサⅡハラウンです！

スカリエッティのアジトにてライアⅡベルツを確認しました！」

両方とも出してるだー！？

それじゃあ教授に護衛がないってことか！

「よし、方舟の突入を開始する！
全員、行くぞ！！」

「了解！！！！」

そして俺たちは友美の先導の下、方舟に突撃した。
内部は入り組んでいて広い。友美がいなければ教授の所にたどり着くのに時間がかかっていただろう。

『侵入者です。侵入者です』

アラートが響くと、防衛システムの傀儡兵が大量に出てきた。
しかしこっちの部隊も負けてはいない。

中隊規模の人数を連れてきたんだ。簡単には負けない。
そしてなにより、

『Lightning Road』

友美の力は圧倒的だ。
傀儡兵を次々と破壊していく。

「よし、全部破壊した！
この調子で行くぞ！」

しばらくそのまま突撃していくと、段々と防御システムが厳しくなってきた。
とにかく数が多い。

「隊長、時間が惜しいです！ここは俺たちが！

二人は先に進んでください！」

「くっ、仕方ねえ！」

「亮、もうすぐ最奥よ。たぶんそこに教授がいる！
先に捕まえて防御システムを止めた方が良いわ」

隊員にその場を任せて奥に進んだ。

すると突然開けた場所に出た。

天井は高く、培養器がズラリと並んでいる。
その先にアイツはいた。

「チッ、もう来たのか。
思ったよりも早かったな」

「テメエが教授か！もうゲームは終わりだぜ！
お前はここで逮捕だ！」

「クソが、やられてたまるかよ！
リリース、ルナたちはどうした！」

「ぜ、全員出てます〜！
もう私たちしかいません〜！」

どうやら、向こうは俺たちがここまでたどり着くとは思っていなか
ったらしい。

「へっ、どうやらチェックメイトみたいだな。
大和の、ホクトの、ユーナの仇を討ってやる〜！」

そして俺と友美は教授に向かって駆け出した。
これでようやく終わる。
そう、これで！

「終わりだあああああああ！」

「ちくしょうがあああああああああああ！」

なんてなるかよ、馬鹿が！！」

瞬間、俺の後ろでカートリッジの炸裂音がした。

「紫電一閃」

そのまま俺は叩き潰された。

真相（前書き）

超展開の理由が判明します。

真相

「クククク、ハーツハツハツハツハツハツハ！
作戦、大・成・功〜！お仲間ごっことは楽しかったか？バゝ力！」

いや、本当に大成功だ！

ここまで上手いくと、面白すぎて逆に清々しい。

あ、皆さんこんにちは。レン＝ベルツです。

現在、リリースとハイタッチしてます。

転生者はアイデアがバインドで簀巻きにしています。

「グ、ガハッ！友美、なんでだ……！？」

「確かに納得できないだろうな。」

あの査察官のおかげで嘘はないって証明されたしな」

そう、スパイ作戦が不可能な理由はそれだ。

記憶や思考は誤魔化しようがない。

だかな、

「こっちには精神のスペシャリストがいるんだよ！」

アリシアの手に掛かれれば一時的に思考パターンを変更したり、記憶にプロテクトをかけるなんてわけねえ！」

そう、アイデアが突然友情に目覚めたり、転生者を仲間だと思わせるなんてこともできる。

つまり、記憶を覗かれている間はアイデアは嘘をついている自覚がな

いのだ。

本気で裏切り、本気で仲間のために動いた。

つまり、超展開なのはこれが原因だったのさ！！

「そしてここ数日の間にその洗脳は解けた。

信用を得れば後は罠にかけるなんて簡単だろ？

それとよお、そんな簡単に事件の犯人が捜査に協力できると思うか？
できるか、バゝカ！」

「ッ！まさか、お前……！」

「そのとおり！最高評議会なんかとつくの昔に俺に逆らえなくなつてんだよ！」

つまりだ、お前がここでこうなるのは最初から決まってたんだよ！」

「嘘だ！ルナは本気で友美を殺そうとしてたぞ！
それが嘘だって証拠だ！」

ふむ、そうだったな。

それがまだあった。

「本気で殺そうとしてたさ。あいつは一切この作戦を知らなかったからな。

何故ならあいつは嘘も演技も下手だからな。

それに、その方がリアリティがあるだろ？実際お前は騙されたわけだしな。

その代わりリリスが見張っていた。度が過ぎれば止めるように命令していたんだよ」

「だけど、そいつは早く殺せって……」

「そ、それは応援が来たのを感知したからです、すみません」

「そういうことよ。」

途中からは笑いを堪えるので精一杯だったわ。
仲間だから！とか、臭すぎでしょ、我ながら」

転生者の顔がドンドンと絶望の色に染まっていく。

「まあ、お前は頑張ったと思うぞ？

俺の方が数百枚も上手だったただけだ。

ちなみに、突入部隊はもう全滅したからさ。」

A M F兵器を出せばイチコロだったぜ？マジでザコいわ。」

そして転生者にも見えるようにモニターを展開する。

こいつは観客だ。俺の世界征服を見届けさせてやろう。

「さあ、後は邪魔な管理局を排除するだけだ！

全員、目指すはゆりかご、じゃねえ！

次元の海に浮かぶ本局だ……！！」

さて、俺も仕事を始めるか。

s i d e ルナ

「了解です……！！」

ゆりかごに集る航空部隊を相手取っていた私は、真の作戦を開始しました。

現在、本局には次元航行艦はほとんど残っていません。つまり、魔導師もほとんどがゆりかごの破壊に向かったということです。

残りの魔導師が相手ならば簡単に制圧できます。

「ライア、フェイトさんは？」

『もう倒したぜ。殺しちゃいねえ。』

ドクターが素材として欲しがっていたからな』

「アリシアはどうですか？」

『もうバッチリ！』

いつでも行けるよ！』

「アリス、八神さんのことはお願いします」

『わかった』

「キャロ、航空部隊をお願いします」

『了解です！』

地上を制圧したら取り掛かります！』

「クアットロ、私たちは作戦どおり本局を襲撃します」。良いですか？高町さんを集中攻撃してください。守護騎士は教授がなんとかしてくださいますから」

『了解しました。』

どうぞお気をつけてー!』

さて、それでは、

「行きますよー!」

side out

side キャロ

私は今、フリードに乗ってルーちゃんの援護に向かっています。

どうやら転生者とエリオ君の二人にやられていてピンチみたいです。

「あ、あれって白天王?」

戦闘地点と思われる場所に大型召喚の気配を感じました。
すると、遠目にですが白天王を確認します。

「フリード、急いで!」

速度を上げましたが、私が到着した頃にはもう白天王はいなくなっていました。

どうやらルーちゃんは二人にやられてしまったみたいです。

エリオ君に抱えられています。

どうやらこっちに気づいたみたいです。

「許さない！ケリユケイオン！！」

『Boost Up・Strike Power』

そのままビルに飛び降ります。

その勢いを利用して、

「紫電一閃！」

ビルは一撃で崩壊しました。

二人は避けましたが、その隙にルーちゃんを奪い返します。

「ここは危ないから、どこかに転送しないと」

とりあえずドクターのアジトに転送しておきました。
すると二人が瓦礫の山から出てきました。

「君、キャロだよね？」

ルーテシアをどこにやったんだ！」

「ルーちゃんなら安全な場所に転送しました。

ここは危険ですから」

そう言っつて構えをとります。

戦場で隙は命取りですからね。

「クッ、彼女はもう少しで平和な世界に戻るんだ！
君だって、戦いなんていやだろう！」

「確かに戦いなんていやです。
でも、私の大切な人たちのためなら、私は何だってできるんです。
その人たちのために、あなたたちを倒します！」

そう言つて突進します。

エリオ君は私の拳を槍で受け止めたが、堪えきれずに吹き飛びます。

追撃をかけようとして気づきました。

アンナちゃんが、いない…？

『H a k e n S l a s h 』

「これでええええ！」

頭上から電子音と雄叫びが響き渡りました。
防御魔法は間に合いません。避けるのも時間が足りません。
ならば…！

「受け止めます…！」

『T h u n d e r A r m 』

手に魔力を集中し、白刃取りです！
そのまま逃がしません。

「嘘でしょ！
こんなこともできるの！？」

彼女の能力は触れていれば相手ごと移動してしまうという欠点があ

ります。

この状態ならば移動はできないでしょう。

「フリード、ブラストフレア！」

「キュクー！」

小型に戻しておいたフリードでそのまま吹き飛ばします。

『S o n i c M o v e』

しかしその隙を逃さずにエリオ君が突撃してきました。
これは流石に回避できません。
隣のビルまで吹っ飛ばされます。

「イタタ、ケリユケイオンもフリードも大丈夫？」

『問題ありません』

「キュクーー！！」

二人とも前に戦った時よりもずっと強くなっています。
侮ったら負けるかもしれないね。

「全力で行きます！」

向こうの戦い方はおそらく、エリオ君が突撃し、その隙をアンナちゃんやんが攻めるというものでしょう。
しかしそんなの関係ありません。

「竜召喚でこの辺ごと吹き飛ばします！」

side out

side アーナ

キャラが出てくると同時に私とエリオは攻撃を仕掛けた。
キャラはかなり強いけど、二人がかりならなんとかなると思ったから。

しかし、キャラは避けることも反撃もしなかった。

『Boosted Protection』

ただ防ぐ、それだけだった。

そしてデバイスから何かを取り出した。

あれは、まさか！

「ジュエルシード！？」

青い宝石にしか見えないが間違いない。
あれをどうするつもりだ？

「フリード、我慢してね？」

そのままフリードに飲み込ませた。
すると、その体が輝きます。

まさか、フリードに使う気なの！？

「天空を統べる破壊の竜王 蒼穹を食らう烈空の牙 我が元に来よ 白き翼の天空の覇者」

詠唱が始まった。

何をしようとしているのかはわからないけど、一つわかることがある。

超直感を使うまでもない。あれはマズイ。

このままだと私の夢は終わる。

他の転生者と同じ運命を辿ることになる。

死んだホクトさんとユーナさんが頭をよぎった。

「ふざけてんじゃないわよ!!」

ウラヌスをバリアに叩きつける。

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も。

「アンタなんか、私の人生を決めさせはしないわ！」

私は幸せになるのよ！こんなところで死んでたまるもんか！！」

エリオも必死でバリアを破ろうとするが、一向に破れる気配がない。

なんて魔力、なんて硬さ、なんて技術！こんなの、破れるわけがない！！

ここに来て私たちはようやく悟った。

最初の攻撃で仕留められなかった時点でもう既に勝ち目がないことに。

そして、詠唱が終わった。

「竜魂召喚 フリードリヒ！」

そして現れたフリードは、もう私を知るフリードではなかった。

体長は数十メートルはあり、東洋の龍のように胴が長い。

そして目立つのはその巨大な顎門^{アギト}だ。

私なんか簡単に噛み砕けるだろう。

「は、はは、何よ、これ」

ぶっちゃけ、どこのオ○リスの天空竜？ツて感じた。

口は一つしかないけど。

エリオも私もデバイスを取り落とした。

このプレッシャーを前に、気力が根こそぎ破壊された。

こんなの、勝てるわけがない。

気がつく、私たちを挟んでヴォルテールまで召喚されている。もう立つこともできない。私はとうとう膝をついた。

もう絶望しかない。

だからせめて最期にエリオの顔が見たかった。

しかし、そこにはもうエリオはいなかった。

【あつ、エリオ君はドクターが欲しがっていたので仲間の所に転送しました。

今頃は気絶させられていると思いますよ？】

そして私の第二の人生は消し飛んだ。

最期に見たのは、二騎の竜が放つ極大のプレスだった。

s i d e o u t

真相（後書き）

これで実質、転生者は全滅ですね。

ファイナルアンサー？

sideアリス

「思ったよりも粘る」

八神はやて。

私と同じ広域殲滅型の魔導騎士。

正直、私のように防御が固いわけでもない彼女は相手にならないと思っていた。

しかし、なかなか頑張っていると思う。

アウトレンジから同士の戦いなんて実際はただの撃ち合いだ。

しかし、その威力はお互いに絶大。

だから彼女は私と戦うだけで周囲に被害が出る。

実際、そういう攻撃しかしてないし。

「ニーズヘッグ、次弾発射」

途中地点で彼女の魔法と相殺し合うのが見える。

フリースヴェルグだっけ？なかなか良い魔法だ。

数発は相殺を免れて私に直撃した。

「でも残念、私には届かない」

自動で聖王の鎧が発動し、私を守った。

さっきからこれの繰り返しだ。

しかし彼女にこんな能力はない。一回一回防いでいる。

その度に周囲の部隊が巻き込まれるため、彼女は一時戦線離脱をしたようだ。

さつきから少しずつ移動している。

【こんな状況でよく粘る。

さっさと諦めれば楽になるのに】

【私たちは管理局や。

アンタらみたいなのを捕まえるのが私たちの仕事や！】

【そうです！リインたちは絶対に諦めないですよ！】

【くだらない。今日で管理局は滅亡する。

そんな組織に所属することそのものが無意味で無価値】

魔力量はほぼ同等なため、この戦いは戦闘経験や技量がものを言う。公式チートと教授が言っていた。なるほど、確かに。

【八神はやて。お前、こっちに来ない？

お前くらい強ければ教授は喜んで仲間にしてくれる。

守護騎士たちも受け入れるし、さらに強くもなれる。

キャラが良い例、あの子はスカウトだから】

そして思った。彼女は惜しい。

教授は六課のメンバーを生かして連れて来いと言った。今ならその理由もわかる。

確かに六課を支配下におければ戦力は激増するだろう。そして、こつちにはそうするだけの能力も技術もある。^{スキル}

【お断りや！

アンタらみたいな犯罪者になるのはご免やからな!」

【…そう】

残念だが、それなら仕方がない。
力尽くで連れて行く。

そこで不意に感じた。

「？」

変だ。

何がかはわからない。でも、確かに変だ。

違和感の正体はわからないけど、このままなら勝てるのも確かだ。

相殺だってできてるし、防御も完璧。

それなら何も問題は…。

相殺？

そこで気づいた。

相殺する間隔が短くなってきた。

それはつまり、彼女との距離が縮まっている？

いったい何がしたい？

「レメゲトン、わかる？」

『ロングレンジで魔法を使用するつもりなのでは？』

ロングレンジ？

距離を詰めれば私の防御を抜けると思っているのか？

「浅はか」

私の防御を破るつもりなら竜種を百匹連れて来い。

それくらい防御には自信が…。

その時、上空から魔力を感じた。

何のつもりかは知らないけど、聖王の鎧は貫けない。

『違います。』

あれは石化魔法です！』

石化魔法？

ミストルティン！？

「レメゲトン、最大防御！！」

『Yes , my lord』

聖王の鎧だけじゃ、侵食されて石化してしまう。

その間に攻撃を食らえばアウトだ。

そのまま一方的に負ける。

「我が元に来たれ冥界の番犬 魂を食らう三つ首の魔獣」

詠唱は完了。防ぎきれるか？

やるしかないけど。

「ケルベロス！」

私の前に三つのシールドが現れる。
物理防御、魔法防御、空間防御の順に並んでいる。
以前、ルナに一撃で防御を凍りづけにされた時から考えていた最強の防御魔法だ。
破れるものなら、

「破ってみろ」

そしてミストルティンが飛来した。
一枚目、物理防御。あっさりと破られる。
まあ、これにはあまり期待してなかったけど。
二枚目、魔法防御。これで止まった。
石化するのよりも早くミストルティンが消滅する。

「ちえ、これが切り札やったんけどな」

『この人、やっぱり強いです！』

「少しヒヤツとした。でも、もう終わり」

もう会話ができるくらい距離を詰められていた。
この距離は正直苦手だ。

しかも彼女はユニゾンまでしている。これは不利だ。

そのままお互いに動かない。

おそらく彼女は大威力の砲撃で決めようとしているのだろう。
しかし、それは決定的な隙になる。

私はまた石化魔法を撃たれるのが怖いから隙を見せられない。

これじゃあ千日手だ。

すると教授から通信が届いた。

音声のみなので彼女には聞こえない。

それを聞き、この戦いが終わったことを知った。

「…八神はやて、本当にこっちに来る気はない？

格別の条件で受け入れるし、管理局が崩壊した後の混乱を何とかするのだから教授は力を貸してくれる」

「くどいで！

それに、降伏するのはそつちや。

今、応援がここに向かってる。自首した方が今後のためや」

『そうです！悪いことをしたら罪を償うです！』

「…ファイナルアンサー？」

『「ファイナルアンサー！」です！』

もう私にもわかる。これは烈火の将だろう。

魔力量が凄まじいから、アギトとユニゾンしたのかな？

どんどんとここに接近してきた。

そして彼女の後ろで止まる。

「これで終わりや！

武装を解除して投降しなさい！！」

「残念、その答えはハズレ」

「紫電一閃」

烈火の将は八神はやてを地面に叩き落した。
ユニゾンした状態での攻撃だ。一撃でダウンだろう。
非殺傷設定だから死んではないだろうけど…。
これでユニゾンデバイスが二騎も手に入った。

「これで管理局の勝ち目は完全になくなった」

side out

「嘘だろ…！」

どうしてシグナムも裏切るんだよ!？」

転生者が愕然としている。

そりゃ驚きだろうな。俺でも驚くよ、同じ立場なら。

あ、皆さんどうも。レン＝ベルツです。

現在、はやての確保が終了しました。

これで管理局の残りの戦力で脅威なのは、なのはだけになります。

「テメエ、シグナムに何しやがった!!」

あゝ、うるさいな。こいつ。

「別に何もしてねえよ。ただ、普通に頼んだだけだ。

『俺に協力しろ』ってさ。」

「嘘つくな!お前、あいつらにまで!」

いや、本当に頼んだだけだって、守護騎たちに通信して。

ただ、製作者権限を使って頼んだだけだ。

「ヴォルケンリッターはそもそも俺の戦力で、俺が作ったんだよ。遥か昔にな。そして、俺は万が一の時のために保険を掛けていた。

それが俺の命令には絶対に従うように設定することだ」

「…それじゃあ、まさか」

「そおゝさ！俺はいつでも六課を壊滅させられたんだよ！

しかも、今はシグナムとユニゾンしているアギトもシグナムを経由して侵食した！

もう、テメエの味方の主力は高町なのは以外は全滅したんだよ！！」

なんてことはない。

落し物に名前を書いておいた。そして今、持ち主の元に戻ってきた。それだけのことだ。

「まだだ！なのはがヴィヴィオを助け出せば！」

確かにそうだ。

ゆりかごを止められれば一先ずは勝ちだろうな。だが、

「そう簡単にいくかよ」

既に手は打ってある。

もうお前に希望はないんだよ、転生者。

ファイナルアンサー？（後書き）

次回、なのはに危機が！？

転生者 全滅すること

sideクアットロ

うつふつのふゝ 全てが計画どおり。

鉄槌の騎士は既に教授が掌握、ドクターも無事。
後は高町なのはを抑えれば懸念材料は全て排除したことになる。

それに、ゆりかごの防衛についてはルナ様からアドバイスも貰っている。

これで失敗するという方が嘘だ。

「おやゝ？」

どうやら高町なのはは陛下のいる玉座の間にたどり着いたようですねゝ」

途中にディエチは配置していない。

あの妹はもつと有効な使い方がある。

そして陛下と彼女は予定通り戦闘を始めた。

しかし、彼女は一切陛下に攻撃しようとしなない。

防いだり拘束したりと守りの手ばかりだ。

「本当にルナ様が仰ったとおりですねゝ。

その隙に私を探そうとしているというのも……」

モニターにはゆりかごの中を飛び回るエリアサーチが映っている。

かなりの数だ。これは見つかるのも時間の問題だろう。

「だったら、その時間もなく終わらせれば良いんです。デイエチちゃん、準備は大丈夫？」

「大丈夫。すぐに撃てる」

そう、あの子の最も有効な使い方とはこれだ！

玉座の間に続く通路の奥にデイエチは配置している。

『チャージ完了、IS『ヘヴィバレル』！』

そしてデイエチの砲撃が発射され、見事に直撃した。

陛下に。

「あらあら、すみません」

手元が狂っちゃったのか、陛下に命中しちゃいました」

陛下には聖王の鎧がある。

だからこの砲撃を食らってもそこまでのダメージにはならない。だからこそ容赦なく当てられる。

「ごめんなさいね、あなたの大切な娘さんに痛い思いをさせちゃ

つて。

ひよつとするとまた手元が狂うかもしれないから、気をつけてくださいね。」

『あなた、わざとヴィヴィオを！？』

今頃気づいても遅い。

もう次の砲撃の準備は整っている。

「ディエチちゃん、次をお願い」

『了解』

そして次弾が発射された。

今度は高町なのはが砲撃を防いだ。

しかし、そんな隙を今の陛下が見逃すはずがない。

案の定、彼女は背後からの攻撃を防げずに壁に叩きつけられた。両方の攻撃を防げるほどディエチのフルチャージは弱くない。しかしディエチに攻撃をしようとすれば陛下に背後を晒すことになる。

「うふふふ」 皮肉な話ですよ？」

攻撃は全て娘に向かい、守ればその愛すべき娘に背中を襲われる。もうあなたにできることなんてないんですよ？」

『まだ、だよ！』

私は絶対に諦めないんだから！』

「へえ、じゃあどうするって言うんですの？」

やってみてくださいよ」

『言われなくても!』

そう言うとき彼女は陛下を拘束し、壁にデバイスを向けた。
そのまま砲撃体勢に入る。

『クアットロ!』

「デイエチちゃん、別に良いわ」

『デイベインバスター!』

そして彼女の砲撃が、ゆりかごのどこかを貫いた。

「それで?」

今のがどうしたって言うんですか?」

『...!』

そんな、確かに撃ち抜いたはずなのに!』

そう、彼女の砲撃は撃ち抜いた。

私の幻影を。

「あはははは！」

エリアサーチくらいとくに気づいてましたのよ？

だ・か・ら、ゆりかご内部のいたる所に私の幻影を配置してあります」

その数の中から本物の私を見つけられる確率はどれほどだろうか？
否、次の私を見つけるまで戦闘を続けられるだろうか？

「さすがのエースオブエースにも無理でしょう？」

高町なのはが墜ちたのはその数分後だった。

side out

「そ、んな、なのはが…」

転生者の顔が今度こそ絶望に染まる。

それもそうだろう。

なのはが敗れたということは、ゆりかごの上昇を止める手段がなくなったということだ。

そして、海の応援が来る前にゆりかごは軌道上に到達する。

あ、どうも。レン＝ベルツです。

どうやら勝負はもう決まってしまったようです。

『教授、海の制圧はもうじき完了します』。

これで応援に向かった次元航行艦は帰ってこれません」

『教授、地上本部の制圧が完了しました。

これからフリードで航空部隊を殲滅します』

「よし、よくやった。

これで事実上、管理局の戦力は今戦っている連中と次元航行艦の連中だけってことだな」

スバルとティアナはノーヴェたちがなんとかする。

これでもう俺の勝利は確定したようなものだ。

「クハハハハハ！」

これで俺たちの完全勝利だな？ええ、おい」

「クソ、クソ、クソお！！」

「うんうん、気持ちはわかるぞ。

敗北の主な原因は仲間の裏切りだもんな？

はっ、部隊の主力のほとんどが裏切るなんてとんだ部隊だな？」

まあ、大半は俺が原因だけだねえ？

別に裏切りがなくても隊長クラスは負けていただろうがな。

ん？

「ほら見るよ転生者、ゆりかごが定位置に移動したぞ。

これで次元航行艦隊が来た意味はなくなった。なんせミッド全域が人質だもんなあ」

「き、教授、本局の戦力の殲滅が終了したそうです。これで本局の制圧が実質のところ完了しました」

ほうほう、これで実質の世界征服は完了したってことか。意外と簡単だったな、世界征服。

「ククク、終わったなあ転生者。結局、個人の力ではどうしようもできなかったことさ。

どんなに強い力を手に入れても、賢いやつが最後は勝つんだよ。今のお前がその結果だろ？ええ、簀巻きの転生者さんよお？」

「くっ」

「なあ、今どんな気持ちだ？」

味方は裏切りまくり、正面から戦っても負けて、拳句の果てには世界征服を目の前で見届けた自称正義の味方の転生者さん？ヒーローごっこは楽しかったですか？」

転生者は悔しそうに俯いている。

全て事実なんだから言い返せないのだろう。

「なあ、何でお前は転生なんかしてきたわけ？アニメのヒロインとイチャラブできるから？

それとも俺TUEEEとか俺SUGEEEEをしたかったとか？」

前から疑問だったんだ。

何でそんなに頑張るの、こいつ？

「…俺は、悲しい運命の彼女たちを助けたかったんだ。」

彼女たちは何も悪くないのに、それなのに残酷な運命が襲いかかる。それから助けてあげたかった。幸せにしてあげたかったんだ!!」

それは慟哭だった。

きつとそれは心からの言葉だったんだろう。

本当にヒロインたちのことを大切に思っていたんだろう。

だからこそ俺は言っちゃった。

「厨二病もたいがいにしてろ、アニメの観すぎだ」

悲しい運命？ヒロインの幸せ？

ヴァカじゃねえの？

俺TUEEEEの方が理解できるわ、ボケ。

アニメに感情移入しすぎだ。

「ここはアニメの世界なんだぜ？
結局は誰かが作った物語なんだよ。それを現実だとか勘違いしてい

るだけなんだよ、お前は。
初めからこうなる運命だったのさ」

よく二次創作の主人公が転生先を現実世界だと認識するシーンがあるが、俺はそれに真っ向から反論してやろう。

ここはアニメの世界であって、現実なんかじゃねえ。
こんな魔法なんて出鱈目なものが跋扈する世界が現実なわけねえだろ？

所詮、夢みたいなものなんだよ。

「転生者、お前は漫画やアニメのヒロインに憧れるだけの餓鬼だ。
一生ヒーローになんかなれないんだよ」

ホント、馬鹿じゃねえの？

「ならっ、お前はとうなんだ！
お前だって何か目的があって転生したんだろ！？
それならお前に何かを言われる筋合いはねえ！」

「俺の目的？そんなの決まってるだろ？
面白おかしく生きることだ！！」

そして転生して調子に乗った馬鹿どもを地獄に叩き落してやるためさ！！

そのためにお前たち転生者を呼んだんだからな」

その言葉に転生者は凍りついた。
理解できないといった表情をしている。

「…俺たちを呼んだって、どういうことだ！！」

「言葉通りさ。」

お前たちはこの俺と神を楽しませるために転生させられたんだよ。
俺が特典を使つてな。

つまりお前たち転生者が悲惨な死をとげ、物語がバッドエンドになるのも最初から決まっていたんだよ！

これは俺の俺による俺のための物語なんだからな！！」

それを聞いて、今度こそ転生者の顔から表情が消えた。
どうやら完全に絶望の底に沈んだようだ。

「さうて、そこそこ楽しませてもらった。

礼として俺が思いついた地獄の拷問フルコースで殺してやろう。
俺のおかげで転生できて、その上俺様が死因を考えてやるんだ。
感涙に咽び泣いて良いぞ？」

転生者 全滅すること（後書き）

次回が最終回です。

いつが終わりかは俺が決める！！（前書き）

こんな題名ですが、これで終わりです。

いつが終わりかは俺が決める！！

「教授。教授、夕食の時間ですよ。起きてください」

「んが？」

やべ、寝てたか。

それにしても懐かしい夢を見たな。

あ、皆さんどうも。レン＝ベルツです。

世界征服が終了してから既に五年の月日が経っています。

え、転生者？

地獄の拷問フルコースで死んだよ？

メンバー全員の得意分野で乗り続けるが決して死ねない最高に優しいものだ。

まだまだ続ける気だったんだけどなあ。とあることが原因で死んだ。

途中の様子をダイジェストで紹介すると、

『指の先からじわじわと凍らせていきましよう！』

凄く痛いですが、こっちは最高の医療技術が揃っていますから絶対に死にません！』

『非殺傷設定の魔力弾で蜂の巣にしてやんよお！』

オラ、まずはフルオートの掃射からだ！』

『私が魔法で上空に吹き飛ばす。もちろん非殺傷。落ちてくる前にまた上空に吹き飛ばすから落下で死ぬ心配はない』

『よし、全身の痛覚をランダムに刺激するよ！百パターンくらい考えてあるんだから！

ショック死しないように段々と強くするから安心して！まずは心臓とかどう？』

『私が全速力で移動してあなたを引きずるわ。バリアジャケットは強制的に発動させるから、盛大に酔っただけで済むと思うわよ？』

『えーと、竜を使うと手加減ができないので軽いものになります。そうですね…、サンドバックになってもらえます？』

って感じだった。

誰がどれかは想像にお任せします。

最後の方はヴォルケنزにフルボッコにさせたりとか、洗脳したなのはとはやてに砲撃を撃たせまくったりとかもした。気が狂うのは許されない。

アリシアが丁寧に正気に戻すからだ。

それを一週間くらいしてたんだが、ある日キャラが強く殴りすぎて頭蓋骨を破壊してしまった。

これが原因で即死。これじゃあ流石に俺でも治せない。しかも脳もきれいにパッキリ逝ったので、蘇生もできない。

キャラ、どれだけ強く殴ったんだ！？

まあ、そんな感じで拷問は終了。

俺？俺は主に治療とかをした。俺って優しいなあ。麻酔をケチったりとか、わざと激痛がする薬品とか使ったりしてたけど。

それと、世界の統治とかは主にジェイルに任せた。

俺が思うに世界征服は征服する途中が一番楽しいんだよ。征服した後の世界に価値なんかない。

六課のメンバーは結構散り散りになった。

フェイト、エリオ、スバルはジェイルのアジトで今はビン詰めだ。

他のメンバーは全員洗脳して俺の手駒だ。ルナが家事の分担ができて助かると言っていた。

え、もったいない？

優秀な魔導師でも戦闘がなければ使えないし、別に良いんじゃないの？

そんなこんなで今日も平和だ。

神もあれから何も言っていないし。

今度会ったら言いたいことがあるんだけどなあ。

そして俺が食堂に着くと、やはり全員が既に食っている。

「デ・メ・エ・ら、いい加減にしろおおおおお！！」

主人を待てつつってんだろうが！

何年言えばわかるんだよ！？シバくぞ、コラ！！

「あゝ、あれだ。もうアンタは自分の部屋で食えよ。そうすれば一々怒鳴らなくて済むだろ？」

「あなたが遅いだけって何度も言ってる。
まさか、痴呆？」

「ごめんね、早くしないとご飯が冷めちゃうから」

「何をそんなにイライラしているの？
カルシウムが足りていないんじゃない？」

「ごめんなさいー！！
ライアさん、もうアーンってしないので隣に座らせてくださいー」
涙）

「え、えつと、その、ごめんなさい。
皆さんが食べてるので、つい…」

こいつら…！
キャロにいたっては俺の話すら聞いていねえ！
謝ったりリスは許してやろう！

「デメエら…！」

「お願いですからやめてくださいー！」

もうこの状況は一生改善されないんじゃないだろうか？
既にベルツ家の光景の一つになっている。

「はあ、まあ良いや。
それにしても、これからどうするかねえ」

「どうするかですか？」

「そういえば、世界征服してからもう五年も経ってるんですね。」

「アンタ、世界獲ってもまだ不満なのかよ。」

「でも確かに退屈。」

「それはあなたが寝て起きてしかしてないからでしょ……」

「でも暇なのは確かだよな。」

「え？私はあと一年で結婚する予定ですから暇じゃないですよ？
花嫁修業とかが忙しくて……。ね？ライアさん。」

「リア充は死ね、俺が許す。」

「……濡れ衣だ。」

「実際、そういう話はこの面子では聞かない。
だから俺がおかしいわけじゃ……。」

「え、私はクアットロと交際してますよ？」

「日に百通以上のラブレターが届くようになったので、流石に無視で
きないな」と。

「家事も奴隷が増えたおかげで楽になりましたし？」

「私も相手くらいいるよ！」

「あのね、聖王協会の人でね、昔は査察官だったんだって！」

「私は特定の相手はいないわ。」

今は八人くらい又がけしてるけど」

「……………」

アリスと俺は絶句する。

まさか、そういう話がないのは俺たちだけか！？

「そんな馬鹿な。

私がこのクソマッドと同類だなんて」

「テメエ、ぶつ殺すぞ！」

俺だってニートの同類だなんてご免だ！

テメエは一生部屋に引きこもってる、この穀潰しが！

「だ、大丈夫です、教授！

わ、私がいますから！」

リリスが慰めてくれる。本当に良いやつだな、お前。

っていうか俺もリリスも寿命がないんだし、これから長い付き合いになるんだよなあ。

しかし、その見た目じゃアウトフレームを展開しても俺が変態になるぞ？

とその時、世界が静止した。

「……とうとう来たかよ。五年ぶりだな」

「やあ、そうだね。それにしても、君は変わらないな」

「お互い様だ」

とうとう神が現れた。

そう遠くないうちに現れるとは思っていたが。

「で、何の用だ？」

「いや、随分楽しませてもらったからね。

そのお礼を言おうと思ってきたんだよ。

でも、これ以上の面白いことは起こらなさそうだからね。

そろそろ終焉にしようと思ってきたのさ」

「終焉？」

「この世界の物語にも飽きてきたってことさ。

それに、転生者を使って遊ぶのって神の間じゃ相当上位の神以外は禁止されていてね」

「だから俺を消して証拠隠滅ってか？」

たいした神様だな」

「お褒めの言葉をありがとう。
じゃ、そろそろ消えてよ。大丈夫、
痛くしないから」

そして神はスッと腕を上げた。

「終わりはお前だ馬鹿が」

神の胸を後ろから氷の剣が貫いた。

「ガッ、グガッ、あああああああ！！」

神が床に倒れ、のた打ち回る。

「へえ、これが神ですか？」

「パツと見は人間なのにな」

「無様」

「ねえ、触ってみて良い！？」

「アリシアさん、汚いですよ！」

「安そうな神ね？」

「え、えっと、ごめんなさい」

周囲の時間は静止したままだ。

それなのにルナたちは平然と動いている。

「ば、馬鹿な！？どういうことだ！？
どうして動ける！？」

「ククク、簡単なことだ。

お前の遊びはとづくに他の神にばれてたんだよ。
そして俺にこんな話を持ちかけた。

お前を殺せば神になれるってな。

だから俺たちは他の神の力を借りてこうして動けるってことだ。
俺もこの物語には飽きていたところだ。

だから今度は神になるってのも良いんじゃないかって思ったんだよ」

そう、この五年のうちに他の神が俺に接触してきたのだ。

この神は処分するから、空く席に着かないか？ってな。

神の世界は人材不足らしいから、優秀なら人間でも採用するらしい。

「つゝまゝり、俺はお前がノコノコ出てくるのを待っていたんだよ。
はっ、終焉はお前の方だったな、神様よ？」

「な、そんな…！？」

「じゃあまあ、そういうことだ。

最後くらいは俺が止めを刺してやるよ」

そう言っただけ俺は手に魔力を集中させる。

「ああ、そうだ。ずっとお前に言いたかったことがあるんだ。今まで遊ばせてくれて感謝してるぜ。」

お前こそが最高に馬鹿で愉快な玩具だった」

「ま、待つてく——」

そして、神を漆黒の砲撃が貫いた。後には何も残っていない。完全に神は消滅した。

すると、目の前に扉が出現する。どうやらこれを通れてことらしい。

「んじゃ、行くぞ。」

全員、準備は良いか？来たくないやつは残っても良いぞ」

「はい、大丈夫です。」

クアットロのことは残念ですが、私は教授についていきますから」

「そういうことだ。」

俺たちはアンタのために生み出されたんだぜ？当然だろ？」

「連れて行かないと殺す」

「教授が神様ってことは、私たちは天使ってこと！？」

なんか良いな、それ！」

「ついていくに決まってるでしょ？
水臭いこと言わないで」

「ライアさんが行くなら私も行きます！
それに、皆さんも行くならなおさらです！！」

「き、教授とはずっと一緒です！！」

満場一致だ。全員が俺と行くことにするらしい。
へっ、悪くねえ。

「よし、行くぞ！テメエら！！」

これからは俺が誰かの第二の人生で遊ぶ番だ。
必ず上位の神までのし上がってやる！

さあ、第三の人生の始まりだ！！

いつが終わりかは俺が決める！！（後書き）

はい、というわけで『これは第二の人生という名のゲームだ』は終了です。

今まで根気強く読み続けてくださった皆様、ありがとうございました。初作品だったので色々と改善点はあったでしょうが、それは今後の作品で直していきます。

最後に、ご愛読、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2426v/>

これは第二の人生という名のゲームだ

2011年8月30日11時19分発行